令和３年度　全国私立中学高等学校

# 全国私学教育研究集会京都大会

## 研究集録

# 世界を見つめ、未来に挑戦
# ～私学の先進的精神は時代を超えて～

主催　一般財団法人日本私学教育研究所

実施　近畿地区私立中学高等学校連合会／京都府私立中学高等学校連合会

後援　京都府／京都市／日本私立中学高等学校連合会

# 目　　次


発刊のことば　1

実施概要　2

大会役員等一覧　3

全体集会　4

　開会式　5

　京都府私立学校活動紹介　8

　報告　9

　記念講演　１２

部　　会　１６

　私学経営部会　１６

　教育課程部会　３０

　生徒指導部会　４５

　特色教育部会　６４

　グローバル教育部会　７９

参加者アンケート　９４

参加者数　１０３

開催地・研究目標一覧　１０４

編集後記　１０８

# 発刊のことば

一般財団法人日本私学教育研究所所長　平　方　邦　行

令和 3 年度全国私学教育研究集会京都大会は、令和 3 年 10 月 21 日・22 日の 2 日間、京都府京都市の国立京都国際会館、ザ・プリンス京都宝ヶ池、リーガロイヤルホテル京都で開催され、全国から 380 名の教職員の皆様にご参加頂きました。

本大会は、京都府、京都市及び日本私立中学高等学校連合会の後援により、近畿地区私立中学高等学校連合会、京都府私立中学高等学校連合会及び一般財団法人日本私学教育研究所が実施いたしました。

コロナ禍ではありましたが、昨年に引き続き、未曾有の危機を乗り越えるため、全国の私立中学高等学校が一丸となって前進していきたいという思いから、大会の開催に向け準備を進め、全国の私立中学高等学校中等教育学校から多くの方々にご参加頂き、無事開催することができました。

初日の開会式では、吉田晋・当研究所理事長と摺河祐彦・実行委員長による挨拶、さらに公務ご多忙にもかかわらず、西脇隆俊・京都府知事、門川大作・京都市長にご臨席賜り、ご祝辞を頂きました。最後に、下屋浩実・日本私立中学高等学校連合会中部支部支部長から次年度の岐阜大会のご案内を頂き、開会式を終了いたしました。

開会式後の全体会では、洛星中学高等学校オーケストラ部の生徒による「オーケストラ演奏」が披露され、続いて、日本私立中学高等学校連合会及び当研究所から「教育政策と私学情勢について」をテーマに報告を行い、最後に、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫常務理事の冷泉貴実子氏より「京の文化」と題した記念講演を頂きました。また記念講演の最後には京都光華中学高等学校の生徒による和歌披講も行われ、「京都らしい」大会となりました。

2 日目は、私学経営部会、教育課程部会、生徒指導部会、特色教育部会、グローバル教育部会の 5 つの部会に分かれ、それぞれのテーマのもと、講演、実践発表、パネル・ディスカッション等が行われ、多大な成果を収めることができました。

この度、上記の研究成果等を集録にまとめました。各学校の今後の教育活動にお役立て頂ければ幸いです。

最後に、本大会の成功は、講演・発表を頂いた方々、運営に携わって頂いた近畿地区私立中学高等学校連合会と京都府の私立中学高等学校の先生方と当研究所の役員、専門委員の先生方、全国から参加された先生方、また会場のスタッフの方々、すべての方々が一丸となって、ご準備、ご協力を頂いた結果と確信しています。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

# 実　施　概　要

1　研究目標　**世界を見つめ、未来に挑戦　～私学の先進的精神は時代を超えて～**

2　会　　期　**令和３年１０月２１日（木）～２２日（金）の２日間**

3　会　　場　初　日　**国立京都国際会館**（全体集会・教育懇談会）
　　２日目　**ザ・プリンス京都宝ヶ池**（私学経営・教育課程・生徒指導部会）
　　**リーガロイヤルホテル京都**（特色教育・グローバル教育部会）

4　参加人員　**３８０名**（募集６００名）

5　基本日程

| 月日 | 9 30 | 10 | 11 | 12 | 13 30 | 45 | 14 15 | 15 15 | 45 | 16 | 17 30 | 45 | 18 | 19 30 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10月21日(木) | | | | 受付 | 開会式 | ★ | 全体会 ※1 報告Ⅰ | | ※2 | ★ | 記念講演 | ★ | 教育懇談会 | |
| 10月22日(金) | | 部会 | | 昼食 | 部会 | | | | | | （※1）私立学校活動紹介<br>（※2）報告Ⅱ<br>（★）休憩 | | | |

6　全 体 会　　※「和歌披講」は記念講演の中で実施。

**京都府私立学校活動紹介**

**「オーケストラ演奏」**　　**洛星中学高等学校オーケストラ部**

**「和歌披講」**　　**京都光華中学高等学校**

**報　　告**　**「教育政策と私学情勢について」**

日本私立中学高等学校連合会 会　　長　**吉　田　　晋**

一般財団法人日本私学教育研究所 所　　長　**平　方　邦　行**

**記念講演**　**「京の文化」**

公益財団法人冷泉家時雨亭文庫 常務理事　**冷　泉　貴実子**

7　部　　会

**1.私学経営部会**　**激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは**

**2.教育課程部会**　**21 世紀の世界に挑戦する新しい学びを探る**

**3.生徒指導部会**　**急速に変容する世界を生きる若者の育成を考える**

**4.特色教育部会**　**AI の時代を生き抜く知恵と力の育成**
**～建学の精神を根底に、未来に挑戦～**

**5.グローバル教育部会**　**私学が変える日本の教育～グローバルスタンダードへの挑戦～**

# 大会役員等一覧

1　大会役員（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| **吉　田　　晋** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 理事長 |
| | 富士見丘中学高等学校 | 理事長･校長 |
| **長　塚　篤　夫** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 副理事長・全国集会総括責任者 |
| | 順天中学高等学校 | 校長 |
| **山　中　幸　平** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 副理事長 |
| | 学校法人山中学園 | 学園長 |
| **平　方　邦　行** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 理事・所長 |
| **鈴　木　康　之** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 理事・全国集会副総括責任者 |
| | 水戸女子高等学校 | 理事長・校長 |

2　実行委員（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 近畿地区私立中学高等学校連合会 | 会長 |
| **摺　河　祐　彦** | 兵庫県私立中学高等学校連合会 | 理事長 |
| | 姫路女学院中学高等学校 | 理事長・高校長 |
| 副委員長 | 京都府私立中学高等学校連合会 | 会長 |
| **佐々井　宏　平** | 学校法人永守学園 | 常務理事 |
| | 京都先端科学大学附属中学高等学校 | 校長 |
| **那　須　文　英** | 滋賀県私立中学高等学校連合会 | 会長 |
| | 滋賀短期大学附属高等学校 | 校長 |
| **辻　本　　賢** | 大阪私立中学校高等学校連合会 | 会長 |
| | 学校法人金蘭千里学園 | 理事長 |
| **田野瀬　太　樹** | 奈良県私立中学高等学校連合会 | 会長 |
| | 学校法人西大和学園 | 理事長 |
| **藤　田　清　司** | 和歌山県私立中学高等学校協会 | 会長 |
| | 智辯学園和歌山中学高等学校 | 理事長・高校長 |
| **北　村　　聡** | 京都府私立中学高等学校連合会 | 副会長 |
| | 京都外大西高等学校 | 理事・校長 |
| **長　塚　篤　夫** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 副理事長・全国集会総括責任者 |
| | 順天中学高等学校 | 校長 |
| **平　方　邦　行** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 理事・所長 |
| **鈴　木　康　之** | 一般財団法人日本私学教育研究所 | 理事・全国集会副総括責任者 |
| | 水戸女子高等学校 | 理事長・校長 |

3　運営総括委員（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | | |
| **北　村　　聡** | 京都外大西高等学校 | 校長 |
| 副委員長 | | |
| **中　西　紳　也** | 京都廣学館高等学校 | 理事・校長 |
| **山　本　綱　義** | 京都精華学園中学高等学校 | 理事長・校長 |
| **初　田　泰　宏** | 京都文教中学高等学校 | 理事・校長 |
| **兒　島　裕　之** | 福知山成美高等学校 | 理事長・校長 |
| **阿　南　孝　也** | 洛星中学高等学校 | 理事・校長 |
| **福　家　崇　明** | 京都産業大学附属中学高等学校 | 理事・校長 |

# 全　体　集　会

1　日　　時　**令和３年１０月２１日（木）**13 時～17 時
2　会　　場　**国立京都国際会館　１階「Annex Hall」**
3　開 会 式
　(1)　開会のことば
　　副実行委員長　**佐々井　宏　平**
　(2)　主催者挨拶
　　一般財団法人日本私学教育研究所　理事長　**吉　田　　晋**
　(3)　実行委員長挨拶
　　近畿地区私立中学高等学校連合会　会長　**摺　河　祐　彦**
　(4)　来賓祝辞
　　京都府知事　**西　脇　隆　俊**　様
　　京都市長　**門　川　大　作**　様
　(5)　登壇者紹介
　(6)　次期開催地区代表挨拶
　　日本私立中学高等学校連合会中部支部　支部長　**下　屋　浩　実**
　(7)　閉式の辞
　　運営総括委員長　**北　村　　聡**
4　全 体 会
　**京都府私立学校活動紹介１　「オーケストラ演奏」**
　　**洛星中学高等学校オーケストラ部**
　**報　　告　「教育政策と私学情勢について」**
　　日本私立中学高等学校連合会　会長　**吉　田　　晋**
　　一般財団法人日本私学教育研究所　所長　**平　方　邦　行**
　**記念講演　「京の文化」**
　　**公益財団法人冷泉家時雨亭文庫　常務理事　冷　泉　貴実子**
　**京都府私立学校活動紹介２　「和歌披講」**
　　**京都光華中学高等学校**
5　全体集会運営委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 中　西　紳　也 | 京都廣学館高等学校 | 理事・校長 |
| 副委員長 | 塩　見　浩　二 | 京都廣学館高等学校 | 教育企画室長 |
| | 奥　田　智　一 | 福知山淑徳高等学校 | 副校長 |
| | 脇　坂　正　宏 | 京都廣学館高等学校 | 法人事務局次長 |
| | 小　阪　靖　子 | 京都光華高等学校 | 教頭 |
| | 舛　田　康　三 | 平安女学院中学高等学校 | 教頭 |
| | 清　水　泰　行 | 洛陽総合高等学校 | 事務局主任 |
| | 山　田　友　能 | 大谷中学高等学校 | 宗教・国際センター長 |
| | 田　中　恵　龍 | 京都女子中学高等学校 | 教諭 |
| | 澁　谷　貴美子 | 京都廣学館高等学校 | 養護教諭 |
| | 坂　本　　愛 | 京都外大西高等学校 | 養護教諭 |

# 開　会　式

**【開会の言葉】**

**全国私学教育研究集会京都大会　副実行委員長**
**佐々井宏平**

皆様こんにちは。ようこそ秋の深まりを感じます京都にお越し下さいました。心より歓迎を致します。令和３年度全国私学教育研究集会京都大会の開会にあたり、ご公務ご多用の中、京都府知事、西脇隆俊様、京都市長、門川大作様のご臨席を賜り、そして、本日全国各地より先生方をお迎えし、大会を迎えることができました。本当に心から感謝を申します。ここに、「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」のスローガンのもと、声高らかに今年度の全国私学教育研究集会京都大会の開会を宣言いたします。

**【主催者挨拶】**

**一般財団法人日本私学教育研究所　理事長**
**吉田　晋**

皆様こんにちは。昨年は秋田県で全国私学教育研究集会を実施いたしました。その際、334 名の参加でしたが、無事成功裡に終え、そして今年を迎えました。当然、来年は通常通り開催できると話していましたが、新型コロナウイルス感染は拡大する一方でした。本当にどうなることかと思っています。しかし、それにもかかわらず、京都府を中心として、近畿地区私立中学高等学校連合会の先生方のご尽力とご厚意で、この大会を無事、開催させて頂くことができました。改めてお礼を申し上げます。

そして、本日、ここ数年で現役の知事・市長がお二人とも開会式にご臨席頂くことは初めてではないかと思います。私は門川京都市長とは教育長時代から何度もお話をさせて頂いたお仲間なのですが、その門川市長にもご臨席頂いて、この大会が開催できることは本当にうれしく思っております。やはり、知事・市長に私学教育を理解頂いていることは本当にうれしいことだと思います。私達、私学ははっきり言うと本当に苦労しています。しかし、コロナ禍においても１つ１つの学校があくまでも子ども達のために対面式というものを最重要課題として日々努力して参りました。その成果が出てくるものと思っています。今回、この大会でも大変貴重な数多くの講師の先生方にお話し頂きます。是非、本日と明日の２日間を皆様の力にして頂き、これからの私学教育のお仲間をさらに増やしていける、そういう大会にしたいと思っていますので、よろしくお願い致します。

本日は本当にお忙しい中、知事・市長をはじめ、皆様お集まり頂き有り難うございました。

**【歓迎の言葉】**

**全国私学教育研究集会京都大会　実行委員長**
**摺河祐彦**

令和３年度全国私学教育研究集会京都大会を開催いたしましたところ、このように全国から多数の先生方にお越し頂きました。コロナ禍において、これだけの先生方がお集まりになるということから先生方の教育に対する情熱が感じられます。その先生方に応えるべく、関係者一同、心を込めて本大会の対応をさせて頂きます。

本大会は京都府私立中学高等学校連合会会長の佐々井宏平先生、副会長であり本大会運営総括委員長の北村聡先生を中心に多くの京都府の先生方が心を込めて企画と準備をして頂きました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

現在、我が国は人口減少社会を迎え、子どもが少なくなっているにも関わらず、海外の国々についていかなければならないというような国際社会を迎えています。そのような時に本大会のテーマを「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」とさせて頂きました。手前味噌でございますが、時宜を得たテーマであると考えています。このテーマに沿って、先生方にとりまして有意義な研修にな

るように全力を挙げて運営をさせて頂きたいと思いますので、2 日間よろしくお願いします。

**【来賓祝辞】**

**京都府知事　西脇隆俊　様**

皆様こんにちは。京都府知事の西脇でございます。

令和 3 年度全国私学教育研究集会がここ私学発祥の地である京都で開催されますことをお慶び申し上げますと共に全国各地から京都にお越し頂きました皆様を心から歓迎をいたします。

またコロナ禍の中で開催にご尽力を頂きました一般財団法人日本私学教育研究所の吉田晋理事長をはじめ関係の皆様のご熱意、また、ご努力に対しましても心から敬意を表したいと思います。コロナにつきまして一言申し上げますと、第 5 波、ようやく府民の皆様、事業者の皆様のご協力によりまして乗り越えることができました。改めて皆様のご協力に感謝を申し上げますとともに、今の医療現場では医療従事者の方々のご努力にも心から感謝を申し上げたいと思います。この日程を選ばれたのはすごいと思います。恐らく第 5 波と、いずれ来る第 6 波の間で最も感染が落ち着いている状況でございまして、このような感染状況になったのも日頃から私学教育、子どもの教育に正面から向き合っておられます皆様の直向きな姿勢が通じたと思っています。京都府で開催されるのは平成 9 年以来、24 年ぶりと伺っています。

今回のテーマが「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」ということで、今、学校現場では様々な課題がございます。SNS の問題や校則の問題、将来に向かっては AI 時代にどう対応するかとか、また、グローバル人材をどのように育成するか、そのような様々な課題につきまして、部会では実践的な研究も発表されると伺っています。どうかそれぞれのテーマにつきまして、皆様の理解が深まり、それがそれぞれの学校の教育理念に基づいた将来の実のある人材育成につながっていくことを大いに期待したいと思っています。

文化・芸術活動について一言申しあげますと、本日はこの後、全体会で京都府内の学校の活動が紹介されると聞いております。私の母校であります洛星中学高等学校のオーケストラ部の演奏、京都光華中学高等学校の生徒達による和歌披講、それから冷泉家時雨亭文庫の冷泉貴美子・常務理事の「京都の文化」と題する講演が行われると聞いております。来年度、いよいよ文化庁が京都に移転してきますが、その文化庁と京都府で共催している行事に全国高校生伝統文化フェスティバルというものがございます。コロナということで今年はハイブリッドな開催になりましたけれども、民謡や和太鼓、剣舞、様々な舞踊、地域の伝統文化を修練して身につけた高校生達の本当に素晴らしいパフォーマンスが披露されます。特に今年はハイブリッドになりまして、今まで京都を来なければ見ることができなかったものがすべてオンラインで全国各地の高校生も見ることができるようになったということで裾野が広がったと思っていますが、やはり学校教育において文化芸術活動を充実して頂くということは子どもの感性、想像力を豊かにするということはもちろんですが、一方で地域の伝統文化、生活文化、これを後世に継承していくためにも極めて有意義な活動と思っています。地域の伝統文化の担い手が少なくなって、どのように保存継承していこうかということは全国共通の課題となっています。本大会ご参会の皆様におかれましては全体会を見て頂いた上で、学校教育におけます文化芸術活動の充実にも意を用いて頂ければ幸いでございます。この集会が実り多いものになるとともに私学教育のますますのご発展、ご参会の皆様のご健勝ご多幸を心から祈念いたしましてご挨拶とさせていただきます。

**京都市長　門川大作　様**

皆様こんにちは。全国各地で地域に根ざし、徹底的に子ども達を大切にしようという教育に傾心して頂いております。ようこそ京都にお越し頂きました。心より歓迎申し上げます。また、吉田理事長、近畿地区の摺河会長、京都の佐々井会長をはじめ、関係の方々が京都大会を何としても成功させようとご尽力され、この研究集会が近づいてくると驚くほど京都府の感染者が減ってきました。一昨日の京都市内の新規感染者は 0 人です。昨年 4 月以来 1 年 4 ヶ月ぶりでした。ただ、西脇知事としっかりと連携し、第 6 波、第 5 波の 2 倍の感染者が京都で発生しても徹底して命と健康、暮らしを守りぬく、

今、落ち着いているときにその体制を構築していこうという取り組みを進めています。修学旅行生が戻ってきて頂いています。うれしく思います。実は京都の市立小中学校、そして高校、高校は海外の方もありますが、小中学校は昨年、全校で修学旅行を実施しました。今年も全校で実施するという構えでやっております。感染拡大はございませんでしたが、徹底して、皆様方もご尽力頂いている子ども達の学びを止めない、集団的な学びを止めない。小中学校の修学旅行も保護者が心配する声はたくさんありました。卒業式では感謝の声を聞いております。感染防止と教育活動をいかに両立させていくか。こういうことをしております。京都への修学旅行生のために 24 時間 360 度、修学旅行生専門の相談の電話回線を確立しています。一人でも感染者が出た、発熱者が出た場合、そのグループ全員に PCR 検査をして、そしてきちっと用意された処理をする。そして保護者の要請があれば、旅行会社と相談しながら、京都市が責任を持ってご自宅までお送りをするということをしております。

さて、「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」という素晴らしいテーマはその通りです。京都は私学経営発祥の地であります。空海が綜芸種智院を創設した。その理想は総合的に学び、教育環境の整備、資質良い教師陣の組織、さらには、教師と学ぶ人の生活をしっかりと保障することが大事と書かれていますが、時代を超えてきていると思っています。京都府は本当に私学が頑張っています。小学校段階で約 1 割が私学、中学校段階では約 2 割が私学、そして高等学校段階では 6 割が私学に通っています。先日、文部科学省が全国学力テストの結果を発表しました。私が教育長の時は、中学校は 30 番台・40 番台でした。中学校に行ったら学力が下がると言われました。私学に通う子どもが増えた結果、今年の発表では全国 47 都道府県で 9 番になりました。こう思うと小学校、中学校の子ども達また高等学校に通う生徒も含めて、京都府の子ども達の学力は全国トップ水準でしょう。近所によい私学がたくさんあるとその地域の子どもの多くが私学に行きます。建学の精神に惚れて、実践に惚れて私学に進学する人がいます。そのため、公立に来る人の学力をどう保障するか、私学の教育のレベルが高く抜けているから公立の学力が低いということは絶対に許されません。公立の先生方は私学教育に学びながら取り組んでこられています。今後、私学が、公立が 1 人 1 人の子どもの教育にどう責任を持つかということが極めて大事だと思います。この研究集会で私達も学ばせて頂きたいと思います。

**【次年度開催地区代表挨拶】**

**日本私立中学高等学校連合会中部支部**
**支部長　下屋浩実**

先生方こんにちは。来年 11 月 21･22 日に岐阜県岐阜市において全国私学教育研究集会を開催する予定です。まだまだコロナウイルスが収束していませんので、どのような形で先生方をお招きできるのか、これから検討した上で、来年、お迎えしたいと思っています。記念講演には岐阜県のスーパーカミオカンデで研究をなさっている、東京大学宇宙線研究所の梶田所長に小中高の教育現場における理科教育にスーパーカミオカンデを関連させた内容で講演をお願いしています。

是非とも多くの先生方に岐阜に参集頂ければと思っています。よろしくお願いいたします。

**【閉式の言葉】**

**全国私学教育研究集会京都大会　運営総括委員長**
**北村　聡**

本日は西脇京都府知事、門川京都市長のご臨席を賜り、本大会の開会式を迎えることができました。厚く御礼を申し上げます。昨年、秋田県にて大会がコロナ禍で見事に成功を収められました。その秋田大会からいろいろなものを学ばせて頂きました。日本私学教育研究所とともに準備を進めて参りました。本日は全国各地よりご参集頂き、心より歓迎申し上げます。京都といたしましても、いろいろと行き届かぬところがあるかと存じますが、どうぞ京都の秋を存分にお過ごし下されればと思います。京都には昔から日本文化が深く根付いています。この大会が今後の日本の私学教育の発展に少しでも貢献できることを願いまして、簡単ではございますが、京都大会の開会式の閉式とさせて頂きます。

# 京都府私立学校活動紹介

## 「オーケストラ演奏」

洛星中学高等学校オーケストラ部

洛星中学高等学校は京都市にある創立 70 周年を迎えるカトリックの男子校です。本日は 2 曲演奏させて頂きます。1 曲目は創立 60 周年を記念して作りましたオリジナルの交響曲「翔星（しょうせい）」です。作曲者は OB の安村好正さんです。作品名の「翔星」は空高く飛ぶ意味の「翔（かける）」と学校名にも使われている「星」を合わせたもので、洛星の生徒達が将来世界で幅広い分野で活躍してほしいという願いが込められています。2 曲目はサンサース作曲のアルジェリア組曲よりフランス軍隊行進曲です。指揮は顧問の西尾望が務めます。

（洛星中学高等学校　校長　阿南孝也）

## 「和歌披講」

京都光華中学高等学校

京都光華中学高等学校では 20 年前から伝統教育を行っており、例えば、お花、お茶、日本舞踊といういろいろなことを世紀の授業の中で行っています。その中で冷泉家の和歌も行って頂いている。冷泉家の和歌とは昔の和歌を現在に続けている和歌であるが、それを京都光華中学高等学校では行っているわけです。その中には必ず、歌い上げる意思というものが続いている。これが現在の皇居の宮中の歌会始を思い出して頂ければ分かると思いますが、実は明治の頃に代わったものです。冷泉の家にあるものはもっと古い形のもので、それを現在の京都光華中学高等学校では行っている。それをご覧頂きますが、披講する歌は「秋月（あきのつき）です。これは授業時間の中で中学生や高校生にこのように詠むのですよと指導して、作られた歌です。

（公益財団法人冷泉家時雨亭文庫常務理事　冷泉貴美子）

東山　澄み上る月　待ち待ちて　古思ふ　秋の夜更ける　（高校 3 年生）

窓の月　差し入る光　君照らす　その横顔は　誰思ひやる　（高校 2 年生）

朝戸出に　秋の七草　咲き満ちて　白き月影　空に残れる　（高校 3 年生）

山端を　離れて上る　月清か　紅葉染め増し　輝き渡る　（高校 2 年生）

秋の来て　真澄の鏡　夜の庭　耳を澄ませば　虫の音聞こゆ　（中学 2 年生）

# 報　　告

## 「教育政策と私学情勢について」

日本私立中学高等学校連合会　会　　長　**吉　田　　晋**

私立中高を巡る現状と私学助成の拡充の最近の状況だが、出生数は毎年減少し、2019 年には 90 万人を割り込んだ。このコロナ禍でさらに減っている。更に、コロナの影響で地方流出が増え、東京都 23 区内の出生数の減少が懸念される。子どもが減れば生徒数も減る。近年、学校数に大きな変動はないが、今後、子どもの数が減少し続ければ、私立学校でも廃校の可能性がある。廃校等にならないためにも、各都道府県における公私連絡協議会の役割が大切だ。卒業生にとって、学校が廃校になることは残念なことだ。

本来、公立学校が行うべきことは義務教育の延長として同等の教育を与えることだ。特化した教育は私学に任せてほしいと訴えている。過去 5 年間の私立中高一貫校の生徒数は徐々に増えている。生徒達が望む教育を 1 人でも多くの生徒達が受けられる環境づくりが大切だ。

次に今年の助成金の概算要求である。新型コロナウイルス感染症の終息が見えない中、恒常的な感染症対策を講じながら、私立学校は、国の指示に従って対面型を中心に授業等を実施している。私立高等学校等経常費助成費補助金は各都道府県の生徒 1 人当たりの差を見ると、格差が大きくなっている。この格差を縮めていくことは大きな課題の 1 つだ。満額出していない県があるために格差が生じる。地方交付税はここ数年、文部科学省の予算に連動して、毎年、少しずつ増やして頂いている。これは、総務省が私立学校を理解しているからだ。

次に高等学校等の就学支援である。令和 2 年度から実質無償化が始まり、年収 590 万円未満の世帯への支援金も引き上げられた。しかし 592 万円の世帯はどうするのか。もう少し柔軟さが必要だ。さらにこれは授業料対応であり、施設設備等は含まれていない。学納金にそぐわないという面もあり、教育の実質無償化という言葉を使うのであれば、もう少し拡張してほしい。

中学校の支援金についてである。親の家計急変で、授業料が払えない家庭の子どもには、心情としては続けさせてあげたい。子どもが自らの将来の夢や希望を実現するために選択した私立学校を親の倒産等で辞めさせられたら、子どもの心に何が残るだろう。

学校における感染症対策の充実については来年の概算要求と共に、今年の補正でもさらに進めていく。

GIGA スクール構想については、コロナになった途端に、1 人 1 台という話になり、公立学校ではそれを実施した。しかし、これはあくまでも学校所有だ。コロナ禍で昨年 4 月に学校は休校したが、私立学校でもオンラインで授業ができたのは 1、2 割である。それは、それぞれの学校が保護者に協力頂き、生徒 1 人 1 台端末を実行できていたからであり、そうでない場合は、環境を整えるために大変だったと思う。ところが今年はもう当たり前のようになった。しかし、3 年生の卒業後、その端末はどうするか。貸し出しだから、次の学年に回る。これをずっと回して、5 年も 6 年も使えるのか。自分のものではないものを大切に使えるのか。故障は誰が補償するのか。ICT についてはもう少し考えなくてはいけないし、GIGA

スクールの運営支援センターを整備するというのも難しい。GIGA スクール構想を実現するためには、まず、100%補助を実現しなければ、とても進まない。

高大接続改革の最初の目的は、大学入試を変えることによって高校教育、大学教育を変えていこうということだ。世界から遅れている部分を変えていこうと始まったものが、令和元年 11 月、12 月に「見直す」から導入を見送る話となった。今思うと、コロナ禍の状況で 4 技能試験は恐らく追いつかなかっただろう。しかし、昨年の 6 月の英検の大渋滞を思えば、受験生サイドは本気だ。21 世紀を担っていくグローバル人材を育成していく中で英語をツールとして使い、対等に話し合い、交渉し、プレゼンテーション、討論をきちんとできる人材を育てていくことは今の日本にとって必要だ。各大学のアドミッションポリシーに基づいて、英語 4 技能や記述式問題を二次試験で課し、高校で習得した新しい学力をしっかり評価してほしいということだ。これは子ども達のためである。これからの子ども達を世界に羽ばたかせるためにどうしたらいいかという話だ。高校では、PBL 等もどんどん進み、探究型学習も本当に行っている。しかし、暗記型の一発試験で全部終わる。このままだと日本の国自体がおかしくなっていく。

令和の日本型学校教育の構築である。これは大きな柱で言うと、高等学校を「普通科偏重から、特色をつける」と理想論を言っている。また、日本型学校教育といわれていることはすでに行っている。なぜ、これを令和の教育としたのか。

文部科学省は通信制教育の改革を徹底的にやると言っている。このコロナ禍によって、緊急事態宣言の間、通学したい子どもは通学し、通学したくない子どもはオンライン授業を受けたが、「緊急事態宣言が解除になったが、不安だから、行きたくない」と言われたらどうするのか。今までオンラインでできたことを駄目にするのか。不登校気味の子ども達が、それを強く言い出したら断れない。そうなると、全日制普通科の学校が通信制普通科の学校になってしまう。対面で行うことによって、子ども達は成長する。通信制については設置認可基準などを厳しくしていかなければならない。

学校法人ガバナンス改革会議が行われている。私学は、先達が自分達の私財を寄付して作ってきた学校だ。一般の公益法人とは違う。この学校法人制度は、日本独特の素晴らしい制度だ。今の学校法人制度だから今の教育ができている。理事、評議員は、ボランティアで学校運営をサポートしてくれるような方々だ。このガバナンス制度によって、外部の教育を分かっていない人間が入り、単純にお金でいろいろなことを計算されたのでは教育はできない。子どもにかける部分とかけない部分、全部分かっていなければできない。それを強く訴えたい。

一般財団法人日本私学教育研究所　所　　長　**平　方　邦　行**

吉田会長から少子化の話があったが、日本の人口のピークは 2010 年で 1 億 2800 万人と言われている。ところが、2010 年をピークに今度は減っていく。減り続けていく日本において、増え続けていた時と全く同じ教育を続けていってはいけない。子どもが減り続けている中で、教育として行わなければいけない課題はたくさんある。今の子ども達が 20、30 年後と社会で活躍していく時には消費型の社会から循環型の社会を作ることが重要になる。その中で日本私学教育研究所は日本私立中学高等学校連合会との関わりの中で、全国に必要な研修を実施している。日本私学教育研究所では初任者研修から管理職研修まで、体系的な階層別研修を開催している。常に私立学校のニーズに応えたいという思いがある。

私学経営研修会の中で、私は「一方通行型の 20 世紀型の教育、つまり教える人と教わる人がはっきり分かれているレクチャー型の教育が、21 世紀の今も続いていることをどうにかするための『21 世紀型の教育』を、踏み込んで考えていかないといけないのでは」ということを話した。JABEE（一般社団法人日本技術者教育認定機構）という私立大学の評価認定をするものがある。それぞれの大学の評価を認証している。アメリカの大学は当たり前のように行っている。もし私立の中学高等学校でもできれば、私立学校としての存在意義は大きく変わるのではないか。そのためにその勉強を進めている。

大学入学共通テストに関して、2021 年 7 月に 4 技能でなく 2 技能で行うことになった。つまり来年の高校 1 年生が大学受験を迎える時には英語は 2 技能となる。国語と数学の記述試験は行わない。ということは、後はそれぞれの大学が良心を持って 2 次試験で行う、あるいは、外部の試験を合否に使うなどの方法しかない。なお、これに伴って、英語 4 技能教育特別部会も 11 月 5・6 日と令和 4 年 2 月 25・26 日に Cambridge 大学が監修したワークショップを含めた研修を行う。

また、Cambridge Experience が今年、日本の検定教科書に採用された。それを使うのは私立学校のみならず、公立学校でも使用を表明しているところがいくつかある。

さらに文部科学省の先導的なオンライン英語研修実証事業においては、850 名のうち、私立は 150 人分の枠をもらい、約 120 人が受講している。文部科学省は「私立の教員は、公立の教員と比べ、レベルが高く、特にディスカッションに差がある」と評価している。

英語 4 技能教育特別部会（令和 4 年度から英語 5 技能教育特別部会に改称）では、文部科学省の実証授業よりレベルの高い内容で、対面・双方向の研修を行っている。状況を考えながら来年以降も続けたい。

最後に、教員免許更新制の廃止である。我々私学は長年、教員免許更新制の廃止への方向性を訴えてきたが、ようやく議論が進み、来年以降に廃止となる。中央教育審議会で「令和の日本型学校教育」を担う教師のあり方について議論し、特別部会の審議が色々まとめられている。教師は学び続ける存在であることが期待されており、審議の過程では「教員免許更新制は新たな教師の学びの姿を実現する上で阻害要因となる」と言い切っている。だから、「発展的に解消し」と説明している。今後、教師の専門性の高度化が進んでいくことが期待され、そのために行うことが色々と書かれている。私立学校は教育委員会の傘下には入っていない。しかし今回の教職員支援機構の文書を見ると、あたかも私立学校も同じ研修をやらなければいけないような言い回しとして書かれている。気をつけないといけない。

どこまでも、私立学校は建学の精神を尊重して、独立性、先進性を踏まえた教育を創造していかなければならない。

# 記念講演

## 「京の文化」

公益財団法人冷泉家時雨亭文庫　常務理事　**冷　泉　貴実子**

本日は 10 月 21 日である。20 日の地域もあるが、おおむね、世界では 10 月 21 日である。しかし、それは私達の傲慢な考え方であり、イスラム暦の国もあれば、太陰暦の国もある。私達が現在使用している暦は、明治 5 年から使われ始めた。それ以前と以後を比較すると、明治 5 年以前までがとても長く、当時は旧暦を使っていた。

旧暦でいうと、本日は 9 月 16 日だ。陰暦は、太陽ではなく月を基準とした暦である。旧暦の朔日は、東の空から月が昇るが、よく見えない。そして西の空に太陽が沈んだとき、ようやく見える月が三日月である。三日月が夕方の西の空に見えると、3 日だと分かる。更に、数日後には半分ほどの月が見えてくる。満月が十五夜なので、半分の月は 7 日、あるいは 7.5 から 8 日くらいの月で、太陽が西の空に沈んだあとに見える。半月が見えると、今日は 7 日だと分かる。そして満月になる。満月は、西の空に太陽が沈んだと同時に東から昇り、一晩中輝き、明け方に西の空に沈む。満月は 15 日である。それから少しずつ月は欠けていき、1 時間近く月の出が遅くなる。16 日の月は、ほんの少しだけ欠ける。それは 1 時間ほど、いざよう。いざようというのは、ぐずぐずするという意味で、16 日の月は、いざよいの月という。

そして、17 日になると満月の出から 2 時間弱遅れる。この月は、立っていると出てくることから、立待の月という。18 日にはより月の出が遅くなり、立って待てず座って待つことから、居待の月という。19 日にはこれまで以上に遅れるため、座っても待てず、寝て待つと出てくることから、臥待の月という。

以降、更に月の出が遅くなる。25 日も過ぎると、明け方近くにようやく出てきて、月が東の空にあるまま太陽が昇り、空にあるまま月が消えていく。月が空にあるまま夜が明けることから、有明の月という。有明の月とは、東の空で明け方にしか見えない月のことである。

この 1 周を、以前は、ひと月といい、月の周期を意味していた。それが、大の月、小の月と並んでいく。以前は、29 日か 30 日が月の 1 周だった。今は、1 月は大の月、2 月は小の月と決まっているが、昔は陰陽道の陰陽師の計算により、毎年変化していた。そのため、1 月大の月、2 月大の月、3 月小の月の年もあれば、1 月小の月、2 月大の月、3 月大の月の年もあった。今のような 365 日何時間何分という 1 年も、29 日と 30 日の繰り返しのため、季節とのずれが生じる。

その季節とのずれを調整するために、旧暦では、あいだに閏月を入れていた。例えば、1 月、2 月、閏 2 月、3 月や、1 月、2 月、3 月、4 月、5 月、閏 5 月などである。明治 5 年までの旧暦は、現在よりも変化が激しく、一定ではない暦だった。その暦でいうと、1 月、2 月、3 月が春、4 月、5 月、6 月が夏、7 月、8 月、9 月が秋、10 月、11 月、12 月が冬だった。旧暦の春は立春に始まり、1、2、3 という春の月があり、春の節と夏の節が分かれる。その節と節を分ける日が節分で、節分の次の日が立夏だった。そして、4、5、6 と夏の月があり、節分の次の日が立秋。7、8、9 と秋の月があり、節分の次の日が立冬。10、11、12 月と冬の月があり、最後に節分があって、次の日が立春とされていた。

現在では、4 回あるべき節分が、鬼は外、福は内の春と冬を分ける節分の 1 回のみとなり、節分の次の日はいつも立春である。例年、2 月 3 日が節分で 4 日が立春、あるいは 4 日が節分で 5 日が立春である。この節分は太陽暦で考えられており、その前後にお正月を持ってきて、1、2、3 というのが旧暦の春の月である。2 月 3 日や 4 日が春だといっても、まだ寒い時期である。現在の私達は季節を、春はぽかぽか、夏は暑い、秋は涼しい、冬は寒いと、温感で決めているが、当時は温度ではなく、日の長さで季節を考え

ていた。今でも冬は夜が長く、最も夜が長い真冬では、夕方 4 時には、うす暗く感じる。今は電灯があるが、当時はなかったので真っ暗闇だった。暗がりというのは、何もできない。もちろん蠟燭の火も油火もあったが、それでも暗かっただろうし、また、それらはとても高価なものだった。そのため冬の間、人は寝てばかりいた。4 時に日が暮れるので、晩御飯は 3 時頃食べる。朝も 8 時頃まで暗いので、ずっと暗闇で生活していた。暗いというのは、人間にとってはとても怖いものだ。だから、2 月 3 日、4 日くらいになると、寒いけれど、少し日が長くなり、春がやって来たと感じていた。これが昔の人が感じた春で、立春に春がやってきたのだ。

『袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ』。紀貫之の歌である。「袖ひちて」は「袖を濡らして」、「むすぶ」は「凍る」という意味で、立春というのを念頭において、「きっと春風が凍った氷を溶かしていくだろう」という話である。続いて春。春といえば梅に鶯だ。春の花というと、パンジーやヒヤシンス、チューリップなどがあげられるが、それらは片仮名の花で、日本の春の野にはない。タンポポやスミレはあるが、タンポポは古い外来種といわれており、ツボスミレは、ほんの小さなスミレで大きいものではない。それに対して、春一番に咲くのは木の花、梅である。梅は美しい花だけでなく、美しい匂いがある。実際に、梅で鳴くのは鶯ではなくメジロだが、メジロは歌に詠まれない。鶯は梅が咲くときには京都におらず、梅が散ってからやってくる。それでも、梅に鶯というのが春の象徴だった。『梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽白たへに淡雪ぞ降る』。梅の枝に鳴いて、枝移りしている鶯の、羽に白妙の淡雪が降っている、という歌である。春になって降る雪のことを淡雪といい、淡雪は袖に留まらぬ雪といわれている。これに対して、冬の雪は白雪という。もちろん、冬でも袖に留まらない淡雪が降ることもあるし、反対に、春になって白雪が降ることもある。それでも、春は淡雪と、歌の世界では決まっている。

私達は、春にはどんな雪が降ろうとも、淡雪が降ってくるという、この言葉だけで、春の浅い気分を思い浮かべ、春浅いときに袖に留まらぬ雪が降るとイメージできる。これは日本語の豊かなところだ。そして、桜が咲く。桜は日本人が本当に好きな花で、薄紅に咲く。

冷泉の祖である藤原定家の父、藤原俊成の歌である『またや見む交野のみ野の桜狩り花の雪散る春のあけぼの』。「またや見む」は「もう 1 回見たい」という意味、「交野」は皇室の狩猟場であった大阪の交野市のことで、「み野」は皇室領を意味している。そこで桜狩りをするという歌である。京の都からは遠いため、そこで狩りをするときには、必ず一晩か二晩、宿泊するのが通例だった。このときも宿泊し、翌日の朝に桜狩りをして、桜の花の雪が散る春のあけぼの、ということである。この歌を見ると、俊成卿が桜狩りのために交野に行き、一晩、宿泊したのだと思えるが、違う。これは桜狩りという、桜の花、という題詠である。交野には必ず宿泊するというのが 1 つの常識だったため、そこで宿泊したような歌が歌われているのだ。

この基本的な共通項というのが、とても重要である。そして、卯月、皐月、水無月が夏である。京都の夏はとても暑く、湿気もある。湿度が高くて暑いと、赤痢のような病気が流行る。そのため、夏というのは、ものすごく悪い季節だと考えられていた。

特に江戸時代に、この国の基本的な考え方だった陰陽道では、積極的な性質を持つものが太陽の象徴である陽、消極的な性質を持つものが月の象徴である陰で、陰と陽がかたまって 1 つになると考えられていた。また数字にも陰と陽があり、奇数が陽数、偶数が陰数だった。七五三はあるが、六四二はない。御祝にお金を渡すときも、1 万円、2 万円、3 万円は使うが、4 万円は使わず、次は 5 万円で、以前は 6 万円も使わず、7 万円。その次は 10 万円だった。このようなことから、1 月 1 日は、正月でめでたく、3 月 3 日はお雛様、5 月 5 日は端午の節句、7 月 7 日は七夕で、9 月 9 日は重陽の節句になった。ひいふうみいよう、と数えると、9 は「ここ」になる。「ここ」が重なると書いて九重というが、九重は 9 が最高の陽数のため、9 が重なる、陽が重なることから重陽の節句という。現在は、9 が苦しむに通じるといい、病院などでは 9 を抜いているようだが、昔は 10 に上がる前の最高の陽数だった。5 月は皐月で、皐月に降るのが、五月に雨と書いて五月雨だ。五月雨は現在の梅雨の雨で、梅雨の雨が降る頃というのが、当時でいう悪い季節である。

病原菌という考え方はなかったと思うが、病気がうちの中に入らないようにするため、和薬というものがあった。和薬とは日本古来の薬のことで、菖蒲とヨモギを入れる。菖蒲は現在の菖蒲ではなく、根菖蒲

という根が香るイネ科の植物である。それらの薬をザルのようなものに入れ、軒に吊るしておく。薬を入れておく玉なので薬玉といい、それを部屋に置くことで、病気がうちに入らないようにしていた。このような習慣があるのが、現在の5月5日である。例えば菖蒲で屋根を葺き、屋根の上にその薬を乗せ、この中に病気が入らないようにする。

歌の世界では、菖蒲を「あやめ」と読む。『打ちしめりあやめぞかをるほととぎす鳴くや五月の雨の夕暮れ』。春が鶯ならば、夏はほととぎすである。ホトトギスと鳴いたことから、ほととぎすという名前になったそうで、ひと声だけ鳴く鳥、夏を知らせる、夏の象徴である。「打ちしめり」の「うち」に意味はなく、「あやめ」、これが薬の根菖蒲のことである。「あやめが香っていて、ほととぎすが鳴く、五月の雨の夕暮れよ」と詠んでいる。そして、6月で1年の半分が終わる。

ときを超えるとき、この身についた穢れを落し、新しいときを迎える、というのが日本人の古い習慣で、今も昔も変わらない。現在でも、京都では節分祭があり、夜に、節分の神様といわれる吉田神社をお参りし、節分を超え、1年の穢れを落とす。また、夏を超える時期にある、半分の穢れを落とす、夏越の祓い、水無月の祓いがある。一番簡単な祓い方は、水の中に入り体を洗う祓い方である。これを禊といい、裸か、もしくは着物を着たまま、水の中に入って穢れを落とす。現在では、京都の下鴨神社の御手洗祭など、足だけつける行事もある。更に、そこから進化した、手だけ洗う行事もある。京都の葵祭の斎王さん、潔斎といえば、手だけを御手洗川につける。また、お伊勢さんでは五十鈴川で手を洗う。これらが進化したものが、各神社の前にある手水鉢で、穢れを落とし、清める水である。

節分会が夜にあるように、ときを超える祭は、必ず夕方から始まる。昔は、夏越の祓いで1年の半分の穢れを外し、秋に向かっていった。百人一首にもある有名な歌で『風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける』。楢の小川とは上賀茂神社の境内を流れている川の名前と楢の葉が茂ること、その両方をいう。風がそよいでいる楢の小川の夕暮れに、そこで穢れを祓うために、水の中に人形を流す神事だが、それは夏の最後のしるしであると詠んだ歌である。こうして夏を超えていた。

昔は夏越の祓いをしたあとに、氷室でとった氷に、小豆を乗せて食べていた。三角形のういろうのようなものの上に、小豆が乗っている、水無月というお菓子があるが、これは、その氷室の氷をかたどったものだ。そして、厳しい夏を超え、秋がくる。

今私達の考える秋は、ヨーロッパの秋、パリの8月末の秋、枯れ葉のイメージである。それが日本に入ってきて、秋は悲しい季節、失恋の季節と思われている。ところが、特に都のあった京都では、夏はとても苦しいため、初秋の頃は、うれしい季節だった。その初めにやってくるのが、7月の七夕。織姫と彦星という恋人同士の星が、仲良くしすぎて神様に怒られ、天の川をへだてて離されてしまう。その2つの星が1年に1回だけ会える日、「ひととせ」に、「ひとたびの逢瀬を契る」、これが七夕のお祭である。昔は男が女を訪ねるのが常識だったので、7月7日の夕べに、彦星が天の川を渡っていく。そのとき、天の川に臨時の橋がかかる。一番代表的なのは、かささぎが渡せる橋である。この日は七日の月、半月が出るが、この半月を月の御船という。月を船にして渡るのだ。新暦の7月7日は梅雨の真ん中で、なかなか星は見えない。ましてや満月が出ていたり、月が出ていなかったりすると、彦星には乗る船がない。これは、旧暦の7月7日だから意味があったのだ。また、かささぎの渡せる橋と同時に、紅葉の橋もかかる。秋の象徴である、ひとしおに色づいた紅葉が橋をかける。『星合の夕べ涼しき天の川もみぢの橋を渡る秋風』。「星合」、星がデートする夕べは涼しく、天の川に紅葉の橋がかかり、そこに秋風が渡っていくという歌である。

そして、秋を知らせる鳥といえば、雁である。天然記念物である雁は、1羽では飛ばず、いつも列を作り、夕方から夜にかけて飛ぶといわれている。『白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月』。「うち」に意味はない。白雲に、羽を交わしながら飛ぶ雁の、1列に連なっている数が1羽、2羽、3羽と見えるほど、秋の月がこうこうと輝いている、という歌である。そして、9月9日の重陽の節句がくる。

9月9日は菊の節句という。菊は中国原産の花で、中国には菊慈童という物語がある。菊慈童とは、周の穆王に仕えていた美少年が、誹謗中傷で罰を受け、山の中に放逐される。そして、その山の中に咲いていた菊から落ちる露が流れる川の水を飲み、不老不死になったという物語だ。それから、菊の露は長寿を保つ、あるいは永遠の命をつかさどるという伝説が生まれ、日本にやってきた。9月8日に、菊の花の上

に綿を着せ、露がこの綿に染み渡ったら、9月9日に、これを体につけると長寿が約束される、あるいは菊の露が浮かんだお酒を飲むと長寿が約束されるといわれている。そのため、今でも菊の盛や菊正宗など、菊がつくお酒の銘柄がある。このように中国では菊の花はめでたい花だ。しかし、葉がなくなっても、かなり長く菊が咲き続けることからか、ヨーロッパでは菊をお墓に供えるようになったそうだ。その風習が日本に入ってきたため、菊の花はお葬式の献花の花になった。また白菊会といえば、献体の会のことを指すそうだ。このように、相反するイメージを抱いてしまう菊の花だが、日本では本来、黄菊と白菊こそが、命を約束する、長寿を約束するという、すごくめでたい花だったというのが、この9月9日の話である。

そして秋が更けていき、冬が迫ってくる。昔の人は、冬は暗くて嫌い。それが近くなってくると、やはりさみしくなる。『奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞くときぞ秋は悲しき』。紅葉を踏み分け鳴いている鹿の声を聞くと、秋は悲しい、という歌だ。実際に鹿が鳴くのを聞いたことがなくても、この歌を読むと、鹿が悲しげに鳴いたなと思う。ここから「紅葉に鹿」という表現が出てくる。花札に至るまで、紅葉に鹿である。なぜか、理由はない。とても不思議だが、これが日本文化の型である。

学校の教育制度の中に、絵や音楽などの芸術という科目がある。この芸術という科目は、明治維新で受け入れられた言葉だが、明治維新ではいろいろな標語、富国強兵、殖産興業、文明開化などがあった。文明開化ではヨーロッパの科学的な文明を受け入れ、それと同時に芸術も受け入れた。芸術とは、私とあなたは違うということ、自我を尊ぶということだ。自分は自分で、あなたと私は一緒ではない、というのが基本である。そのことから、現在の美術の授業では空は青くなくてよい、あなたはあなたの感じた空を描きなさいといわれる。何もあなたが私と一緒のものを描く必要はない、というのが、現代の短歌でも基本になっている。

現代短歌もまさにこの受け入れた芸術の文学の中の1ジャンルなのである。だから、私と同じことを5、7、5、7、7の中に詠む必要はなく、「あなたはあなた自身です」というのが考え方の基本である。しかし、明治維新までこの国にあった文化では、一緒であることが重要なのだ。梅に鶯の春、秋は紅葉に鹿、これが型である。これを継承しているのが和歌をはじめとした大和の文化、和の文化で、これを今でも続けているのが京都である。例えば京都の饅頭には、必ず印が押してある。春は桜、秋は紅葉、それだけで高い値段がつく。そこにわざわざ銘がついている。紅葉の印のついた饅頭に「奥山」という銘がついている。奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の、と思って食べられるかどうかが日本人の教養で、明治維新までこの国にあった文化である。

そして冬が来る。さみしい悲しい季節だが、そこにあるのが雪である。雪月花といい、雪は美しいものだ。『へだてゆく世々の面影かきくらし雪とふりぬる年の暮かな』。「面影」とは思い出のことで、「かき」に意味はなく、雪がふるの「ふる」と、経過の「けい」、「時間が経つ」をかけている。へだたってゆく世の中の思い出、これが暗くなり、何もかもがぼんやりとしていき、時間がたって、雪が降っていく、そういう年の暮れかな、こうして1年がまた始まる、というのが日本の季節であり、これこそが和の文化である。現代短歌であれば、あなたが見たこと、あなたが経験したこと、あなたが感じたことを書きなさい、というのが芸術の基本である。見たことも聞いたこともなく、梅に鶯だから梅に鶯を、紅葉に鹿だから紅葉に鹿を、月に雁だから月に雁を詠んだ歌は見たことがあるかないかではなく、そう決まっているから歌われているというのが日本の和歌の世界であり、和の美であり、今なお、それを踏襲しているのが、この京都なのである。今回の話が、現代の学校教育に生かされていくことを願っている。

# 私学経営部会

目まぐるしく時代が移り変わる中にあっても、建学の精神に基づく教育を私立学校は実践している。さらに時代を超えて発展していくため、私学経営の中に「不易流行」、即ち各学校が守り続けなければならないことと、時代に対応して変化・進化しなければならないことを改めて考察し、未来に挑戦する原動力を生み出すことが必要であろう。

当部会では、ウスビ・サコ・京都精華大学学長による講演、藤林昭一・公益財団法人京都私学振興会理事長による実践報告、さらには若手経営者によるパネル・ディスカッションを通じて、世界から見た日本の教育のグローバル化への対応の強靭化、資産運用のあり方、未来へのビジョン等、激動の時代でも強く撓まぬ私学経営について研究を深める。

1　研究目標　　激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは
2　会　　場　　ザ・プリンス京都宝ヶ池　地下２階「プリンスホール」
3　参加対象　　理事長、校長、副校長・教頭、事務局長、事務長またはこれらに準ずる管理職及び事務担当教職員
4　参加人員　　１２５名
5　日　　程

| 時間 / 月日 | 9 30 | 45 | 10 | 11 15 | 12 | 13 | 14 | 15 30 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10月22日（金） | | 開会式 | 基調講演 | 実践報告 | 昼　食 | パネル・ディスカッション | | 閉会式 | |

6　内容・日程細目

| | |
|---|---|
| 9:00 | 受　　付　　機材担当：角田　尚大<br>（松村　元喜・川崎　一輝）　　記録(写真)担当：瀧野　博史<br>記録・集録担当：瀧野　博史 |
| 9:30 | 開　会　式　　司会：山本　浩介／記録：瀧野　博史<br>１．開式の辞<br>２．運営委員長挨拶　　私学経営部会運営委員長　山　本　綱　義<br>３．運営委員・専門委員紹介<br>４．日程説明<br>５．閉式の辞 |
| 9:45 | 基調講演　　司会：中野　佳代／記録：瀧野　博史<br>講師紹介：山本　綱義<br>演　題　「真のグローバル化を目指して！～日本の子どもたちに伝えたいこと～」<br>講　師　ウ ス ビ ・ サ コ　京都精華大学　学長 |
| 11:15 | |
| 11:15 | 実践報告　　司会：寒川　稔也／記録：瀧野　博史<br>報告者紹介：寒川　稔也<br>テーマ　「京都私学の経営を支えて」<br>講　師　藤　林　昭　一　　公益財団法人京都私学振興会　理事長 |
| 12:00 | |
| 13:00 | 昼　　食 |

| | |
|---|---|
| 13:00 | パネル・ディスカッション　　司会：中澤　圭／記録：瀧野　博史<br>テーマ　「激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは」<br>パネリスト　嵯峨実允（東京都）　学校法人藤華学院　理事長<br>梅村光久（三重県）　学校法人三重高等学校　理事長<br>原田賢幸（鹿児島県）　学校法人原田学園　理事長<br>コーディネーター　摺河祐彦（兵庫県）　姫路女学院中学高等学校　理事長・高校長 |
| 15:30 | 閉会式　　司会：山本　浩介／記録：瀧野　博史<br>1．開式の辞<br>2．総括　　私学経営部会副運営委員長　林　信康<br>3．専門委員長挨拶　　私学経営専門委員長　長塚篤夫<br>4．閉会の辞 |
| 16:00 | 解散 |

7　講師・パネリスト・コーディネーター（順不同）

| | |
|---|---|
| ウスビ・サコ | 京都精華大学　学長 |
| 藤林昭一 | 公益財団法人京都私学振興会　理事長 |
| 嵯峨実允 | 学校法人藤華学院　理事長 |
| 梅村光久 | 学校法人三重高等学校　理事長 |
| 原田賢幸 | 学校法人原田学園　理事長 |
| 摺河祐彦 | 姫路女学院中学高等学校　理事長・高校長 |

8　運営委員・指導員（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 山本綱義 | 京都精華学園中学高等学校　理事長・校長 |
| 副委員長 | 林　信康 | 京都女子中学高等学校　常務理事・校長 |
| | 山本浩介 | 京都精華学園中学高等学校　副校長 |
| 委員 | 中澤　圭 | 同志社中学高等学校　教頭 |
| | 瀧野博史 | 京都廣学館高等学校　教頭 |
| | 寒川稔也 | 京都国際中学高等学校　教頭 |
| | 中野佳代 | 日星高等学校　教頭 |
| | 角田尚大 | 京都両洋高等学校　校長室室長 |
| | 川崎一輝 | 京都芸術高等学校　教諭 |
| | 松村元喜 | 京都精華学園中学高等学校　事務長 |
| | 山本元美 | 京都先端科学大学附属中学高等学校　養護教諭 |

9　専門委員・指導員（順不同）

私学経営専門委員会

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 長塚篤夫 | 順天中学高等学校　校長 |
| 副委員長 | 鈴木康之 | 水戸女子高等学校　理事長・校長 |
| 委員 | 西岡憲廣 | 札幌山の手高等学校　理事長・校長 |
| | 近藤彰郎 | 八雲学園中学高等学校　理事長・校長 |
| | 山本与志春 | 学校法人青山学院　院長 |
| | 摺河祐彦 | 姫路女学院中学高等学校　理事長・高校長 |
| | 大多和聡宏 | 学校法人大多和学園　理事長 |
| | 菅沼宏比古 | 学校法人西海学園　理事長 |

法人管理事務運営専門委員会

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 工藤誠一 | 聖光学院中学高等学校　理事長･校長 |
| 委員 | 嵯峨実允 | 学校法人藤華学院　理事長 |
| | 服部泰啓 | 学校法人信愛学園　理事長 |
| | 摺河祐彦 | 姫路女学院中学高等学校　理事長・高校長 |
| | 川島英和 | 学校法人川島学園　理事長 |
| | 野尻富太郎 | 学校法人芝学園　常務理事･事務局長 |

私学経営部会　基調講演

## 「真のグローバル化を目指して！～日本の子どもたちに伝えたいこと～」

京 都 精 華 大 学　学長
**ウスビ・サコ**

グローバル化は人、物、金、そして情報が国境を超えて自由に行き来するということ、そして、物事の価値というのは１国で決められないということが大きなポイントだ。だから、グローバル化は日本だけの基準で物事を決められない。このグローバル化社会の中で、我々がどう生きるべきか、というところでダイバーシティが非常に重要になる。人種、性別、宗教、性的指向。社会的、経済的背景、および民族性の個人間の違いがある。同化を求めずに、これらをお互いに認識するだけでいいと思う。そこに日本がどう向き合うかというところがかなり大きなポイントになる。2050 年になれば、世界人口は増えている。特にアジアやアフリカの都市人口が増えていく。だから、この世界的な人口ボーナスで恐らく日本が必要とされるようになる。例えば、この人口ボーナスへの教育だ。日本の人口は減り、40%近くが高齢化する。この中で、今の日本の社会、生活を維持するために、外国人労働者に頼らざるを得なくなっていく。さまざまな議論の場で、外国人労働者がやってくると日本語と日本の文化の素晴らしさを教えれば良いという軽い意見が聞こえてくる。外国人労働者を多く受け入れているドイツで有名な話は、労働力だけが欲しかったのに人間がついてきたということだ。外国人は宗教も価値観も生活スタイルも持っている人間だ。労働力だけがくるわけではない。この人間が日本社会の中で、居場所を改革しているかということがこれからの日本社会にとって非常に重要だ。教育の中で「文化とは学習の結果である」ということをどう考えるかが非常に大切なことになってくるのではないか。

実は、大学に求めるグローバル化というのは、日本に古くからあった。ちょうど私が来たときは留学生 10 万人計画の時代だった。あちこちの大学に留学生が増えていた。しかし、研究室で留学生が孤立したり、指導教員が留学生とどう関わるか分からなかったり、留学生と日本人学生の共存社会がなかなか難しかった。阪神大震災の後、留学生の問題が深刻になったときに私はボランティア組織を学生ながらに作った。留学生と日本人学生を組織して、みんなで国際交流しましょうという方針で、左京区の自宅に拠点を設けた。日本語の先生達と留学生をマッチングして、留学生の日本語支援も行った。毎年、鴨川で１万人動員の日本文化・外国文化の交流会をした。活動には多くの協力が得られた。私がここでやりたかったのは留学生がどうやって自分の居場所を作るかということだった。同化するつもりはなく、お客さんになりたくなかっただけだ。日本人に甘えて、日本人が我々にサービスすることではなく、一緒にコミュニケーションして、日本の若者と一緒になって社会を作っていこうという話だった。最近、イスラム教の子が来るので、学校はどうしたらいいかという研修をした。私が参加者に言ったのは、やって来る子に直接聞けばいいということだ。ある程度関われば、いろいろなことが分かる。私自身もいろいろな人と関わることによって自分の文化を再発見することがよくあった。日本人は、他の文化と出会うときに、よく独特の問題を持っている。個人的な話だが、私が 2 年間以上関わった学生達に、私のことをどう思うか形容詞で表して下さいと頼んだことがある。アラブの石油王とか、力持ち、強そう、外国の人等々だった。他の学校でもほぼ同じような答えである。もう１つ、京都精華大学の学生達に私の絵を描いてもらったが全く違う

顔になった。これは文化スキーマと言って、持っている記憶で描いているのだ。私のことをどう思いますかと聞いているときに、私ではなく、今まで自分が記憶した外国人のイメージで私のことを言っているわけである。これが一番ステレオタイプ化することになる。異文化に触れるときの捉え方、つまり他者をどう見ていくかというところは学生達の問題にもなっているのではないかと思い、これを提示した。ある意味ではやはり知識不足の問題もあると思うし、コミュニケーションが取れれば解決できるような問題であると思っている。だから、外国人という枠が作られていて、大体そこにあてはめているので、何を言っても私は外国人のフレームでしか見られないというようなことだ。そういう意味で、多様性の中で個の時代になってきているので、個としてどう見ていくかということは大切になってくる。異文化の人達を見るときに一定のフレームを作って、そこにはめるというのが恐らく日本的な便利なやり方だ。これはオリエンタリズムと呼ばれ、西洋の人が日本人を見るときも同じだ。西洋の人達も、日本を東洋としてパッケージで見ているということがある。だから、このフレーム化問題は、グローバル化時代で最もネックになっていると言われる。そういう意味で、アイデンティティーをどう大切にしていくかということは、今の若い人達にとってかなり大きなポイントになっている。エドワード・ホールは、日本社会は最も高文脈（ハイコンテクスト）社会であると言っている。直接的な言葉ではなく、文脈、あるいは暗黙のうちにコミュニケーションをとる。きちんと最後まで言葉を喋らなくても、文脈ですぐ伝わるというようなことをハイコンテクストと彼は言っている。これを日本では空気と言っている。これから留学生が増えてくる中で、あるいはグローバル化の中で、今の日本のコミュニケーションがすべて通じると思うこと自体が難しいところになる。その中で外国が日本社会をどう見ているかというところも大事だ。私が学長になったのは 2018 年で、一番に取材にやって来たのが外国メディアのニューヨーク・タイムズだ。均質化された日本社会の中でなぜアフリカ出身者が学長になったのか。外国籍、あるいは外国出身で、日本の組織のトップを務めている人間は 2%程度しかいない。多様化と言いながら、そういうところはまだまだ進んでいない。そのあとフランスやアフリカの雑誌がやって来て、私は岩倉にいるだけで 1 年間のうち最も世界に影響力のあるアフリカ人の 1 人になった。だから、それくらい日本は珍しく見られるのだ。

学習指導要領の関係もあると思うので、ある意味で皆さんは似通った教育システムを持っているのではないか。マリでは、学校のフレームと家のフレームと地域のフレームは違う。社会のフレームも違う。しかし、日本ではみんながつながっている。フレームの外にいる人は変わり者、違った者だ。私は子どもが 2 人いて、彼らは海外で生活をして、フランスのフレンチスクールに行った。次男が日本の小学校で高学年のとき、先生が話している最中に手を挙げてよく喋ったらしい。先生は真剣にうちの子どもに何か問題があるのではないか、相談しましょうと言った。小学校高学年になったら日本では落ち着きがある。質問はせず、自分でまず考える。でも、うちの子どもがフレンチスクールで受けた教育は、思ったことをすべて言いなさい、我慢しない、好奇心はどんどん出していって下さいということだった。もう 1 つ、20 歳になったら何をしたいかという作文があった。小学校 5 年で皆さんは大体医者になりたいなど、結構現実に近いところを書く。うちの子どもはフレンチスクールにいたのでもっとロマンチックに書かなければいけないと思ったのだろう。20 歳になる頃に私は死んでいますと書き始めると先生からすぐに電話がかかってきた。しかも彼は、自分はこの世の中にいないような姿をかなり鮮明に書いていた。先生から見ると大変なことだったのだろう。皆は先生が期待していることを大体行うが、そこから大きく外れると変わり者だと思われる。小学校低学年は、好奇がものすごくある。私が小学校低学年のクラスに行く

と、なんで黒いのと言われる。子どもらしくて素直だ。これが 5、6 年生になってくると、そういう好奇心を自ら押さえ込んでしまう。聞きたいのに聞けない。知に対する冒険がない。学習指導要領ではもっと個性を大切にする子どもを育てようと言っているのに、その個性を殺すように持っていくのだ。教育を通じて生徒はどちらかというと期待されるよう役割を演じる。これは大学までそうなのだ。大学になると一番大変なのが個性的な子である。君の絵は個性的ですねと言われた瞬間に、その人の個性がそこで死ぬ。みんなに期待されていると思っているから、個性的と言われた作風しかしない。だから、相手を意識して、どう見られているか、どう期待されているか、例え自分を犠牲にしてでもそれに応えていくということはもしかすると教育の中で生まれてきたものなのではないかと思う。社会が個の時代に変化してきたところで、そうした教育をやり続けるというのは非常に問題だと思う。このグローバル化の中で、日本だけの問題ではなく、世界中でアイデンティティーが非常に問題になってきている気がする。グローバル化というのは、本当に波に流されやすいものが多い。暮らしの中でいろいろな物事と出会ったとき、そこをどう受け止めるかというのは教育の中で重要だ。だから私は、うちの学生達にも、軸となるアイデンティティーが必要だと言っている。どのように自分を認識していくかがかなり大きい問題だ。日本人というアイデンティティーも例外ではない。そこをきちんと大切にしながら、どうやって異文化の人達と関わるかは大きい問題だ。社会学者のリチャード・セネットが、自分のアイデンティティーが不安定だと、それによって自信を失ってしまうと言っている。その裏返しで排他的になってしまうことがある。だから、自分の文化、あるいは自分の足元をしっかりと分かった上で、真のグローバル化を望めると思っている。だから、学生達に、あなたは何者なのかということをきちんと教えることが真の国際人の育成だと思う。相対化しないと自分を見ないと思い、学生達をゲリラ的によく旅に連れていく。私自身もいろいろな国に行くことにより、自分がマリ人であることを再認識する。彼らは旅の中で今まで持っていた日本の当たり前が通じないということを経験する。異文化と出会ったときに初めて、自分自身の文化では当たり前だったことが当たり前ではないということを感じる。グローバル人材とは英語が分かるとか、外国語が分かる、話せるということではない。まず、自分とは何かというところをしっかり分かることが重要だ。その上で身近な異文化を理解する。真のグローバル人材とは自国の文化と向き合えることが重要だ。言語はコミュニケーションの手段なので、自分が分かっていることを言語に乗せて相手に伝えることだ。何も伝えるものがなければ言語だけあっても意味がない。

京都精華大学は留学生の割合が 30%近くになることを目指している。現在 27%だ。その中で、私はいくつか改革を行った。まず、留学生窓口というものがない。留学生課を作ると、その課だけは留学生について分かるが、他の人は全然分からない。留学生は客ではなく、国内学生と同じ学生である。当然、留学生特有のサービスはある。ビザや奨学金はあるが、教学やキャンパスライフにおいては皆一緒だ。そのように適度に混ざることによってお互いに学び合うということだ。もう 1 つ、留学生は国内学生が受ける入試試験が受けられる。私達は、日本語学校で留学生試験だけをした留学生を受け入れるのではなく、日本国内学生と競争できる留学生を受け入れることを心掛けている。

今、コロナをどう捉えていくかは非常に大きな問題だ。強制的に検査できない、強制的にワクチンを受けさせることができない中でどうしていくか。そういう世界の動きは、我々がこれまで持っていた価値観自体が非常に脆弱だったり、それ自体が限界になったりしていると思っている。先日、学長とオープンディスカッションをしたいという学生のリクエストに応じた。そのときに 2 年生が、コロナ初年の 2020 年 4 月に入学後、大学に来た

のはIDを取りに来たたった5分だけで、その後はずっとコンピュータ越しでしか大学のことを知らず、6月になって段階的に学校に来るようになったが、その時点で友達を作れと言われても作れませんと言っていた。京都精華大学では2020年度の後期から対面を中心にしている。今80%が対面で残りはオンラインになっているが、やはりその中でコミュニケーションの問題がかなり大きい。世代間のギャップ、我々と今のZ世代と言われている若者とのギャップもある。アメリカでも世界でもデジタル世代の子ども達は我々と価値観が違うのではないか。彼らは、先が見えない社会の中、あるいは分断された世界の中に身を置いている。今の20歳前後の子ども達は生まれてから社会が好調になったことがなく、ずっと不調だ。だから、不確実な社会状況の中に彼らがいるということを私達教員が理解しなければいけない。彼らは非常に誠実なところもあり、不安定なところもあるが、独自の価値観を持っていることはすごく重要だと思っている。それを彼らに伝え続けて、自分も彼らからどう学ぶかということがキーポイントになっている。Z 世代の特徴はデジタルネイティブであるということ、彼らのコミュニケーション手段は、LINE、メールなどの中であること、さらに、彼らはインフルエンサーに憧れることだ。

このように社会が激しく変化している中でどうしたらいいのだろうということは我々の課題の1つだ。本当の意味で世界の未来を想像する、これは日本の若者がやらなければいけない。格差社会をどうなくすべきか、世界が一緒にゴールをするのはどういう意味なのかというSDGsにも通じるような話だ。一人一人の役割、行動は大切である。自立とリーダーシップだ。リーダーシップを取るということは日本が世界の不安に立ち向かうことが重要だ。だから、ダイバーシティ、グローバル化というのは日本の若い人達が考えなければいけない。このコロナ禍で、我々が気付いたことはたくさんある。私達は、不便の中で気付いたものがたくさんある。急ぐ社会が正しかったのか考え直す必要がある。京都精華大学では数年前から対話、コミュニケーション、哲学を授業にしている。これはソクラテスが言っているダイアログだが、基本的には私とは何者かということは放っていても分からないので、意図的にコミュニケーションを引き起こすような場を作り、他人に自分を映さない。これは実は難しい。他人のことを語ることはできるが、他人に自分を伝えることは難しい。なぜかというと、これまで自分の言葉を持っておらず、先生の言葉、親の言葉、他人の言葉を借りて語ってきたからだ。これもある意味、言葉が持つイメージ、メッセージだ。これをどう取り入れていくかということは非常に需要だ。学校でも恐らく、デジタル化が進んでいると思うが、その中で、こういうものが非常に大切になってくるだろう。私がよく若者達に伝えることは、自分の変化を恐れることはないということだ。問いを立てられる人間が大切で、いつも原点に立ち戻れるということは大きい。先日、雑誌の取材で、リーダーや大学学長について、いろいろなことを聞かれた。最後に改革を進める上で重要なのはリーダーの指示で動くのではなく、メンバーが一緒になって改革に参画する、あるいはそれをやっていくという自覚だと言った。なぜなら、構成員全員に大学運営と大学の改革の義務と権利があるからだ。挑戦を促し、「失敗したらまたやり直したらいい」という言葉を、私は常に自分の大学の構成員にかけている。学長として、再チャレンジを可能にする、チームワークを組織できる大学を作っていきたい。私の大学づくりで大切にしていることは、学長のせいにするという行為を終わらせるということだ。一人一人が自覚を持って一緒にやっていこうと促す。当然、リーダーとして最終責任は取るが、自分のチャレンジをリーダーの存在のせいにするというのはよくない。あの人がこう言うかもしれないという、ある意味で日本的な想像で、言っていないのに、そう思っているのではと想像し、それによって自分を抑えてしまう。自分の可能性を減らしてしまうことはよくない。失敗を恐れることもない。まだまだやり直す時間がある。

私学経営部会　実践報告

# 「京都私学の経営を支えて」

公益財団法人京都私学振興会　理事長
**藤　林　昭　一**

私は、今からおよそ 20 年前にある学校法人を定年退職した後、税理士・社労士の看板で事務所を開業しましたが、丁度その時、当時の京都私学振興会の理事長先生からお誘いを受けて、平成 13 年 4 月から京都私学振興会で仕事をすることになりました。

京都私学振興会は、保有する資金を運用して得る果実を財源として、京都府内の幼稚園から小・中・高等学校、専修各種学校を含めて 250 近くもある京都の私学の経営をサポートしている公益法人です。

私の勤める前の京都私学振興会は、資金を定期預金と国債に預けるだけで、毎年 1 億円以上の運用益を得ることが出来ていましたが、平成 11 年に日銀がバブル経済の破綻による不況対策としてゼロ金利政策を実施しました。これにより国債や定期預金が無利息になって、当振興会は必要な運用益を得ることが出来なくなりました。

そのため、当時資金運用担当の常務理事は、利率の高いアルゼンチンやメキシコなどの政府債に投資しましたが、その頃、開発途上国が財政破綻に陥って、政府発行債がデフオルトになるとの新聞報道がでたため常務理事はそれを苦にして退任されました。

就任早々難しい資金運用業務を担当することになった私は、早速でフォルトの危険のある開発途上国の政府債を全て売却して、その代替に「仕組債」や「外貨建債」などの外国債券で運用することにしました。

外国債券は、日本と外国との金利差が大きく、円安であるほど、高い利息が得られる債券で、当時は米国債の利率が約 6%、日本国債の利率が約 1%で、日米の金利差が 5%もあり、ドル円レートが 120 円台と言う円安時代だったので、当振興会はこれらの外国債券による運用で、平成 14 年度から平成 20 年度まで毎年 3 億円から 4 億円もの高い運用益を得ることが出来ました。

しかし、金融の世界はよいことばかりが続きません。平成 20 年 9 月に米国の証券大手のリーマンブラザーズが 64 兆円と言う過去最高の負債を抱えて倒産したため、NY ダウや日経平均などの株価は 50%以下に暴落し、米ドルは 120 円から 80 円の超円高となり、金利も大きく下がって、世界経済は未曽有の金融危機に陥りました。世に言う「リーマンショック」です。

当時、多くの私立大学が、学納金収入の減収をカバーするため、仕組債に投資したり、デリバティブ取引と言う危険な金融派生商品にまで手をだしていましたが、これらの債券は外国の金利が高く円安である間は、大きい収益をもたらしていましたが、リーマンショックによって予想もしないほど金利が下がり円高になると、これらの債券は利を生まなくなり、評価も急落して、多くの私立大学が巨額の損失を蒙りました。

当振興会も、多くの資金を仕組債に投資していましたので、それから平成 24 年度まで 4 年近くも減収が続きましたが、私はそれほど心配していませんでした。と言うのは、債券は利率が下がると評価が下がり、利率が上がると評価が上がるので、評価が下がっても処分せず持ち続けていれば、やがて利率が上がって評価も必ず戻る

と信じていたからです。

果たして、平成 24 年末に自民党が政権復帰を果たし、安倍内閣がアベノミクスという金融緩和政策を発表した途端、株価は跳ね上がり為替も 100 円台を回復して、仕組債も再び高利回りを取り戻し、当振興会は平成 25 年度から平成 30 年度までの間、再び毎年 3 億円から 4 億円もの高い運用益を続けることが出来ました。

その間、仕組債の発行体が高い利息を支払うのを嫌って、当振興会が保有していた仕組債の殆どを早期償還しましたが、私はこの機会に全ての資金をリスクにさらすのは危険と考えて、50 億円の資金のうち 15 億円は安全資金として定期預金や国債等で保有することにして、残る 35 億円で事業活動に必要な運用益を稼ぐことにしました。

仕組債に代わって新しく主な運用債券にしたのは「投資信託」ですが、幸い投資信託も高利回りであったため高い運用益を得ることが出来ました。

令和元年度末には再び「コロナショック」と言うパニックが襲いかかりました。中国で発生した新型コロナが、瞬く間に世界中に感染を拡げ、それまで高値を続けていた世界の株価は、令和 2 年の 2 月末から 3 月末の僅か 1 月足らずの間に急落して、世界経済はリーマンショックを凌ぐほどの超不況に陥りました。

それまで高値を続けていた当振興会の投資信託も、3 月初めの僅か数日のうちに 3 億円も急落したため、私はこのまま持ち続けると 3 月末の決算時に莫大な評価損が生ずると判断して『この際、全ての投資信託を売却して現金に換えよう』と決心して、投資信託の全てを売却しました。もしこの時売却していなかったら、当振興会は令和元年度の決算で、10 億円以上の損害を蒙るところでした。

リーマンショックは、回復するまでに 4 年近くもかかりましたが、コロナショックは、世界の中央銀行がいち早く超金融緩和政策を実施したため、巨額の資金が一挙に金融市場に流れて、3 月に暴落した株価は、翌月の 4 月には早くも反転を始めました。

そこで、当振興会は全ての投信を売却して得た 35 億円の再運用を早くも 5 月から開始しました。再運用に際しては、業績好調な米国の IT 企業株で運用する投信に重点をおいたため、令和 2 年度は、値上がりした投信の売却益と分配金収入を合わせて、7 億円以上の過去最高の運用益を得ることが出来ました。

以上に述べましたように、私はこれまで 2 度に亘って、歴史的な金融危機に遭遇しましたが、その都度、運用債券を切り替えながら金融危機を乗り超え、この 20 年間におよそ 60 億円にのぼる巨額の運用益を得ることが出来ました。

残り時間が少なくなりましたので、ここで「資金運用にとって大切なポイント」についてお話しします。

資金運用にとって大切なポイントは、安全性と収益性と分散投資です。

安全性とは、うまい投資話には乗らないことです。収益性とは、目標とする利回りを決めて、それを得られる投資をすることです。分散投資とは、「10 の卵を 1 つのザルに入れて棚の上に置くと、ザルが落ちると全部の卵が割れるので、10 のザルに分けて置きなさい。」と言う投資の世界の格言です。当振興会も、約 35 億円を、投資信託を 35 銘柄に分け、更にその内容も、国内株式・海外株式、国内リート・海外リート等々、様々な銘柄に分けて、リスクを分散しています。

ハイリスクハイリターンと言われるように、資金運用にはリスクがつきものなので、『リスク管理』が重要です。当振興会では、毎日、世界の経済動向に留意し、為替・株価・金利・原油価格等の経済指標の日々の変動を記録

し、それを緻密に分析して、リスクを察知した時は、いち早くリスク回避のための行動を起こしています。

そして、資金運用にとって、何より大切なことは「信用」です。資金の運用を担当する者は、運用を委ねている理事長や理事の方に「彼に任せておけば大丈夫」と思って頂けるほどの信用を頂かなければ、大きい資金を運用することはできません。

京都私学振興会では、理事で構成する資金運用委員会を設け「資金運用管理基準」を定めて、資金運用はこの基準の定める運用手続と運用方針に沿って行い、理事会や評議員会には、その時々の運用状況を逐一詳細に報告して、情報の開示に万全を期しています。

最後に、お金は稼ぐだけではなく稼いだ金を有効に使わなければなりません。私はこの 20 年間に稼ぎだした 60 億円を、一銭残さず京都の私学の振興のために注ぎました。

当振興会は、私学関係団体助成金交付事業・顕彰奨学金事業・教育機器の寄贈・広報事業教職員福利厚生事業・京都私学会館の運営と言う 6 つの事業を行っています。京都には、京都府私立中学高等学校連合会の他に、幼稚園連盟や専修各種学校協会等 5 つの私学関係団体があり、当振興会は毎年これらの団体に 1 億円を超える助成金を交付して、これらの団体が行う事業活動を財政面から支援しています。

顕彰奨学金事業は、優れた教育研究業績を挙げた教員や、文化・スポーツ活動で全国優勝したクラブや選手、永年私学教育に貢献した経営者等に 30 万円から 50 万円の奨励金を贈って顕彰しています。また、ご父母を病気等で亡くした生徒が学業を続けられるよう奨学金を給付しています。その他、府内の全ての幼稚園・学校に教育機器を寄贈したり、教員及びその家族の医療慶弔給付や、京都私学会館の運営などの諸事業を行って、京都の私学経営を支えています。

今からおよそ 1200 年前、弘法大師空海が京都九条に庶民のための学校を設立したのが、日本の私学の発祥と言われています。私学は、今少子化の進展と言う厳しい環境の中で、それぞれの私学が特徴のある教育に取り組んでいます。当振興会はこれからも精一杯頑張る私学を応援してまいります。

最後に、殆どが私の自慢話のようになってしまいましたことを深くお詫び申し上げます。

私学経営部会　パネル・ディスカッション

## 「激動する時代の中で撓（たわ）まぬ私学経営とは」

（パネリスト）学校法人藤華学院　理事長
**嵯　峨　実　允**

（パネリスト）学 校 法 人 三 重 高 等 学 校　理事長
**梅　村　光　久**

（パネリスト）学　校　法　人　原　田　学　園　　理事長
**原　田　賢　幸**

（コーディネーター）姫路女学院中学高等学校　理事長・高校長
**摺　河　祐　彦**

（本報告は全私学新聞に掲載された内容を転載しています。）

**摺河**　まず、それぞれの先生方から学校紹介をお願いします。

**嵯峨**　学校は東京都の大井町駅近くにあり、品川エトワール女子高等学校と言います。特徴的なのは、CG デザイン制作やオリジナルゲーム作りなどを習得するマルチメディア表現コースがあることです。日本の私学では珍しいコースだと思います。女子に人気のある国際、アニメ系、保育系を強みにしています。

**梅村**　私どもの三重高等学校は名古屋にある中京大学がルーツです。オイルショックのときに、地方自治体の財政難で、当時の松阪市長が、私の祖父のところに何度もお越しいただき高校をつくってほしいと言われ、ご支援をいただいて開校しました。本校は普通科の男女共学で約千人の生徒が在籍しています。設立当初からクラブ活動に力を入れ、甲子園に出場すると、テレビで試合を見るために街から人がいなくなるというお話を地元の方からいただくこともあります。

**原田**　私の祖父である初代理事長はレンガ工場を経営していて、工場の２階が空いていたので、戦後の工業立国を目指す日本を支える学校をそこに作ろうと開校いたしました。このような歴史があり、メインは工業系、商業系の高校となっています。

　鹿児島県の魅力を生徒たちが発見し、ＳＮＳで発信したことを評価いただき、内閣府主催の「地方創生 SDGs 官民連携プラットフォームの優良事例」に選定されました。また鹿児島イオンとコラボして生徒たちが各店舗をアピールすることで、その収益を還元してもらうビジネスモデルも行っています。

### ○国際教育

**摺河**　嵯峨先生の学校では、海外の学校教育機関などと結びついて、様々な取り組みをされていると伺っています。国際教育の取り組みをご紹介いただけますか。

**嵯峨**　私が理事長になった 20 年少し前から日本に働きに来る中国人の家族が増えましたが、公立の学校は外国人生徒への対応がほとんどできず、たまたま当校に中国語の先生がいたので受け入れようと始まりました。今では 1 学年に 20 人ぐらいは外国人生徒がいます。初めの頃の違和感はなく、日本人の生徒たちは、普通に共に学んでいます。

中国と国際問題が生じたときに、中国の生徒たちがいじめられたりしないかと心配で様子を見に行ったことがありましたが、日本人の生徒と普通に授業を受けていました。若いうちに外国人と交流するのは大事だと思いました。

フィリピンと姉妹校の提携をするときにはインフラや食事も心配だったので初めは先生たちだけで視察に行ってもらいました。今では毎年 3、4 人ずつ生徒が行っています。生徒たちも 2 週間弱滞在して、もっといたかったと言います。

コロナで今は停滞していますが、もっと留学生を受け入れたいと考えています。多民族の生徒がいれば、異なる風習や習慣から自然と外国に触れる機会につながると思うのです。

それから、外国人の英語の先生（ALT）に教員免許を取ってもらい、なるべく担任をしてもらっています。免許状を持つと先生たちのモチベーションは上がります。

**摺河**　学校にいながらにして、国際社会を疑似体験できるのですね。ALT の先生が特別免許状を申請してもなかなか取れないというのは人材育成の点で課題です。梅村先生の学校のある三重県ではどうですか。

**梅村**　ALT の先生方には、免許状はなかなか発行してもらえなかったのですが、条件付きでようやく動き出しています。教員免許の更新制度がなくなりますが、大学で教育を受けた者だけで教えられる時代はもう終わっていると思います。

**摺河**　学生が総合大学で教員免許を取得しようとすると、一日中授業を受けなければならず、かなり負担がかかると聞いています。そこで教育大学で教員免許状を取る学生が増えてくるわけですが、先生の多様性に欠けてくるような気がしています。原田先生から、教員の多様性などについて、何かご意見はありませんか。

**原田**　鹿児島県は人材獲得に苦労します。本校は英語の教育に関して、カナダ人 1 人、アメリカ人 2 人を正規採用しています。今はうまくいっていますが、今後はどうなのか分かりません。

私たちは専門系の学科がメインですので、今の日本の教育学部で得られる工業系の教員免許、商業系の教員免許では、私が追い求めている学校像には通用しません。県とも協議し、工業系大学、経営系の学部を出た人などに、臨時免許を出してもらい、来てもらっています。当校のマルチメディア課程に今年の 4 月に着任した教員は、東京でプロジェクションマッピングなどを手掛けていたエンジニアで、コロナ禍で仕事が減ったということで来てくれました。その人は、教員免許は持ってはいませんが、県に作品や教授法の計画を提出したところ、臨時免許が認められました。

**摺河**　今までのお話で多様化が一つのキーワードになっています。多様性を担保できる私学は、これからの国際教育に対応しうる人材育成の環境が整っているのではないかと感じました。

### ○ＩＣＴの活用

**摺河**　次に ICT の活用について話していきます。教員の ICT スキルの獲得が重要になっていますが、ICT と働き方改革をつなげた形での意見があればお願いしたいと思います。

**原田**　私は米国カリフォルニア州へ視察に行ったときに STEAM 教育を知り、日本でどのように展開できるのかを考えました。当法人には情報系の専門学校もあり情報系に強い教員が多いです。専門学校は教員免許に縛られず、その業界に力を持った人、企業出身者が在籍しています。それを活用して高校で非常勤講師として授業をしてもらっています。

私が理事長になる前からマイクロソフトのコミュニケーションツール・Teams の導入を始めました。導入した結果、必要な情報は Teams を開けば分かるので、職員朝会がなくなり、情報の共有がシームレスにできるようになりました。オンライン会議も Teams の中で完結しています。チャット機能もあり、いろいろな人の知恵を集められ、横の関係を築ける意味では、優れたツールです。

Teams に、私は 5 年前から毎朝、理事長コラムを書いています。そのため職員は Teams を開くことが当たり前になり、便利であることが認識でき、オンライン授業にスムーズに移行することができました。

**摺河**　梅村先生には働き方改革についてお願いします。

**梅村**　制度変更を顧問弁護士や社会保険労務士と相談して進めました。変形労働時間制の導入やタイムカードの導入による勤務時間の管理も進めました。部活動は、伝統的に先生方が非常に熱心に自主的に取り組んで下さっているので、制度変更する中で、一番困りましたが、最終的には先生方に理解頂ける形になりました。制度設計を変更したことで、管理職がこれまで以上に勤務時間の管理がしっかりとできるようになりました。更に教職員の健康管理について進めていければと考えています。

**摺河**　原田先生からも働き方改革に関して何かありますか。

**原田**　業務量削減の改善を進めています。学園事業はコロナ以前からテレワークを推進し、学園本部のパソコンを自宅からリモートで操作できるようにしました。負担を減らすためにあえてチーム担任制を進めています。

平成 30 年からタイムカードを導入し、労働時間を分析しました。高校だけ 1 年単位の変形労働時間制を試験的に始め、導入を開始しました。

毎日同じ勤務時間を設定するのではなく、繁忙期とそうでない時期を分けて、計画的に勤務時間を設定しました。労働時間の凸凹はありますが、限度労働時間は守り、部活動は労働であると認めました。年間勤務カレンダーを管理職が作り、それを各個人が共有し、前月までに勤務予定を提出してもらいます。

労働時間の実証検証で、部活の指導をしていると労働時間が長くなることが分かったので、例えば金曜日の 4、5 時間目の授業に意図的に空きコマを作り、調整できるようにしました。

最初は不満の意見もあったのですが、自分で勤務時間を調整できると、チーム担任制を導入しているのでチームでフォローし合えるようになりました。「子供たちのために尽くすことがすべて」という文化をもう見直すべきではないかと思います。今後先生のなり手がいなくなる恐れもあります。労務管理の正しい知識をまずは管理職が持つことが必要です。もっと ICT を活用して仕事を合理化していきたいと思います。

**〇学校法人ガバナンス**

**摺河**　では、最後に学校法人のガバナンスについて、話を進めたいと思います。

全私学新聞で文部科学省の学校法人ガバナンス改革会議について、吉田晋先生（日本私立中学高等学校連合会長）の「私立中高に対する運営費の公的支援や税制上の優遇措置の目的は、学校法人への恩恵ではなく、そこで学ぶ子供たち教育環境の整備・向上のためにある。学校では公認会計士の指導・監査を受け適正な会計運営を進めている。この上にガバナンスの強化で具体的に何を目指そうとしているのか分からない」との話がありました。

**梅村**　学校法人と公益法人のガバナンスを一緒に考えることに無理があります。今回、規模の小さい学校法人にも厳しい法律の改正案が検討されています。私はオーナー系の学校で、生徒募集で苦労している父の姿を見てきました。学校経営は相当覚悟を決めて飛び込まなければならない世界であると幼少のころから感じていました。

学校法人ガバナンス改革会議では、「親族、特殊関係者は評議員の就任を禁じる」という議論がされていますが、世襲で飛び込んでいっても能力がなければ、そこで評価を受け、去ることになるだけです。このような改正案が出ているのは注視していかなければなりません。

**原田**　10月15日に開催された第7回学校法人ガバナンス改革会議の資料には「評議員会が理事、監事、会計監査人の選任・解任」を議決するとあります。今まで私たちが連綿と築き上げてきた伝統を崩して、もう一度作らなければならないのです。何が子供たちのために必要なのかを追求する学校法人が必要とされているのにすごく残念です。

**摺河**　評議員が選任、解任するとなると、組織の責任は誰がとるのかということになりますね。

**嵯峨**　創業一族だからこそできることもあります。オーナー系が引き継ぐのは悪のような受け取られ方になっているような気がします。評議員の中にすごく権力を持つ人がいて、理事会を意のままに操れば同じことではないでしょうか。

**摺河**　物事には良い面と悪い面があるので、ガバナンス改革会議ではもう少し掘り下げて話をしていただければと思います。大きな企業のような大学と、われわれのような地方の小さな学校が同じ尺度で対応しなければならないのには無理があります。今日は、3名のお話の端々から背景となるそれぞれの学校の精神、建学の目的を窺うことができました。今後もそれぞれの地域でご活躍されると確信しています。ありがとうございました。

私学経営部会

## 「総　括」

京都女子中学高等学校　常務理事・校長
**林　　信　康**

コロナ禍の中、全国各地から私学経営部会に参加頂いた先生方、そして部会を運営するに当たり、ご尽力頂きました専門委員、運営委員の先生方に厚く御礼申し上げます。皆様のおかげをもちまして、大変意義深い部会になりましたことを心から感謝申し上げます。

まず、京都精華大学学長のウスビ・サコ先生に「真のグローバル化を目指して！～日本の子どもたちに伝えたいこと～」と題して講演を頂きました。ユーモアを交えながら、日本人よりも日本人らしい話し方で、しかも内容がとても深いお話でした。劇的に変化していく未来だからこそ、私たちは子どもたちに異文化理解を通して、「今の自分は何をなすべきか」、自分の変化に恐れずに問いを立てさせることが大切だとご教授頂きました。

実践報告では、公益財団法人京都私学振興会理事長の藤林昭一先生から「京都私学の経営を支えて」をテーマに報告を頂きました。京都私学振興会には京都府の私学教育の充実発展を目的に、資金面から多大なご支援を頂いています。私学関係団体助成金交付を始め、さまざまな支援事業を行い、京都の私学を支えて頂いています。今後このような京都の私学振興会が１つのモデルになり、全国的に広がっていくことを期待しています。

パネル・ディスカッションでは様々なことをお聞かせ頂きました。コーディネーターの姫路女学院中学高等学校理事長・高校長の摺河祐彦先生の手際よい司会進行の下、学校法人藤華学院理事長の嵯峨実允先生、学校法人三重高等学校理事長の梅村光久先生、学校法人原田学園理事長の原田賢幸先生の３人の新進気鋭のパネリストの先生方から、自校の特色ある取り組みを紹介して頂きました。非常に参考になりました。本当にクリエイティブな発想で先進的な取り組みをなされておられます。国際教育、ICT 活用教育、働き方改革、法人のガバナンス等の課題が山積しており、特に法人のガバナンスなど本当に難しい問題でございますが、今後はいろいろと考えていかなければならない問題だと思います。これからは、このような課題についてお互い情報交換も必要になってきます。

ご参加の皆様にはいろいろな面でご協力を頂きまして、私学経営部会が無事に終了することができました。今回の部会はまさに大会のテーマである「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」に沿うものでありました。部会で得ました情報やお学び頂いたことを各学校にお持ち帰り頂いてご活用頂ければと思っております。

結びにあたりまして、先生方の学校の更なるご発展と、先生方のご活躍とご健勝を念じまして総括とさせて頂きます。

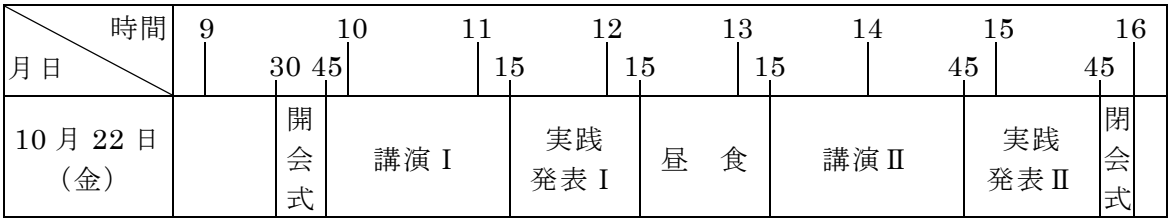
# 教育課程部会

社会が加速度的に変化する中で、自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持つ生徒の育成が学校に求められている。蓄積された知識を礎に重要情報を主体的に判断し、問いを立て解決し、他者と協働しながら新たな価値を生み出すことのできる資質・能力を育むため、学校は不断に探究する文化を形成していかなければならない。

私立学校においては、新学習指導要領の下、建学の精神と自校の特色を生かし、社会と連携・協働しながら、「何を」「どのように」学ぶかを明確にしていくことが重要だといえよう。

当部会では、カリキュラム・マネジメントに関する講演とコミュニケーションデザインに関する講演、私立学校教員による実践発表を通して、21 世紀の新しい世界に挑戦する学びを探りたい。

1　研究目標　　21 世紀の世界に挑戦する新しい学びを探る
2　会　　場　　ザ・プリンス京都宝ヶ池　地下 2 階「ゴールドルーム」
3　参加対象　　理事長、校長、副校長・教頭、教務主任、教育課程編成等担当教員
4　参加人員　　６３名
5　日　　程




6　内容・日程細目

| | |
|---|---|
| 9:00 | 受　　付　　機材担当：井上　　聡<br>記録(写真)担当：那須　誠一郎<br>（松村　元喜・川崎　一輝）　　記録・集録担当：辻本　剛久 |
| 9:30 | 開　会　式　　司会：山田　尊文／記録：辻本　剛久<br>１．開式の辞<br>２．運営委員長挨拶　　教育課程部会運営委員長　初　田　泰　宏<br>３．運営委員・専門委員紹介<br>４．日程説明<br>５．閉式の辞 |
| 9:45 | 講　演　Ⅰ　　司会：山田　尊文／記録：辻本　剛久<br>講師紹介：須田　令子<br>演　題　「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～知識の構造化と資質・能力の育成～」<br>講　師　田　村　　学　　國學院大學人間開発学部初等教育学科　教授 |
| 11:15 | 実践発表Ⅰ　　司会：石見　憲治／記録：辻本　剛久<br>テーマ　「持続可能な社会の担い手を育てる～PBL による学びと成長～」<br>発表者　石　川　真理子　　（京都府）ノートルダム女学院中学高等学校　教諭 |
| 12:15 | 昼　　食 |
| 13:15 | |

| | |
|---|---|
| 13:15 | 講　演　Ⅱ　　司会：山田　尊文／記録：辻本　剛久<br>講師紹介：須田　令子<br>演　題　「問いのデザイン～多様な個を活かすも埋没させるも『問い』しだい～」<br>講　師　塩　瀬　隆　之　　京都大学総合博物館　准教授 |
| 14:45 | 実践発表Ⅱ　　司会：石見　憲治／記録：辻本　剛久<br>テーマ　「主体的・対話的で深い学びを通じ、<br>生徒の賜物を育む探究学習の教育効果に関する研究」<br>発表者　南　　百合絵　　（大阪府）清教学園中学高等学校　司書教諭 |
| 15:45 | 閉　会　式　　司会：山田　尊文／記録：辻本　剛久<br>１．開式の辞<br>２．総　括　　教育課程部会運営委員長　初　田　泰　宏<br>３．専門委員長挨拶　　教育課程専門委員長　森　　涼<br>４．閉会の辞 |
| 16:00 | 解　　散 |

7　講師・発表者（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 田　村　　学 | 國學院大學人間開発学部初等教育学科 | 教授 |
| 塩　瀬　隆　之 | 京　都　大　学　総　合　博　物　館 | 准教授 |
| 石　川　真理子 | ノートルダム女学院中学高等学校 | 教諭 |
| 南　　百合絵 | 清　教　学　園　中　学　高　等　学　校 | 司書教諭 |

8　運営委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 初　田　泰　宏 | 京　都　文　教　中　学　高　等　学　校 | 理事・校長 |
| 副委員長 | 須　田　令　子 | 京　都　文　教　中　学　高　等　学　校 | 中学教頭 |
| 委　員 | 山　田　尊　文 | 京都先端科学大学附属中学高等学校 | 教頭 |
| | 石　見　憲　治 | 京　都　外　大　西　高　等　学　校 | 教頭 |
| | 辻　本　剛　久 | 京　都　西　山　高　等　学　校 | 指導教諭 |
| | 丸　本　佳　代 | 京　都　文　教　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 井　上　　聡 | 華　頂　女　子　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 堤　　文　孝 | 京　都　翔　英　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 那　須　誠一郎 | 洛南高等学校附属中学校 | 教諭 |

9　専門委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 森　　涼 | 学校法人石川高等学校・石川義塾中学校 | 理事長・校長 |
| 委　員 | 松　谷　　茂 | 文化学園大学杉並中学高等学校 | 校長 |
| | 鈴　木　　弘 | 香　蘭　女　学　校　中　等　高　等　科 | 校長 |
| | 北　村　　聡 | 京　都　外　大　西　高　等　学　校 | 理事・校長 |
| | 須　藤　　勉 | 東　京　私　学　教　育　研　究　所 | 参与 |

教育課程部会　講演Ⅰ

# 「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて ～知識の構造化と資質・能力の育成～」

國學院大學人間開発学部初等教育学科　教授
**田　村　　学**

全国の中学高等学校では確実に授業が変わってきており、先生方は授業改善を行っている。その中、重要な理念は「学習する子どもの視点に立つ」ことであり、学びを中心に考えて「実際の社会で活用できる資質能力を育成する」ことだ。一方的に教え込む受け身の授業から学習者を主体とした学びに転換していく必要がある。

まず、日本の子ども達の学力学習状況調査や国際的な学力だが、3 年に 1 度の高校 1 年生への PISA 調査では 2003 年、2006 年の結果はかなり危機的だった。しかし、2009 年から V 字回復し、日本の子ども達の国際的な学力の水準は今も一定程度高い状態が維持されている。国内の学力学習状況調査は小学校 6 年生、中学校 3 年生がターゲットだが、各都道府県の順位を見ると、とりわけ下位の都道府県の向上傾向が見られ、格差が縮まっている。つまり、国際的にも、国内的にも、日本の子ども達の学力の数値は一定の成果が上がっている。ここで高校生の成績評価を見ると、諸外国の子ども達より数値が高い項目がある。それは「自信がない」だ。また、TIMSS と呼ばれる国際小中学校の数学と理科の調査結果を見ると日本の子ども達は「楽しい」や「役立つ」というスコアが低い。つまり、学力は上がってきたが、自信がない、楽しくない、役立ち感がないという状況が見て取れる。また「困っている人を見たら助ける」や「社会参加と社会貢献」のスコアも低い。つまり、何か自分で考えて判断し行動することに関してまだ課題がある。このようなデータをもとに、日本の子ども達が持っている良さ、ストロングポイント、課題、ウィークポイントを視野に入れ、議論されてきたのが今回の教育課程基準の改訂である。加えて、AI の議論も大きなポイントだ。コロナのパンデミックで加速度的に動き出したことも今回の改訂と非常に関係が深い。2011 年に入学した子ども達の内、3 人に 2 人は今ない仕事に就くという未来予測がある。不確かだが、大きな変化が待っていることは確かだ。OECD は 1960 年を 10 として、減る傾向の仕事と増える傾向の仕事を示した。減る傾向の仕事は「型の決まった反復作業」だ。増える傾向の仕事は「型の決まっていない非反復と分析」つまり繰り返しでなく、考えること。もう 1 つは「型の決まっていない非反復で双方向」、双方向とは話し合いや意見交換などのコミュニケーションやディスカッション、学び合いのことである。これらだけでも授業をどのように変えなければいけないのかというイメージが湧いてくる。

次に、企業（実社会）が期待することと大学・大学院（教育機関）が期待することだが、教育機関では「知識の習得」という項目が突出しているが、実社会では大きくない。また、実社会で高いのは「チームの課題解決」だが、教育機関ではほとんどない。実際の社会と教育にはズレやギャップ、ミスマッチがある。実際の社会では「知識の習得」より「自分の考えを導き出す、思考力」に重きがあり、チームの課題解決や自分で考える思考力、コミュニケーション能力などが求められている。こう考えると、これからの学校がどのような方向に向かわなければならないかが一目瞭然だ。ある調査結果では、保護者は「実際の社会で活用できる力を付けてほしい」と明確に宣言している。この調査は受験を控えている中学校 2 年生の保護者が対象であり、受験の学力に対する期待値も聞いたところ、多くの保護者は「入試だけできればいい」という考えではないことが分かる。入試も大事だが、その後の社会で本当に使える力を身に付けられるかを真剣に考え、学校に期待している。知識がいらないということではない。単に暗記すればいい、テストの穴埋め問題ができればよいという話ではなく、使える知識を身に

付けていくことだ。今は大量の知識が飛び込み、暗記の意味も変わった。必死で覚えた知識は更新され、変わっていく時代だ。つまり、今回の改訂は何ができるようになるかを重視し、何を学ぶかだけではなく、どのように学ぶかに光を当てている。3 つの柱とは「知識・技能」、「思考・判断」、「学びに向かう力・人間性」である。ポイントは主体的対話、深い学び、アクティブラーニングというキーワードだ。この方向で転換してきた中、「令和の日本型学校教育の構築」が出てきた。しかし、新しいワードが出たから方向が変わるわけではない。新しく出てきた、個別最適な学びと協働的な学びは今まで以上に 1 人 1 人の子ども達を丁寧に見ていこうという、いわゆるアダプティブラーニングである。そこに、GIGA スクール構想や 1 人 1 台端末の議論がつながっていく。「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「学びに向かう力」が一体となって育つためにはアクティブラーニングもアダプティブラーニングも目指している方向は一緒である。「指導の個別化と学習の個性化」は分かりにくいが、習得・探究程度に押さえておく。習得はこれまで以上に 1 人 1 人にきちんと身に付くようにということ。探究はこれからもっと重要になるので、オンラインでも協働が欠かせない、学校は重要な学びの場という宣言の方針だ。その意味で、これまで同様、子ども達には意見交換、ディスカッション、学び合いなどが欠かせない。前回の平成 20 年改訂の言語活動とシンクロしている。前回の改訂では 6 つの活動が出て、アウトプットをしなさいと言っている。今回の改訂でも目指す方向は主体的・対話的で深い学び、アクティブラーニングという方向で捉えればよい。

主体的・対話的で深い学びにフォーカスをして考えたい。私達が目指す 3 つの資質能力を実現するために、主体的に対話ができる、深い学びをしてほしいことになる。主体的・対話的で深い学びをするには両輪があり、1 つは授業改善、もう 1 つはカリキュラムのマネジメントである。文部科学省が言う主要なキーワードが関係的、構造的に見えてくる。暗記すればよいではない。主体的な学びとは自分で自分の学びがコントロールできると考えるべきだ。それは、子ども達が授業中、面白いと身を乗り出してくるイメージもあるが、それだけではなく、あやふやで難しくて、困難が生じても、自分で頑張って乗り越えようと思う力を身に付けることだ。自分の課題を自分で解決運用し、自分のものにしていく姿勢が欠かせないということである。対話的な学びは異なる多様な他者と対話をすることと捉えると分かりやすい。異なる多様な他者からは多くの情報が入り、知るチャンスが増える。新たな知のクリエイトが可能になると捉えてはどうか。深い学びは一番大事でありながら、一番分かりにくい。深い学びという言葉を考える 1 つの方法として、主体的・対話的で深い学びを英語に訳す方法がある。文部科学省によると、主体的は proactive、対話的は interactive である。深い学びは Deep Learning と思うが、国は authentic と訳している。authentic とは「真正な、正真正銘の」という意味でイメージとしては「より子ども達が本気で真剣な」ということである。この言葉から若干イメージが見える。この深い学びを中心に考えたい。

目の前にある期待する学びとはある面から見れば主体的、ある面から見れば対話的、ある面から見れば深いということなので、深いは深いだけではなく、全体を一緒に考えていく。1 個 1 個の知識がつなげるためにネットワーク化することを精緻化、エラボレーションという。これまで我々はテストの穴埋めのような、知識イメージが強かったかもしれない。それをもう少し、つながり、ネットワーク化、動的なダイナミズムのある知識観を持とうというイメージに変えていく。そうすると、1 個 1 個の知識がつながり、ネットワーク化して、上階層の認識、概念ができる。このような概念形成には 2 タイプあり、1 つはバラバラなピースがつながり、上階層ができるタイプ。もう 1 つは最初に上階層を獲得しておきここに個別のピースがつながるタイプである。このピースのつながる、もともとのものを中心概念、鍵概念、キーコンセプトと呼ぶ。深い学びを考えるキーワードを押さえたい。キーワードは、つなぐ、つながる、つなげる、コネクトということである。方法に関する知識、これを手続き的知識という。事実に関する知識は宣言的知識といい、知識にはいろいろな種類がある。手続き的知識はつながってはいるがネットワークとは少し違う。どちらかというとパターン化し、この知識が身体につながっているときに滑らかにできるようになる。こう考えると深い学びのイメージが見えてくる。つながると、活きて働くも

のになる。思考、判断、表現だが、変化し始めてきた知識はいろいろな場面や状況で使える知識になっていく。多くの先生方は子ども達に多くの知識を与える。与える時に転移してほしいから違う場面でも使いなさいと言う。しかし、言われたからといって使えるわけではない。いろいろな場面や状況でつながることにより、その知識の汎用性が高まる。すると、なるほど、考えるとはそういうことかと分かってくる。考えることは考えるという特殊能力ではなく、目の前の問題の解決のためにすることである。問題解決のために、自分の持つ知識を一生懸命引っ張り出し、目の前の状況にアジャストしていく。アジャストしながら、場合により、組み合わせて解決に向かう。そう考えると少しイメージが見える。場面や状況とつながれば自由自在に使えるものになる。教科科目で増える知識は使う場面が限定される。これを他の状況や他の場面でも使えるものにし、自由自在に使えるようになるというイメージを持てば、つなぐ、つながる、つなげるが見えてくる。我々は子ども達に多くの知識を与え、それが適切かつ適正に発揮されてほしいと願う。与えた多くの知識がより高い目的や価値と結び付くことにより、適切かつ適正な発揮に向かっていく。これがまさに学びに向かう力、人間性、我々が期待する態度だ。こう考えると、つなぐという言葉で様々なイメージが持てる。学んだ後のポジティブな感情は極めて重要だ。一生懸命勉強した時、すごい、なるほど、面白い、わくわく、どきどきというキラキラした感覚が知識に付随すれば、その知識はまた使ってみようと思う知識になる。先生方が教えるものを嫌だな、面倒くさいと感じるようなダークな知識をまた使いたいと思えるだろうか。全授業の全場面をキラキラさせると言うつもりはない。しかし、キラキラする場面のほうがよい。そう考えると、深い学びの「知識を相互に関連付けて、つなぐ・つながる・つなげる」の意味が分かる。整理すると、構造化、身体化され、高度化することである。関連付けて、構造化されたり、身体化されたりして知識の状態を高度にし、駆動する。そのような知識イメージを持っていこうということだ。これまで我々は知識には静的で穴埋め問題のイメージがあった。気を付けたいことが 2 つある。1 つ目は中学校の理科の単元計画を見ると、10 時間・15 時間・20 時間のユニットがあったとき、全ての時間の全ての場面が深くある必要はない。最後の、締めの場面には深い学びがくるかもしれないということである。2 つ目は各校で増えているグループディスカッションである。中学校 1 年生の社会科で子ども達は単元の終末に、それぞれ自分の関心事を調べて発表する、いわゆるジグソー学習の手法だ。ディスカッションが主体的、対話的に進んでも会話の中身が社会科として高まらないと意味がない。

ここまでを整理すると、主体的・対話的で深い学びを実現するには多くの知識をインプットし、アウトプットする。これが重要なポイントである。過去の授業ではインプットにウエイトが掛かり、先生が説明し、子ども達がノートに書き写すという感じだった。これを少し変え、これまで以上にアウトプットのボリュームを上げ、認知プロセスを活性化する。イギリスのマンチェスターで、彼らは「これまでの授業はインプット 8 割・アウトプット 2 割だった。これを逆転させたい」と言っていた。ここで気をつけたいのはインプットがいらないわけではないことだ。空っぽではどうにもならない。先生方から教えることは重要で、これまでやってきたことは大切だ。ただ、それだけではつながらないのでアウトプットをしよう、話し合いをしようという部分の重要性がクリアになってきたということである。

我々はどのような授業をすればいいのか。主体的とは認知プロセスを自分の意志で、あるいは、自覚して目的を持ってやることである。少々大変でも学習を自分で調整できるようにする。そして、その時に多くの人や友達、文献やネットワークから情報を手に入れ、他者に伝え、発表・表現する。これが対話である。この瞬間、子ども達の頭の中がよりアクティブになる。では深いはどうか。バラバラな知識がつながりネットワーク化する、粒を組み立てて塊にすると考えると、様々な授業のイメージが見えてくる。粘土の粒を組み立てれば作品ができ、レゴブロックを組み合わせれば街ができるというイメージだ。このイメージを持ち、目の前の子ども達が、どのような知識の粒を持ち、自分はどんな粒を供給しようとし、どのような高まりを狙っているかを見つめれば「今日

の授業」のブラックボックスがクリアになり、デザインできる。これらについて、少しでも、イメージが持て、共有でき、自覚ができれば、実現できる。それぞれの学校や地域のリーダー的な方達が目指そうとしている子ども達の学びの姿をクリアに質高くイメージすることが大切だ。そのような授業を実現するための鍵は、いかに活用し、発揮するかというアウトプットにある。

課題に対して自ら考え、自ら取り組んでいく子ども、まとめて、表現することをやっている子ども、組み立てを工夫、発表している子ども達のスコアが良いという結果が出ている。これは因果関係ではなく、相関関係だが、幅広くこのようなデータが出ていることはこのような活動や学びが一定程度、重要だということが言える。そう考えると、我々はアウトプットにより、精緻化に向かい、収集ができ、知識をリメイクしたりもしていることが分かる。これまで以上に、アウトプットし、活用し、発揮することの意味や価値を自覚していくことが重要だ。そのために、話し合いの場面に少し工夫が必要だ。そこで、非常に使い勝手のいいツールとして、思考ツールがある。今、思考ツールによって授業はどんどん変わっている。思考ツールとは枠組み、思考を誘うフレームである。つまり、アフォーダンスである。アフォーダンスとは形が行為を誘っていることである。枠組み、フレームが思考を誘い、誘われた時に「それが比べるということだ」とフレームにラベルを貼っていけば、子ども達が使えるツールになっていくということである。関連性の時にはイメージマップ、ウェビングマップ、マインドマップ、原因と結果に分けたい時にはラベルチャート、統合したい時にはピラミッドチャート、これらを使うと子ども達が知らない間に身を乗り出して学ぶ。このような枠組み、フレームは極めて多くの子ども達に対応しやすい都合の良い道具である。

教育課程部会　実践発表Ⅰ

# 「持続可能な社会の担い手を育てる～PBL による学びと成長～」

（京都府）ノートルダム女学院中学高等学校　教諭
**石　川　真理子**

ノートルダム女学院高等学校は、ノートルダム修道女会のシスターが 1948 年に来日し開校した、哲学の道沿いに建つカトリックの女子校である。設立当時より英語教育を得意としてきたが、2016 年度にグローバル英語コースを新たに設置することとなった。グローバルの名称にふさわしい国際人を育てること、英語教育だけにとどまらない学びを提供することを目標に、新たに学校設定科目として「グローバルワークショップ」を開講するに至った。

「グローバルワークショップ」は PBL（Project Based Learning）型教育を主とする「グローバルワークショップ A（GWA)」とプレゼンテーションの力を身につけることを主目的とする「グローバルワークショップ B（GWB)」の 2 講座からなる。今回お伝えしたのは高校 2 年生グローバル英語コースに開講している GWA の実践報告となる。

GWA の教育理念は「世界の現状と課題を知り、解決策を考え、行動する」である。与えられた課題や自分たちが設定した課題に対して、その解決法を主体的、創造的に考え、実際に実行、制作する活動をとおして、現実世界の課題に対して主体的、創造的に関わることができるようになることを目指す。

世界が抱える様々な問題、SDGs をはじめとする解決策を学ぶことをとおして、私たちが地球市民（global citizen）として立ち向かうべき課題を理解できるようになること、収集した情報や自分たちが作り上げた計画や成果物に対して、論理的に分析、吟味することをとおして、自身の取り組みを俯瞰的に見ながら改善を施すことができるようになる。また、チームでさまざまな課題に取り組むことを通して、互いの強みを生かし、弱みを補填しあいながら、チーム全体として大きな力を生み出すことができるようになり、さらに、校内だけでなく校外からも支援を得て自分たちの計画を実現する取り組みをとおして、他者を巻き込んで活動することの意義、そのための手法、それにともなう責任を理解する。

そして、実際に授業を行う上で大切にしていることは、「視野は広く、でも身近なところも大切に」「主体は生徒、教員が手を出しすぎない」「高校生も大人と対等に」「実際に動く」「成功するだけがすべてではない」「手段と目的の違いをはっきりさせる」「成果の客観的な評価を常に行う」である。

年度当初には、まずクラス全体で SDGs の学び、世界の課題や問題を深く考察するところから始まる。そこから自分が興味を持ったグローバルな解決したいテーマを探究し、グループでのディスカッションと発表を通して活動テーマを生徒一人ずつが考えていく。

初年度（2017 年度高校 2 年生）に生徒たちが取り組んだ課題は、①ごみ問題、②水問題、③貧困と教育、④食料廃棄(食品ロス)、⑤フェアトレード　の 5 つとなった。

生徒たちは、自分たちが解決したい課題の解決策を考え、企画し、企画書を書くことから始める。さらに、学校との交渉、企業への協力依頼、連絡を取ることもすべて自分たちで行う。教師はあくまでもアドバイザーに徹し、教えるのではなく、生徒自身が気付くまで辛抱強く待つことが必要であった。

年間の授業計画には、生徒の活動をより深いものにし、振り返ってもらうきっかけづくりのために、いくつかのアンカー課題を計画・実施した。大阪カテドラル聖マリア大聖堂で毎年開催されている「国際協力の日」イベ

ントに参加するシナピス研修では、日本で過ごす外国の方たちとの交流、その中には難民申請をしている方々も多く、環境の違う人との関りをもった。高校生のための国際交流・国際協力 EXPO のワン・ワールド・フェスティバルでは、自分たちのプロジェクトのプレゼンテーションや世界的な課題解決を目指す他校の高校生との交流を行い、フィリピン研修ではフィリピンのスラム街や保護施設の訪問で、厳しい現実を目の当たりにした。ヨーロッパ研修では海外の高校生と英語で環境問題の討論会を行い、日本と海外の環境問題への取り組みの違いなどを感じる機会となった。

GWA を受講した生徒たちの振り返りには、「世界の大きな問題から小さな問題まで考えるようになり、どうすれば改善・解決できるのかを考えていく中でさらに興味が湧くようになりました。」「1 つの考えに固執するのではなく、自分と異なる見方を受け入れることが大切であると学びました。」「本当の幸せとは何かという一生かけて答えを出さなければいけない質問に真剣にぶつかりましたが、これからじっくり様々な経験を通して、答えを探していきたいと思います。」などの声を聴くことができた。当初目指していた生徒の学びはある程度達成できたのではないかと考えている。

このような GWA の取り組みから、生徒の成長を促す教育課程とは、各教科・科目が関わりあいながら、数年後の生徒の姿を想像し計画するカリキュラム、生徒が我がものとしてとらえることができる課題の設定、そして何より、生徒の力を信じた活動内容であることだと確信している。

教育課程部会　講演Ⅱ

# 「問いのデザイン～多様な個を活かすも埋没させるも『問い』しだい～」

京都大学総合博物館　准教授
**塩　瀬　隆　之**

日本財団の 9 か国の若者の比較データがある。

1）「自分は大人だ」
2）「自分は責任ある社会の一員だ」
3）「将来の夢がある」
4）「国や社会を変えられる」
5）「国に解決したい社会課題がある」
6）「社会課題を周りの人と積極的に議論している」

この 6 項目において、日本人の若者のスコアが諸外国に比して小さいという現状を憂う。せめて諸外国の子ども並みに社会の問題に意識を向け、自分達が社会の一員であると気付ける生徒が増えることを期待し、学校などで話題にしている。拙著『問いのデザイン』では、問い掛けを 3 つに分類している。問う側が知らず問われる側が知っている＜質問＞、両方が答を知らない中での＜問い＞、そして答えを知る側が知らない人に投げ掛ける＜発問＞の 3 つである。

どれを問い掛けるかによって、相手との関係が変わる。あるいは相手との関係により、その印象が変わる。自分はそのつもりがなくても結果として相手を試すような発問のように聞こえることもある。知らない者が知らない者に問い掛けつつ、いかにお互いの考えを深めるために問いかけあえる関係をつくれるか、こそが『問いのデザイン』で目指していることだ。

アクティブ・ラーニング等を進めるときに、「活動あって学びなし」と揶揄されることが多くあるが、多くの場合はグループワークで話し合おうと声掛けをするものの、実は他人の意見は聞く意味がない、まったく関心がないという状態で問い掛けられた場合がある。つまり、他人の考えが知りたい問い掛けでなければ、活動しても意味がない。違う考え方が多く出る話題ほど、いろいろな人と意見を交わす意味があり、1 人が答を知っていればよいことをグループワークにしても仕方がない。何をアクティブ・ラーニングの土台にするかは非常に重要で、生徒自身が他の考え方に関心を持つテーマでないとうまくいかない。その意味で、2 つの違いに関して、他人の意見を見たとき、なるほどと思われる点があれば、他人の意見を見たいテーマとなる。

さて、仲間が増える問い、仲間が減る問いはどのような問いなのか。皆さんの回答を ICT でいまリアルタイムに集めたものが、画面に映っています。「一人一人の能力」「やる気に任せても変わらない」「できることは問い掛け方を変えることだ」「問い掛けの手順と関係性を変えること」。ただし、学校の中で考えたい、あるいは考えるべき問いの中にどう考えても仲間が減る問いもある。つまり、心が苦しんだ状態を乗り越えないと向き合えない問いもあれば、SDGs のように子ども達に問い掛けたときに他人事にしかなり得ないものもある。目に見えない貧困や飢餓は実際に捉えれば問題だが、そこまで親身に考える時間が用意できない。テレビや教科書で見た以上のことがないと考えたくとも考えられない。親身になる状況や環境まで作っているかと考えると、SDGs の 17 目標の中のどれにするという問い掛けからスタートした探究らしき授業では本気で生徒達は考えを深めることができない。その意味で、どう捉えるかにより問いの扱い方は変わるし、問いの捉え方が変わることにより相手との関係性が変わる。関係性が変わると投げ掛けた問いの関係が変わるので、勝手に考えたくなる問いであれば、そういうフレーズだけ並べればよいが、本当に考える、解決すべきものは目を背けたくなる問い掛けもある。そのような難解な問題に取り組んでもらうために関係、問い掛け方をデザインする必要がある。その意味で丁寧に問いを作る方法を探究している。教育現場では探究をはじめるためにも研究テーマリストが欲しいとなる。しかし、テーマをもらうとそれはただの作業研究で探究の授業ではない。自分自身で何をすべきか考えることが探究の始まりとすれば、リストは無意味だ。それ自体を考えていくものを作らなくてはいけない。大事なことは問いが変

わって関係が変わり、関係が変わって問いが変わるという循環を経験することだ。それにより、生徒達の考え方や一生懸命さが変わるという経験を先生同士もしてほしくて、『問いのデザイン』を紹介している。次に、生徒に将来何になりたいかを問い掛けたとき、どう回答して欲しいか。生徒から何が聞けたらうれしいか内省して欲しい。逆に、我々が小中高時代に同じ問いをされ、期待する回答ができるだろうか。もちろん、子どもに期待することはたくさんある。結局大人は何を期待しているのか。新聞、メディア、報道に出てきた子ども達がなりたい職業に惑わされていないか。本当に子ども達の思考がそこに乗っているのか。親、大人が周りで聞いているのではないか。それをまた聞きした状態のまま子ども達の回答を批評していないか。自分達が若い頃に成功と思った価値軸と、今、世の中で成功だと言われる価値軸がずれていた場合に、大人は自分の知っている物差しでそのまま子ども達を褒めてよいのか。こうなって欲しいことに対しての原風景は大人が幼少期あるいは青年期の成長する過程の中で身に付けた古い価値観も多いので、今、何が起きているのかを説明しづらい。そう考えると、大人が喜ぶ姿を子ども達に見せてもらうことは本当に正しいのか、そろそろ一度疑ったほうがよい。私が生徒に話すときには、大人に褒められないように生きようと伝える。それは悪いことをするとか不誠実に生きるという意味ではなく、答えがそれしかないと思い込むことをやめる意味だ。今、SDGs が大事と言うが、SDGs が何かがあまり知られていない。それでも、SDGs に対してどう向き合ってもらうか考えて欲しいときがある。一昨年のワークショップを紹介する。ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス博士は世界中で小中高校生に向けた講演の機会をもつなど、教育分野にも多大な貢献をされている。2 年前の来日で上洛されたときに、一辺倒の講演会では質疑応答も選ばれた生徒の行儀の良い質問があらかじめ用意するなどがあり得るが、今回の講演会では、そういったことを選択せず、あえて膝詰めの対話の機会をいただいた。そこでノーベル平和賞受賞者と高校生の対話の場づくりとした。30 日チャレンジという 30 日間ただ 1 つのことを考え続けることを行った。「貧困とは〇〇である」という、「〇〇」の中の言葉埋めを毎日やってもらった。参加した京都の高校 4 校の生徒が考えたのはなくそうと思ってもまたどこかで別の貧困が生まれ、結局なくならないという意味で、「貧困とは無限ループである」、誰かが偏見を持ち貧困と呼ばれるので、「貧困とは偏見である」、「貧困は必ずしもなくすべきものとは限らない」というものもあった。これは、自分達は恵まれた状態におり、もし貧困がなくなり全員対等になると、自分達が勝ち取った優位がなくなるのではないかと不安に思う。これは高校生だからこそ素直に出てきた考え方で、貧困をなくすと本当に全員幸せなのかを考えると、安心している立場でなくなると困るかもしれない。その疑問は大人では口に出せないが、高校生達はそれを正直に言葉にした。そういう率直な吐露をしながら、解決されない理由は何かと考えると、実は生み出していると思っていない人達にも原因があるという考えに近づく。このように一つの言葉を丁寧に考え続けると、1 週間くらいで言葉が尽きる。言葉が枯渇して初めて、他の人達の考え方が知りたくなる。そのときに別の考え方を聞き入れ、視点が広がる。そこが他の人との意見交流の瞬間だ。それにより言葉が増え、1 週間たち、また言葉が尽きる。さらに友達の言葉から着想を得た新たな言葉もまた足りなくなると、違う人に声を掛けしなくてはいけないし、あるいは本や新聞などのメディアへの問い掛けにより新しいアイデアが入る。そうして 1 か月、自分たちの言葉を絞り尽くした結果をユヌス博士にぶつけたのがこのときのプロジェクトだ。生徒が書いた感想文の中に「教科書に書いてあると他人事に見える」とあった。教科書で読むほど自分とは関係ないと思ってしまった。これは学校教育現場からするとショッキングな回答の一つだが、そこから転じて、「私達がもしその国に住んでいれば教科書に書かれたくない」という言葉もまた印象的である。教科書に貧困である国として書かれること自体がひどい仕打ちではないか。それに気付いていないのではないか。つまり、かわいそうだと名付けるためだけに教科書に載っているのではないかという話をしていて、生徒達の捉え方はストレートでかつ芯を突いている。さらに、今まで SDGs のつもりだったが、1 か月間一つのことを考え続けて、初めて自分達が取り組んでいる問題の大きさが分かったと話してくれた。自分達が取り組みをきちんと考えてから取り組めるかどうかが大事で、表面だけで達成したものが子ども達によい経験になるだろうか。それを深めるための手段をどう作るかを考えたのが、30 日デザイン・チャレンジだ。京大式カードという紙に一つ一つ全員で書き、30 枚前後のものを 16 人分並べる。全部並べて、そこから選りすぐった問いを各グループ 10〜15 分くらいでユヌス博士に説明をし、ユヌス博士から考えを聞くことを繰り返すという企画だ。進行も含めて全部生徒が行い、私は冒頭の説明と生徒達が詰まったときのフォローだけと思ったが、ユヌス博士の講演会全体 2 時間の中で

5 分しか喋る必要がないほどの出来栄えであった。一番充実していたことは、生徒達が自分達で考えているので、ユヌス博士から何を言われても、どう聞き返されても、何を答えられたとしても、全部自分達でもう 1 回考えられることだ。その中に「ユヌスさんなら貧困とは何であると書きますか」と直接聞いた生徒がいた。大人なら世界で一番貧困とは何かを考えている人を相手に、またそれが自身も知りたいと思っていたとしても素直には尋ねることは難しかっただろう。生徒達は考えつくしたが故にユヌス博士の考えを知りたいわけだ。そしてさらに驚いたことは、ユヌス博士が即答したことである。

Denial of the opportunity、すなわち機会を否定されることである。チャンスがないことに上乗せして、チャンスの存在自体教わらず、選択肢の存在すら知らず、学べることすら知らず、そもそも選ぶ、選べない、受け取れる、受け取れないとの考えに至る手前ということも含めて話された。自分自身に望みの存在を知ることができない。この話は中学生向けでも高校生向けでも同じように話す。つまり、貧困問題の存在は教わったことがあると応える生徒は多いが、貧困とは何かを考えたことはない生徒がほとんどである。その問題が存在すると教科書に書いてあり、テストでは貧困についていくつかの一問一答には解答できるが、それでも貧困が何かについては考えたことはない（考える時間がない）生徒が多くいる。そんな中で、学校の中で生徒に望む探究とは何なのか。SDGs の 17 項を書き上げることで子ども達が学んだことになるのか。貧困な国を 3 か国挙げよと言われ、3 か国名を挙げることが貧困問題に取り組んだことなのか。生徒達にとって貧困について考える機会とは何なのかを考えた上で、先生は貧困とは何かを生徒に投げ掛けたのか。探究すべき課題と探究して欲しいことは多くあるが、なぜ探究するのかに気付いている大人が少ないため、それを生徒達にやらせるときに何をさせればよいかが分からない。そう考えると、生徒達とともに考えたことは何なのか、考えるべきことは何なのか。知らないことを生徒の前で話すことは先生にとって苦しいことだ。教えたいと思って教職に就く方が多いと思うが、教えられないことを教壇に立って生徒の前で話すことの意味を理解しないとお手上げ状態な SDGs 等の問題を一緒に考えることは難しい。それでも先生方が今まで培った経験で考えられること、生徒より知識は多くあり、それを道具として生徒とどう対話するかが重要だ。

次の話題は、岐阜市で開校された草潤中学校という不登校特例校の話題である。この学校の除幕式のときの挨拶が、その後ネット上で話題となり多くの反響を頂いた。前教育長から「理想の学校を作るために何を作ればよいか」と聞かれ、私は B バーバパパのがっこうが理想的ではないかとお伝えした。それから 2 年、この学校はバーバパパがっこうプロジェクトと呼んでおられる方もいるプロジェクトとなった。絵本「バーバパパのがっこう」にはフランスの小学校で管理教育をし、子ども達が言うことを聞かず学級崩壊して荒れているところに市長が警察官を導入してでもじっとさせようとする場面がある。そこにバーバパパ親子が、子ども達をみんな森に連れていき、家族一人一人がもつ異なる個性でそれぞれ子ども達がやりたいことに向き合い、伸ばしていく。山を登り、草原を走る、植物採取をし、踊る、機械いじりが好きな子どもたちもたくさんいて、それぞれの関心に合わせて好きなことをやらせる。そのうちに自分達が興味を持ったことの先に授業が円滑に結びついてくれると、子ども達は生き生きしてくる。こういうバーバパパのがっこうに盛り込まれた圧倒的な安心、こんな学校がこの町にできないか、というチャレンジでした。すべての授業を iPad で録画をして流すので、教室でも家でもどこでも好きな場所で受けてもよい。学校の中にはオンラインに集中できるオンライン室や周りを囲まれて一人になれるスペースなども用意されている。出席はそもそも気にしない。さらに担任の先生を生徒自身が選ぶことができる。セルフデザインという授業で、不登校特例校の大きなメリットの一つである、中学校のカリキュラム履修時間に 100 時間ていどの削減幅があり、そこで捻出された時間を個別対応の余力とすることができる。セルフデザインという授業で興味関心を伸ばしたり、どの時間にどの教科内容を学ぶかということにも自己生成の機会を増やしていっている。叱られる部屋としての職員室ではなく、お弁当を食べにいける職員室となればこそ普段からでも喋りに行ける。好きな格好で学校に行くことができる。時間割が各自違うため、先生は生徒がいまどこにいるかを把握するのが難しいという状況から、「イマここボード」と呼ばれる現在地サインが工夫された。学びたいときに学びたいところで学びたいことを自分で選んで学べる学校をいかにデザインするか、このコンセプトを実現するためにも、時間割に変動を持たせ、授業場所にも選択肢を設け、教科内容も変更できるようにされている。

ここで本日ご参加の先生方に、また ICT を使ってこの草潤中学校の仕掛けをご覧になって、自校でも採用した

い、というものがあったらお知らせください。「学びの場所の自由」「教室でも図書室でも家でも同じ授業が受けられること」「学びの時間が自由で、時間はある程度自分で調整可能なこと」「学びの内容の自由で、セルフデザインという自分の進路に合った自由があること」さらに、＜わがまま通信簿＞という仕掛けも起案させていただいており、通常の通信簿であれば生徒が長期休み前にもらい、次の学期の初めに持っていき、誰と誰が通信しているのかわからないまま生徒自身も 2 度開けることはほとんどない。そこで、生徒から評価としてぜひ見て欲しいところを枠で大きくし、逆に先生も立場上見ておきたい評価項目があるはずで、その枠を広げようとする。生徒と先生のお互いがその枠をせめぎ合うようにして共同で通信簿を作るようなコンセプトの提案である。

担任の選択制は教員向け研修会での簡単なアンケートでは、一番不人気で拒否的な反応が多かったように思われる。特定の先生に人気が集中し、人数が偏ることへの懸念が大きいようであるが、実際に草潤中学校では人気のある先生ももちろんいたが、逆に「生徒が集中しない先生がよい」という選び方をする生徒もいた。これはたくさんの生徒を受け持ってしまうと、自分のことを見てもらえる時間が減ってしまうことを危惧しているのかも知れない。制度をつくる側からすると、懸念事項が多く悩ましいことでもあるが、大人側が勝手に懸念するだけの問題とは違うところで生徒達が考え悩むことも多くあった。個人的には一番大きな成果の一つがお弁当を食べる場所が選べる自由だと考えている。人間関係の中で、常に友達と一緒だったり、常に 1 人だったりというのとは異なり、もっとグラデーションの人間関係があったときに、そのグラデーションがうまく隠れるような多様な空間が学校の中に担保されていれば、学ぶときも、お弁当を食べるときも、話すときも、遊ぶときも、学校の中でよい意味で目立たない。一部屋一部屋の機能区分が明示的であればあるほど、それ以外の使い方が許されない。

この学校の開校挨拶のことがネット上でバズったとき、「生徒達を甘やかすべきではない」といった心無い意見もあった。「社会にでれば、人間関係において誰かと合わないことは多々あるのだから、我慢するべきで担任の選択制はよくない」という批判コメントも少なからずあった。しかし私自身が応えるならば、最初に行った学校でもし先生と合わないことが理由で学校に通うことを断念してしまった生徒がいたとするならば、もう 1 回そこから入るというのは酷というものです。我慢することが学校で覚えることなのか、と問われれば、それ以上に学校は学ぶための場所です。学びたい意思があれば、他の人間関係が合う合わないなどの理由でそれを断念させてはいけない。逆に、大人になると合わない人間や内容はいつか変わると知っていて、場所さえ変えればあるいは時がたてば自然と解決するなど大丈夫になるということも経験上知ることができる。しかし、小学生や中学生にとっては、最初に出会った学校や最初に出会った家族以外の大人の一人として先生がいたとき、そこは世界のすべてのようなプレッシャーにさらされ、もしそこで合わないとなると自分自身を否定しかねない。だからこそ、合わないときに我慢ではなく、自ら変えることができる、という可能性を生徒たちには知っておいてもらいたい。教室でうまく合わない生徒や先生との人間関係を我慢し、1 日中じっとしていなければ学べないというのではむしろ義務教育に反している。いかなる理由があれ、生徒たちが学びたいといったときに、その学べる環境を用意しなければいけない。ICT はそれを実現しうる道具の一つにすぎない。このコロナ渦において日本中の学校がオンライン上での学びの機会を成否を問わずに経験できたということは一つのきっかけになると思われる。

ICT も探究の力もプログラミングも、全部使いこなせれば必ず役に立つ。それは間違いない。しかし、よく分からないまま習ったところで役には立てられないため、どのような意味があるのかはぜひ一度、大人の中で考えた上で、生徒達に必要であればシェアして欲しい。自分達の考えていることをもう一度考え直すことが主体的で対話的で深い学びに直結する。対話しなくていいことを対話するから「活動あって学びなし」になる。本気で他の人の考え方が聞きたいような内容であれば自ずと対話は始まるし、それが本当に解き明かせていない問いならば自ずと深まるし、主体的で対話的で深い学びというのは、テーマの選び方次第でどこからでもスタートできる。

教育課程部会　実践発表Ⅱ

# 「『主体的・対話的で深い学び』を通じ、生徒の賜物を育む探究学習の教育効果に関する研究」

（大阪府）清教学園中学高等学校　司書教諭
**南　百合絵**

2019 年度、日本私学教育研究所の委託研究事業として、「主体的 : 対話的で深い学び」を通じ、生徒の賜物を育む探究学習の教育効果に関する研究」（2020）を行いました。それを受け、本校での探究的学びの実践と探究学習の教育効果に関する研究についての報告をさせていただきました。

## １．本校の概要

本校はキリスト教主義、男女共学の中高一貫校で、「賜物（たまもの）を生かす」をスクールモットーとしています。生徒数は 2019 年度　中学校 508 名（12 学級）、高等学校 1152 名（30 学級）、総生徒数 1660 名。図書館スタッフは 6 名で、そのうちの 3 名が中学校の総合学習の授業をチームティーチング（T.T.）で担当しています。

## ２．清教学園中学校における探究的な学びとは

清教学園では、図書館と ICT を使った探究的な学びのカリキュラムを中学 1 年次から構築しています。このカリキュラムは、2007 年度から開始され、毎年内容を改善しながら継続しています。

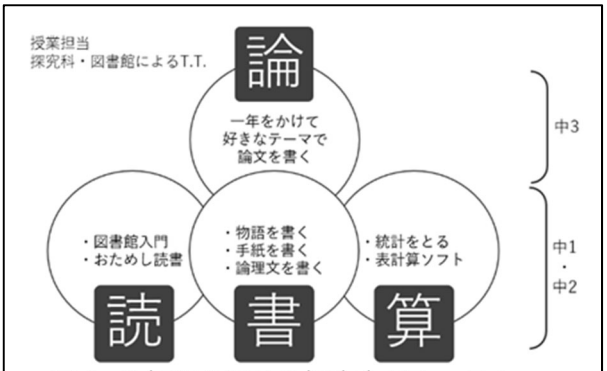


図１　３年間を通じた探究カリキュラム

専門・専従のスタッフと図書館が連携し、T.T.で行われている総合の授業では、生徒たちに「なにを学ぶのか」「どう学ぶのか」「なぜ学ぶのか」を問い続けます。自分はどのような人間なのか、自分の「賜物」はなにかを問われ続ける授業です。このような個々に対応が必要な授業が可能なのも、生徒の興味に強い図書館があるからです。

探究的な学習の基本であり、前提となるのが、幅広く楽しく本を読む習慣、論理的に書く習慣です。そのため、総合の授業では中学 1 年生で図書館の使い方を学び、調べる学習の作品作りを通して自分の興味・関心を見つめます。また、物語を創作し、手紙を書きつつ、コンピュータによる文字入力の基本を学びます。中学 2 年生では、世界を「統計」の視点から探ります。自身でアンケートを作成したり、社会調査を行ったりして得たデータを分析しつつ学びます。このように、総合の授業では繰り返し自分の「賜物」を問われ続けます。それが総合学習の集大成、卒業論文「なんでやねん」を執筆するための「知的基礎体力」となるからです。

## ３．卒業論文「なんでやねん」の取り組み

卒業論文「なんでやねん」は、文献調査とフィールドワーク調査の 2 つの方法を組み合わせて行います。

研究テーマは生徒が決め、自分の興味・関心の対象は何か、なぜその対象に興味・関心があるのか、その対象を学ぶことに何の意義があるのか、繰り返し問われます。自分は何を研究するのか、テーマを決めることが、研究の最難関です。そのため、授業では生徒が様々な角度から自分自身のテーマを探し、見定める機会を作ります。「アイデアシート」の書き出しや、おためし読書「研究っておもしろい」編、本棚をぶらつくブラウジング、先輩の作品を読む、などです。

授業では「客観的なデータを示し、論理的に論文を構成できれば、(公序良俗に反しなければ) どのような研究テーマを扱ってもよい。ただし、できるかどうかはあなた次第」と伝えます。テーマによっては、難解な資料しか出版されておらず、生徒の手に負えない場合や、そもそも資料がなくて研究をスタートできないということもあるからです。

**４．図書館の多様性と生徒の多様性が出会う**

T.T とはいえ、1 学年 170 名余りの生徒のテーマに寄り添うのは大変です。そこで頼りになるのが図書館の蔵書、本です。生徒たちは図書館で導き手となる本と出会い、それぞれ学びを深め、その分野のことばを学んでいきます。そのため、本校では、「1 テーマ 3 冊」をコンセプトに、生徒のテーマの本を収集し蔵書に加えてきました。これまで約 1900 名の生徒が取り組んだ卒業研究で現れたテーマは 900 件あまり。図書館の多様性において十分賄える範疇です。生徒の興味が育てた蔵書は 7 万冊を超え、今も成長を続けています。

また、総合学習の作品は公開を原則としています。読者の存在が作品づくりのモチベーションにもなるからです。生徒が執筆した卒業論文「なんでやねん」も登録され、蔵書として図書館に並べられます。自分が参考にした本の隣に自分の卒業論文が並び、貸し出しもされるようになるのです。

**５．探究学習は彼らの人生にどんな影響を与えているのか**

それでは、このような授業は、その後の生徒たちの人生にどのような影響を与えているのでしょうか。実施初年度の生徒たちの年齢は、2019 年現在 28 歳、社会に出て数年が経っています。そこで、2019 年度、日本私学教育研究所の委託研究事業として、本校の探究学習が彼らの人生にどんな影響を与えているのか、履修者に振り返りアンケート調査を行い、探究学習の長期的な教育効果の検証を行いました。調査対象は 2 グループで、「在校生」グループは中学 3 年次に卒業論文を提出し、清教学園高校に在校している生徒 (505 名、有効回答数 456 名、悉皆調査、15～18 歳)、「卒業生」グループは、中学 3 年次に卒業論文を提出し、大学進学・就職等している卒業生です(1985 名、有効回答数 160 名、任意調査、18～28 歳)。

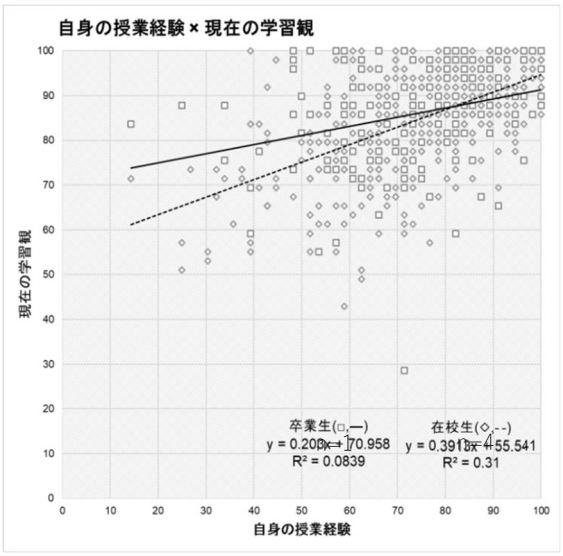



**図３　授業経験群×学習観群 相関**

図 3 は、選択式回答の順序に係数を掛け、最大 100 ポイントの値で換算し数値化を行った、授業経験と学習観の相関関係です。この結果相関係数は、在校生が 0.556（正の相関)、卒業生が 0.289（弱い正の相関）となりました。

授業者はこれまで、自由なテーマ設定による探究学習を「よい」と信じ授業を行ってきましたが、この調査により、それが裏付けられる結果となりました。探究学習とは、単なる能力の育成にとどまらない、長い射程を持った学習です。学習者自身の芯となる、賜物を育む教育効果が期待されます。

教育課程部会

# 「総　括」

京都文教中学高等学校　理事・校長
**初　田　泰　宏**

教育課程部会は「21 世紀の世界に挑戦する新しい学びを探る」を研究目標に開催しました。来年度から学習指導要領の全面改訂にあたり、各学校が建学の精神のもとで、今後の予測しにくい社会の中で私学として生き抜くために、どのような学校を目指すのか、どのような生徒を育てるのか。そのヒントを得ることができる機会になればという思いで準備をして参りました。

田村学先生の講演では、学習する子どもの視点に立って、教師は関わりを持っていく必要がある。その関わり方には主体的な学びができるように、いわゆる、学びの振り返りを子ども達に経験をさせていく。そしてバランス良く主体的に学ぶ姿勢を身につけさせる。また一人で学習するのではなく、周りの人と話をし、自分以外の考え方を知り、考えを深めていく。深い学びは他教科とのつながりを大切にし、連携を取って気づきを得るようにしていく。深い学びのためには、発表、表現の機会が必ず必要になるということでした。塩瀬隆之先生の講演では、「問い」を深める中で、周りがどのような「問い」を作っているかを見ながら、さらに「問い」でどのようなことを聞くことが一番知ることになるのか。自分が考えてその「問い」に答えていき、周りの人の反応も見ながら、より考え方を深めていくことが大事である。固定観念を打ち砕く必要がある。「問い」を自分のこととして考える必要があるとお話し頂きました。石川真理子先生の実践発表は PBL を通して、社会を生き抜く人となるために必要な問題解決能力を育てるということでした。基本はキリスト教の精神を大事にする、そして国際人を育て、英語教育以外にも関心を持ち、特色のある教育をする。SDGs の 17 項目のテーマから自分で「問い」を立て、自分なりの解決方法を提案し、実際に訪問等をして、可能かどうかを確かめていく。この取り組みをこれからも続けたいということでした。南百合絵先生の実践発表は、図書館を利用して、「何を学ぶのか、なぜ学ぶのか、どのように学ぶのか」をお話し頂きました。中学の 3 年間で卒業論文を書くことを通して、生徒達に結果として大きな自信がつく。そしてその 3 年間はしっかりと生徒達に関わりながら、見守りながら育てていくという姿勢を取っているということでした。

今回の学習指導要領の改訂は、どのような学校を目指し、どのような生徒を育てるのかが問われていますが、学校としてトータルの改革が求められていると思います。そして目指すべき教育改革の方向性は生きるために必要な知識及び技能の修得を図る、思考力・表現力・判断力を育成し、その学びを人生や社会に生かすことができる人を育てていくところにあります。これからの時代を生き抜く子ども達を育てるには、すべての学校活動の中でアウトプットする機会を意識して設けることで、生徒達は自分の意見、考えを整理し、考えを深め、他者の考え方を理解し、共鳴し合いながら個人としてあるいは集団として成長していくのではないでしょうか。

参加された先生方が今回の学びを持ち帰って、学校の中で共有し、それぞれの建学の精神を核にした新しい時代の特色ある実践を行い、一層の学校改革に努めて頂ければこの上ない喜びです。

最後にコロナ禍の中、多くの先生方の参加を頂き、お礼を申し上げたいと思います。そして京都大会が次の岐阜大会につながることを祈念して、総括とさせて頂きます。

# 生徒指導部会

社会情勢の急速な変容や、急速に進歩する ICT 技術が生活に入り込むことによって、生徒を取り巻く環境は急激に変化している。不安定な時代にあって、子どもたちは何をベース（基準）に生活を送り、誰を頼りに生きているのかということを、私たち大人（教育者）は本当に理解できているのであろうか。

コロナ禍の中にあっても、子どもたちは未来に夢を持ち、希望を失わずにいる。私たちはそんな子どもたちの縁（よすが）となるためにも、日々の研鑽を忘れてはいけない。

当部会では、2 つの講演と 2 つの実践発表を通して、子どもたちの実態を知り、どのように向き合っていくのかを考え、これからも生徒を支え、力づける存在としての教育者のあり方を見いだすことを目標としたい。

1　研究目標　　急速に変容する世界を生きる若者の育成を考える
2　会　　場　　ザ・プリンス京都宝ヶ池　1 階「ロイヤルルーム」
3　参加対象　　理事長、校長、副校長・教頭、教員
4　参加人員　　６２名
5　日　　程

| 時間 / 月日 | 9 | 30 | 45 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 30 | 15 | 30 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 月 22 日（金） | | | 開会式 | 講演Ⅰ | 実践発表Ⅰ・Ⅱ | 昼　食 | 講演Ⅱ | | | 実践発表Ⅲ・Ⅳ | 閉会式 | |

6　内容・日程細目

| | |
|---|---|
| 9:00 | 受　　付　　機材担当：鳥山　　拓<br>（髙田　笑未／田中　美咲）　　記録(写真)担当：清水　良司<br>記録・集録担当：松浦　純子 |
| 9:30 | 開　会　式　　司会：松田　英人／記録：松浦　純子<br>１．開式の辞<br>２．運営委員長挨拶　　生徒指導部会運営委員長　兒　島　裕　之<br>３．運営委員紹介<br>４．日程説明<br>５．閉式の辞 |
| 9:45 | 講　演　Ⅰ　　司会：松田　英人／記録：松浦　純子<br>講師紹介：兒島　裕之<br>演　題　「ネット社会と中学・高校生の実態<br>～大規模調査からみえる中学・高校生の人間関係に注目して～」<br>講　師　原　　清　治　　佛教大学　副学長／教育学部教授 |
| 11:00 | 実践発表Ⅰ　　司会：松田　英人／記録：松浦　純子<br>テーマ　「現代における SNS に関する問題事例と対処法について」<br>発表者　下　野　龍　司　　（京都府）京都文教中学高等学校　教諭 |
| 11:30 | |

| | |
|---|---|
| 11:30 | 実践発表Ⅱ　　司会：松田　英人／記録：松浦　純子<br>テーマ　「中高 6 年間の成長度に応じた携帯電話、SNS の利用ルールと現状」<br>発表者　田　中　孝　明　　（京都府）立命館中学高等学校　教諭<br>田　中　京　平　　（京都府）立命館中学高等学校　教諭 |
| 12:00 | 昼　食 |
| 13:00 | 講　演　Ⅱ　　司会：松田　英人／記録：田中　美咲<br>講師紹介：兒島　裕之<br>演　題　「ブラック校則の見直しを～生徒の自己決定権とどう向き合いますか～」<br>講　師　村　井　勝　則　　堂島パーク法律事務所　弁護士 |
| 14:30 | 実践発表Ⅲ　　司会：松田　英人／記録：田中　美咲<br>テーマ　「校則の無い学校での生徒（生活）指導」<br>発表者　二　股　一　郎　　（京都府）同志社国際中学高等学校　教諭 |
| 15:00 | 実践発表Ⅳ　　司会：松田　英人／記録：田中　美咲<br>テーマ　「生徒の主体性やシティズンシップを育む生徒指導（支援）<br>～校則・情報モラル～」<br>発表者　霜　田　慶　介　　（京都府）ノートルダム女学院中学高等学校　教諭 |
| 15:30 | 閉　会　式　　司会：松田　英人／記録：松浦　純子<br>１．開式の辞<br>２．総　括　　生徒指導部会運営委員長　兒　島　裕　之<br>３．閉会の辞 |
| 16:00 | 解　　散 |

7　講師・発表者（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 原　　清　治 | 佛　　教　　大　　学 | 副学長／教育学部教授 |
| 村　井　勝　則 | 堂　島　パ　ー　ク　法　律　事　務　所 | 弁護士 |
| 下　野　龍　司 | 京　都　文　教　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| 田　中　孝　明 | 立　命　館　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| 田　中　京　平 | 立　命　館　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| 二　股　一　郎 | 同　志　社　国　際　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| 霜　田　慶　介 | ノートルダム女学院中学高等学校 | 教諭 |

8　運営委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 兒　島　裕　之 | 福　知　山　成　美　高　等　学　校 | 理事長・校長 |
| 副委員長 | 松　田　英　人 | 福　知　山　成　美　高　等　学　校 | 副校長 |
| 委　員 | 山　田　千　歳 | 京都先端科学大学附属中学高等学校 | 教頭 |
| | 鳥　山　　拓 | ノートルダム女学院中学高等学校 | 教頭 |
| | 清　水　良　司 | 立　命　館　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 松　浦　純　子 | 同　志　社　女　子　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 水　島　壮　司 | 京　都　翔　英　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 二　股　一　郎 | 同　志　社　国　際　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 髙　田　笑　未 | 京　都　暁　星　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 田　中　美　咲 | 福　知　山　成　美　高　等　学　校 | 教諭 |

生徒指導部会　講演Ⅰ

# 「ネット社会と中学・高校生の実態 ～大規模調査からみえる中学・高校生の人間関係に注目して～」

佛教大学　副学長／教育学部教授
**原　　清　治**

学校現場では、ネットいじめが見えないと言われることが多い。そこで、ネットいじめを可視化できないかと、20 年近く研究を継続している。ネットいじめには地域性があるという視点から調査を行った。十数年前は京都市内と府下の学校では地域差があったが、市内の学校の啓発意識が高くなり、ドーナツ化現象のように周辺部にネット被害が広がった。さらに、2015 年の調査データを京都の公立私学問わず、学校ごとのデータ分析を行うと学校間格差があり、ネットいじめが起こりやすい学校とそうでない学校があることを知見として得た。2020 年度に再び大規模調査を行ったが、2015 年とは少し違った角度から分析を行った。その結果、同じ学校、学年でもネットいじめが起こるクラスと起こりにくいクラスがあり、これをクラスの磁場と捉えた。部活も同じ傾向があり、子どもたちが存在する空間の中でネットいじめを誘発する「なにか」があると考えられる。ネットいじめが起こりやすい空間と起こりにくい空間があるならば、なにがその引き金となるのかというメカニズムを分析した。背景に子どもたちの人間関係の変化がある。

最近の子どもたちの中ではいじりという行為が広まっている。ネットいじめの多いクラスや磁場の中には他の集団よりいじりが多くみられる。つまり、彼らはいじめている意識がない。むしろ、データからは面白いネタをグループで共有してみんなで笑う感覚に近いと考えられる。実際にいじめはいけないが、いじりくらいはいいのではという考えを持つ先生もいる。いじりは現代の子どもたちの人間関係の導入となっているため、いじりをすべて否定してしまうと、それこそ彼らはコロナ禍の中で人間関係を構築する方略がなくなってしまう。つまり、いじりが全部いけないのではなく、特徴的ないじりが出てきた場合が危険だといえる。そのいじりが徐々にカーストに従って弱い立場の生徒に向かい、恒常的に 1 人の生徒に向くようになること、つまり、いじられキャラである特定の生徒に固定化すると危険といえる。ネットいじめは見えにくいが、先生方が予見する方法はある。それはいじりが頻繁に起こっている集団を継続して観察し、いじりが特定の生徒に集中するようになったとき、リアルいじめも含めて、人間関係の崩れを指摘することである。では、それをどのように立証するのか。

文部科学省の 2020 年度の不登校データをみると、小中学生で 19 万人、高校生で 4 万人、計 23 万人の小中高生が 30 日以上学校に行けない状況にある。日本財団の 2018 年調査によると、70 万人近くが不登校あるいはプチ不登校だと指摘した。この行きにくさを「生きる」をあてて「生きにくい」と書く場合もある。そして、この生きにくさの源流はコロナだった。しかし、研究者からすると奇異な現象が起こった。2020 年春、緊急事態宣言で多くの学校は休校となり、再登校が漸次始まった。そこで幾つかの自治体や学校からそれまで不登校気味の生徒が学校に来たという報告が相次いだ。これまで先生方が尽力しても、なかなか学校に足が向かなかった生徒達がコロナで 2 カ月休校になり学校に来れるようになったのである。この現象の解明が現在の教育学の中心課題である。そこから見えた 1 つの大きな理由として、全員マスクをして登校していた点にある。コロナ以前よりマスクをして登校する子どもは報告されていた。それに着目し、データを取り始めると、学校によってマスクの着装率が異なることが明らかとなった。アクティブ・ラーニングを先行導入していた学校やクラスではマスクの着装率が高かった。つまり、授業中のグループ議論を避ける傾向がみられた。なぜマスクをしているのかインタビューをすると、みんなの前で「晒されている感じ」がするという回答が多かった。先生方は、授業中に生徒の考えを聞こうと生徒をあてる。今後はこうした対話型授業が主流となる。このときに、期待される答えが提示できた子どもはよいが、間違った子

どもは先生に間違いを指摘される。この、先生から発せられるネガティブワードを最近の中高生は嫌う。マスクをしている子どもたちの多くがこの原体験を持つ。ところが、コロナ禍以降、全員がマスクをして学校に行く状況となり、会話を制限されたことで安心感をもてた。不登校の子どもが登校し、先生方は本人と丁寧に向き合い、「少しは学校に来たいか」と聞き、「はい」と答える。「そうか、いつから来る」と聞き、「来週月曜日から来ます」と答えることが多い。少し前向きな気持ちになったのだから、教師の立場からすると本当なら「明日から」と答えてほしい。しかし、皆「次の週から」と回答する。これを臨床心理学者は「リセット」と呼ぶ。さらに登校支援の先生方から指摘されるのはスモールステップである。多くの学校が密を避け、様々な工夫を行った。それは登校支援の先生方やカウンセラーがよく行う、少しずつ登校のステップを上げ、最終的に登校に結び付けられるような支援の仕方と通底している。コロナで2カ月学校が止まったことにより、その子どもたちのメンタルに何が起こっているかを分析的に考えるヒントを与えてくれた。

ネット社会との関連で考えると、大きなデータの変化を見て取ることができる。先生方は生徒指導の立場として、「本当の友情は face-to-face の人間関係から構築される」「子どもたちにとってネットを使って人間関係を構築することも必要」等様々な考え方がある。しかし、約7、8割の先生方は face-to-face は譲れないと回答される。そこを譲ると学校や集団生活、集団活動や社会性というキーワードが消えてしまうと理解されているからでしょう。しかし、子どもたちのデータを取ると、2、3年前から確実に先生方の face-to-face の価値観と逆転現象を起こしている。そして、コロナで明らかにひっくり返った。つまり彼らはスマホを使った人間関係、それこそが人間同士の関係性のきっかけを作ったり、深めたりする方略と考えている。ゆえに、先生方が face-to-face の関係こそが重要と言い、ネットを否定すると自分達のことを分かろうとしてくれない、分かってないと思われてしまう。つまり、自分達の価値意識のようなものを受容しないと生徒たちは心を開いてもらえないということだ。では、なぜネットに頼るのか。大学の合格通知後に「佛教大学教育学部」とネット検索すると、SNS 上では佛教大学に行く生徒のコミュニティが形成されている。入学前からネット上でコミュニティを作り、友人を募り、様々な情報交換をし、入学式当日には周りが誰か分かっている。こういう関係を作った上で、大学生活をスタートする。入学式で友人ができるかなと言っている子どもたちはそこから取り残されている。今の中高生はネット上で全く知らない人間とコミュニティを作ることに対して非常に長けている。彼らは誰よりも早く友人を作りたがり、友人の中に入りたがり、人間関係を構築し、安心できる空間にすることで学校に行くことができる。中高生もだが、新しいクラスに馴染めるかどうかは、自分を受け入れてくれる空間があるかどうか、つまり居場所があるかどうかと言い換えてもよい。

近年の子どもたちの人間関係の構築は4つの点から論じられている。1つは子どもたちの人間関係の少人数化である。2つ目は少人数化した人間関係は同質性の高い人で構成されること。小グループでは攻撃を受けにくい。つまり、自分へのリスク回避を考え、リスクの少ないグループを選ぶようになった。一方でリスクを低減したはずの小さな同質性の高いグループは、グループの中に序列を持ち込みやすい。これがカーストである。カーストが高い子どもが低い子どもを恒常的に固定化させていじる構造になっている。教室内でカースト構造があれば、データ上ではいじめやネットいじめが起こる割合が高くなる。だから、ネットいじめは「見える」。この見えるようで見えない序列性のようなカーストがかなり露骨に見られる学校、クラス、部活には注意が必要だ。

2015 年調査の偏差値とネットいじめの発生率を集計したデータを見ると、学力低位群から高位群に向けていじめ発生率が減少していた。ネットいじめは、勉強が嫌いな集団や学校、グループの中に集中して起こりやすい構造にあったが、学力最上位の中でも見られた。これが2つ目の特徴である。つまり勉強できる子どもたちもネットいじめをしている。そこで、低位層と最上位層で起こるネットいじめに違いがあることに注目した。勉強が苦手な子どもたちのネットいじめは直接攻撃型だった。つまり、相手を特定し SNS 上に書き込んで直接その子どもを攻撃する。これは暴力事象も起きやすく、先生方も生徒指導がしやすい。なぜなら、加害者はいじめを認め、周りも見ているからだ。しかし、学力最上位の子どもが行うネットいじめは間接攻撃型である。みんなの前で晒し、それで盛り上がる。キーワードは「笑い」である。さらに分析を進めると、学力最上位の子どもは自分達のグループ内の学力最下位層の子どもをターゲットにする。つまりネットいじめはターゲットが誰か、何がヴァルネラブル

（vulnerable、攻撃誘発）なのかが見えてくる。学力最上位群になるほど、自分達のグループの中で勉強が苦手な子どもが最もいじりやすいという感覚がある。ところが学力中位層でもネットいじめがみられる。最初はなぜ学力中位層でネットいじめの発生率が高くなるのか、見えなかった。例えば、学力中位層の学校では生徒指導の問題行動は発生しにくい。このデータを取った学校群も同様でネットいじめはあるが、生徒指導上の問題行動はほとんど起きていなかった。学力中位層では、ネットいじめはどのように起こっているのかが分からず課題だったため、対象の高等学校をくまなく回った。すると、先生方の話や子どもたちの様子にヒントが転がっていた。部活動を覗くと、勝利を目指して練習する子どもが半分、残り半分は楽しさを優先する子どもだった。この全く異なる価値観が学力中位層の学校では錯綜している。学力中位層の学校には多様な価値観が最も多く存在していた。彼らは小さな島を作り学校生活を過ごし、自分達の島の価値観に合わない対象の子どもは攻撃の的になる。そのため、相手を攻撃しやすい磁場が生まれやすい。多様な価値観が存在すれば、生徒指導上ネックになる事象が起きにくいため、多様さを認めあう以前の問題となる。

文部科学省のデータでは 5 年間で問題行動が倍増している。さらに、先ほどの偏差値とネットいじめの発生率の最新データ（2021）ではピークが中位層から上位層へ少し右側に動いた。公私立問わず、下位層の学校は依然として高い発生率を維持しているが、ピークが移ってきた。そして最上位の学校は落ち着いてきた。最上位層から次の第二階層の学校群がコロナを経て厳しい状況にある。この学校群の元気がないのはコロナのせいだと考えていたが、それだけではない。なぜ第二階層の学校が厳しい状況なのか分析を行うと、面白いことが見えてきた。例えば、今ピークが伸びている第二階層グループの通塾率データを合わせると、第二階層の通塾率は高く、通塾率とネットいじめ発生率のピークがほぼ重なる。第二階層の子どもたちの第一希望は最上位層の高等学校と予想でき、実際に彼らに今の学校は希望順位を聞くと、第一階層の高校に行きたかったと回答する。つまり、彼らは高等学校へ入学した段階で負けたと思っている。この認識を先生方に理解していただきたい。彼らは自己防衛のメカニズムが働くので、今の学校で自己実現しようと考える。ところがコロナで休校になり、学校行事や部活動も制限され、授業も遠隔になった。その状況で学校に楽しさを見つけられず、これなら無理してでも最上位層の学校に行けば良かったと考えるだろう。一般的に、学力上位層ほど、生徒の家庭環境が豊かになる。それなのに不満が蓄積するのは保護者からの過剰な期待があると考えられる。過剰な期待がある家庭の子どもたちが第二階層に多いならば、これらの状況とデータの符合について、生きにくさや人間関係を考慮する必要がある。すると、第二階層には学校が面白くない、友人ができない等というデータが重なる。ここをどう乗り越えるかは、各学校で考えなければならない教育課題であり、第二階層に限らずクラスごとに全く異なることが明らかとなった。なぜクラスごとのデータに違いが出るのか。私立では、学校の特色として、学年の中に学力による階層がみられることが多い。特進クラスではネットいじめなどは起こりにくい。しかし、特進クラスの下のクラスでしんどさを吐露している子どもたちがいる。つまり彼らは同じ学年に自分より学力的に上がいると考えている。ここに高等学校の今後の改革の方向性のヒントがある。私学の特色化は重要で、生き残るための 1 つの大きな政策論だ。ただ高校生の立場からすると、それが生きにくさにつながる恐れがあり、クラスによってはいじめ、ネットいじめの発生率が変化する。この結果をしっかりと解釈しなければならないだろう。

希望の学校に合格し、Twitter で「合格した」とつぶやく。これを不合格だった子どもが見たときにどう思うかの教育が最新のネットいじめの事例研究かもしれない。現在の中高生は人の悪口を書いてはいけないという教育を受けている世代である。彼らのほとんどは友人の悪口を書いたりしない。それをするとどうなるかをよく知っているからである。ただ彼らは、自分の書き込みが別の人から見れば、嫉妬を生み、その感情が、ネット上では攻撃を受けるヴァルネラブルな要素を含んでいることを知らないことが多い。

学力データに子どもたちに必要な教育や生徒指導の方向性を乗せると、面白いことが見えてくる。例えば、全国一斉学力テストである。秋田県や福井県の学力はなぜ高いのかの研究は進められている。その県の授業を分析し、そのデータを不登校データと一緒に乗せてみると、学力が高い地域や府県では不登校率が相対的に高い。学力の高い県の理由について、大阪大学の志水宏吉氏は以下のように解釈している。秋田県の学力の高さはプレゼン力の高

さにある。反対に福井県は聞く側の態度や姿勢を大事にしている。話す人にお臍を向けるという教育、これは身体性の教育だ。秋田県も福井県も学力の背景にあるものは子ども同士の関係性の中から構成されている力である。では不登校率が高い要因だが、話をマスクの着装率の高い学校に戻す。つまり子どもたちの中にはアクティブ・ラーニング型の授業やグループ学習が好きな子どもがいれば、同じ数だけ嫌いな子どもがいるということだ。その嫌いだという子どもの気持ちに今の学習指導要領は寄り添っていないといえる。これを指摘するのが筑波大学の土井隆義氏である。彼は、「つながれ」という社会言説は重要で正しいが、早く友人を作れと煽られている子どもについて分析すると、つながる力の弱い子どもや、友人をすぐに作れないタイプの子どもたちがいることを指摘した。先生方が皆で協力しよう、つながろうと言うのは間違っていない。しかし、そうした「空気」が友人を作ることや、皆で力を合わせるのが苦手な、つながる力が脆弱な子どもを追い込んでいるのも事実である。生徒指導の先生方が大事にするつながる力や絆を否定はしないが、子どもたちには「つながる力をもたないのはダメなことだ」と聞こえている場合もある。最近、文部科学省は個別最適化を掲げた。先生方の生徒指導は一体何をすればいいのだろうか。先生方が絆を強調しないと学校はバラバラになる。ゆえに、生徒指導が大事にしなければならないこと、担任が個別に子ども達を見ていくことといった役割分担が重要になる。養護教諭の先生方にアンケートを取ると、生徒指導の先生方とどう連携すればいいかわからないという回答が多い。保健室の先生方は生徒指導と連携したいが、生徒指導の厳しい学校の先生方はそんな個々のことは聞かなくていいという方も一部おられる。実際にデータを見ると、先生方の指導の結果として、学校や部活が面白いと思っている子どもがいる一方で、最近はコロナでしんどいし、楽しくないと思っている子どももいる。そうした声を拾う方法として、ある自治体でグループを作り、SNSでいじめ相談をする仕組みを作るのはどうかと提案した。ネットいじめのデータがどのくらいあるのか、どんな内容か、どこまで解決できるのかという、いわゆるウェブカウンセリングがどう機能しているのかという研究も行っている。ウェブカウンセリングは効果的である。ここでしか相談チャンネルを持たない人間にとってはSNSを使った相談は有効だ。ただし、弱点もあり、対面と比べてカウンセリングの受け方が異なること、四六時中返信をしないと信用してくれないことである。これもネット社会の子どもたちの心理的側面であろう。これらを併せて考えると、今後の生徒指導のあり方も変わっていかざるを得ないのではないだろうか。

コロナ禍の陰の部分が取り上げられる一方で、大学では遠隔授業で学力が上がったという報告がある。一部の学校ではタブレットを使って反転授業を行い、教育効果を上げている学校もある。このような事例から、タブレットの活用は効果的であること、さらに大学の側も意外にメリットがあるという。オンライン授業だと学生はサボるのではと信用できなかったが、学生に「カメラはオフにしてもいいよ」と言うと、ほとんどの学生はカメラをオフにする。そこで私達は、50や100に区切られた小さなオンラインの画面に向かい授業をする。「皆さん、こんにちは、今は笑うところですよ」などと話す。学生は意外と聞いている。この研究の第一人者が、京都大学の石井英真氏だ。石井氏の研究グループはオンライン授業がなぜ教育的なのかを以下のように指摘した。それは聞いている側が先生と1対1でつながっている感覚を享受できることだ。これを、石井氏は「学びの宛名付け」という用語で学術的にまとめた。つまり、「みんなこっちを向いて」と言うと、「みんな」と言われた瞬間に、自分のことではないと考える子どもが多い。「石井こっち向け、原こっち向け」と言うと宛名付けされる。このことを念頭に置いて小学校の授業を見ると、小学校の先生方は授業中に黒板に問題を書く前、「前から5人あてる、山田君、佐藤君、田中さん」と言ってから問題を書く先生が多くいる。「あてるからね」と言われた子どもはよく考える。だが、あてると言われた5人だけが考え、他の子どもはあたらないからと気を抜いてはいない。仲の良い子どもが困ったら助け船を出してあげようと思い、子どもたちは一生懸命、あたる友人のことを考える。そして、つまると、友人が教えてあげる。ところが、小学校の先生方の中にはこのような子どもたちの助け合い活動は不要だと言う先生もいる。あてられた人が1人で考えなさいと言う生活指導の先生方も多くいる。これからは、子ども達を宛名付けて助け合うことを時代や社会が求めているのかもしれない。そう考えて分析すれば、本日の話にも納得できる部分があるのではないか。2020年の秋ごろにはコロナで学校に行けるようになった子どもたちが、残念ながら再び学校に来なくなった。この分析も継続的にやっていかなければならないと考えている。

生徒指導部会　実践発表Ⅰ

# 「現代における SNS に関する問題事例と対処法について」

（京都府）京都文教中学高等学校　教諭
**下　野　龍　司**

今回、私が研究を行ったテーマは「現代における SNS に関する問題事例と対処法について」である。そのテーマを研究しようと思った動機は、昨今、SNS に関連したネットトラブルを多く目にするようになったことが第一である。日々、学校現場では問題行動が後を絶たない。そこで各学校における問題行動とその対処結果の事例報告のアンケートをとり、今後の指導に少しでも役立てたいことから研究を行った。

まず最初に研究した内容は A 校から E 校に対して問題事例を挙げ、以下のアンケートを行った。1. 過去数年間の学校での SNS やインターネットでのトラブルについて、2. 発覚した経緯、3. 対処方法や指導方法について、4. その後の経過の 4 つである。

その結果、どの学校も Instagram に関連する問題行動が圧倒的に多かった。また、明らかに誹謗中傷するのではなく、「さらし」と言われるような個人の特徴を捉えたり、クラス、またはグループでしかわからないように批判したりしている傾向があった。

生徒の間のやりとりは見えてこないことも多く教員は指導しづらく大変苦労している。保護者の理解も乏しく対応に困る場面もあった。

中には悪質な行為もあり、個人を傷つけるだけでなく、相手が法的な措置をとれば大きな問題にも発展しかねない。どの学校でもこのような事がわかり次第、厳正に対処し、指導していくことが大事であると考える。

次に SNS についてのアンケートを本校生徒 101 名に対して行った。アンケート項目は以下の通りである。1. SNS の利用について、2. 現在利用している SNS について（複数回答可）、3. SNS を利用する主な時間帯について、4. SNS を利用する一日の平均時間について、5. SNS を利用する際に最も多く利用する場所について、6. SNS を利用する主な目的について（複数回答可）、7. SNS を利用する際に自分自身で特に注意していることについて 2 つ答えてください。8. SNS を利用した際に危険を感じたことがあるかについて、9. その時の対処方法について、10. SNS を通じて知らない人から連絡が来たことがあるかについて、11. その時の対処方法について、12. SNS を利用していて感じたこと、体験したことについて当てはまるものを答えてください。（複数回答可）の 12 のアンケート調査を行った。

そのまとめとしては SNS に関してはほとんどの生徒が SNS を利用している。その中でも LINE や You Tube、Instagram は大多数の人が利用していた。

また、Facebook の利用はほとんどがなかった。生徒の間では便利なものやおもしろいものなど、簡単に利用できて個人情報を提示しないようなものが人気のあることがわかった。

また、「SNS を利用していて危険を感じたことがあるか」という質問に関して若干であるが危険を感じている生徒もいた。

「知らない人からメールが来たことがあるか」という質問に対しては半数近くの生徒が「ある」と答えていた。

以上の結果から、今回の研究をもとに SNS を通して情報を発信したり、収集したりすることは便利だが使い方に細心の注意を払って、トラブルを回避しなければならないと感じた。

高校生であっても身近に危険が潜んでいるということを認識して、これからも講習等を通じて指導していくことが大切である。

生徒指導部会　実践発表Ⅱ

# 「中高６年間の成長度に応じた携帯電話、SNSの利用ルールと現状」

（京都府）立命館中学校・高等学校　教諭（中学校生活指導部部長）
**田　中　孝　明**

（京都府）立命館中学校・高等学校　教諭（高等学校生活指導部部長）
**田　中　京　平**

１．立命館中高の生活指導方針

本校は「自由と清新」を建学の精神とする大学の附属校である。中高６年間を通じて生徒が成長できるよう、中高それぞれに段階的な指導方針を有している。

中学では、大人に依存していた自分から自立しようとする過程であり、不安定になりながら自分探しをするこの時期を、大きく包み込み一人ひとり個性あふれる自分らしさの確立を大切にしながら育てていく。自立に向け、まずは他律⇒自律ができるように指導を行っている。

高校では、自らだけでなく、他者それぞれの自分らしさを尊重できる個人・集団作りを主眼に置いている。大学や社会への出口を見据え、コミュニティ形成の一員として学校や社会をより良く変えていくことのできる主体性を育む指導を行っていく。

２．中学校の指導と携帯電話・SNS利用にかかわるルール

中学生においての考え方は「規制ある中で学び、失敗を通して上手く付き合えるようになる」ということである。大きな方針は以下の３点である。

（１）人間性の育成

人を大切にする、相手の気持ちを考える、ルールを守る、他人のために行動する・・・など、社会性を育むこと。根本の教育を大切にしながらスマートフォン・SNSとの向き合い方を考えさせていくことを主に置いている。

（２）周りの大人のスタンス（教員、保護者）の共有

①思春期であることを認識する

存在を愛しながら大きく包み込み、壁になること。規則やマナーと照らし合わせて、してはいけないことは壁となり跳ね返し、頼りたいことがあればしっかりと壁となり支えてあげる。揺れ動く思春期だからこそ、言動については指導しながら、存在は愛することで心を開き良好なコミュニケーションを築くことが出来る。

②子どもの方が上手であるということを認識する

SNS の問題について、こちらがいかに規制したとしてもさらに詳しい知識でその上をいくのが子どもである。したがって、そこで勝負するのではなく土台となる人間性の育成や問題となるような雰囲気にさせない集団作りを大切にする。さらに、犯罪につながるような大きな失敗をさせないために、小さな段階でどれだけ素早く問題をキャッチできるか。そのための日頃からの生徒とのコミュニケーションや保護者との連携をとっておく必要がある。

③大きく構える

失敗はあるということを大前提とし、その失敗からどう学ばせていくか。どんな問題に対しても指導をして成長させていくという大きな構えで指導にあたることを教員間で共有する。このように大きな構えで向き合っていくと、中１・中２は規制ある中でもやはり指導の件数が多いが、中３では落ち着いてくる。これはそれだけ多くの問題を小さな失敗の段階でキャッチし指導が出来ていることの裏返しである。

（３）スマートフォンやSNSについての教育

危険性と利便性を教えることが大切。ルールには意味があることを理解し、なぜ学校でこのようなルールを設けているのかをしっかりと考えさせる。特にSNSについては犯罪に巻き込まれるような大きな失敗をしてしまうと学校では守れなくなってしまう。そのようなことも生徒や保護者に伝え、理解してもらうことが必要である。そのため、保護者にも携帯電話・スマートフォン持ち込みの誓約書やSNSについての考えをまとめたプリント等を配付し、見える形で学校の方針を知っていただき、同じ方向で子どもに話をしていただくようお願いしている。ただし、この部分は課題が多いのが現状であり、さらに工夫をして教育をしていく必要がある。

以上の方針のもと中学で指導することで、高校生でのより自由と責任を与える指導のスタンスへとつなげていっている。

３．高等学校の指導と携帯電話・SNSにかかわるルール

高等学校においては、生徒たちに対して「自分で考える力」「意見を表明する力」「グループで協同する力」を求めている。ルールの意味を常に問い、教員や学校に対して筋道を立てて意見を述べ、学校を良い方向に主体的に変えていく力を育んでもらいたいと考えている。

教員としては「生徒を一人の青年として尊重すること」「一人一人の個性や多様性を尊重すること」「成長途上の未熟さを受け入れること」を念頭に置いて指導に当たっている。

（１）高校での携帯電話の扱い

基本的に持ち込みや利用制限はない。廊下での歩きスマホは注意を入れ、授業中の不正使用があれば預り指導を行う。また、ゲーム利用など目に余る使用状況があれば教員個々の判断で預かることがある。

（２）扱いに関わる考え方

上手に携帯電話やSNSを活用することを認めている。SNSの利用制限も特に設けていない。生徒は自由に活用しており、自分の特技を活かして何万人もフォロワーを持つ生徒等もいる。学校もyoutubeチャンネルやインスタグラムアカウントを保有している。

（３）携帯電話、SNSに関わる大きな指導案件

2019年度から現在までにSNSや携帯電話に関わる大きな指導が数件起きている（詳細は割愛）。

それらの指導を通じて見えてきたこととして、インターネット上の調査能力や権限を持たない学校が介入することの限界性がある。生徒の携帯電話の確認に際しても、プライバシーを閲覧することになるのでこれからは本人や保護者の同意が必要になってくる。学校の力でSNS上のトラブルの事実認定を行うことは極めて難しく、逆に学校が安易な事実認定を行うことが、当事者同士の裁判係争に発展した際の資料として活用される場合もある。そうすると個人間同士の争いの際に学校が（聞き取りを行った教員の言動にまで踏み込んだ）指導責任を問われるような問題も生じやすくなる。学校は（警察のような）調査機関ではない。

一方で学校は教育機関である。トラブルが発生した際に被害者の立場を守り、安心して学校生活を送れるようサポートする責任がある。調査機関としての限界と、教育機関としての責任の両面を自覚し、その都度目の前の生徒たちの安心・安全な学校生活のために出来ることを考えながら対応にあたっていくことが大切である。

生徒指導部会　講演Ⅱ

# 「ブラック校則の見直しを～生徒の自己決定権とどう向き合いますか～」

堂島パーク法律事務所　弁護士
**村　井　勝　則**

校則の問題を教育論としてではなく、法律論ないし予防法務の問題として、裁判所の判断を中心に考察したい。

校則で、手続きを定める学校は多いが、制服、髪型、携帯電話等、日常生活に関しては生徒の自己決定権との対立が生じ、問題になりやすい。自己決定権とは、憲法13条で保障されている重要な権利だ。つまり、校則の問題は憲法問題である。学校には明文化した校則の他に、慣習として存在する決まりがある。入学時に生徒心得等で配布する等、明文化されていれば問題ない。しかし、明文化されず、口頭で「下着の色は白だ、色を見せろ」などとする指導は問題である。文科省も平成22年に通知を出し、令和3年6月8日にも再度、明文化して公表するよう要請している。裁判においては校則自体の違法性が問題とされるのではなく、校則違反の処分の妥当性が問題とされる。「丸刈りにせよ」という校則が争われた裁判があり、裁判所は「丸刈り校則」ですら無効とは言っていない。裁判所ではブラック校則＝無効と判断されたことはない。問題は処分の妥当性だ。校則違反に対し、退学、自主退学勧告という処分の違法性が問われる。ブラック校則と言われるものには「前髪は眉まで」「眉剃り禁止」「地毛証明書の提出」等がある。地毛証明書と聞くとブラックに感じるが問題はない。生まれつき茶色い髪の子どもは地毛証明の提出は重要だ。紫外線で茶色になった場合も証明が必要となる。医師等の専門職の証明を要求すべきであろう。「下着の色指定」をする校則にも合理性はある。しかし、保健室で半分裸にして調べる方法には違法性がある。つまり、校則の違法性の問題と校則違反のチェック・指導・処分の違法性の問題とは分けて考えなければいけない。

裁判は公開のため学校名が出てしまう。裁判にならないように対応すべき理由でもある。ある学校で女子生徒と両親が髪色を黒に染髪させられたのは体罰だと訴えた。公立校のため国家賠償請求となる。「頭髪は生来的に茶色だった。染髪は同意なく、複数の教員に施錠された保健室で実施された。両親の承諾を得ず実施された。皮膚アレルギーを確認していない。染髪剤を適正量以上に使用した」と主張した。明らかに体罰である。判旨では「2学年頃より服装が乱れ始め、眉毛を細くし、化粧し、頭髪を脱色する等、校則に違反し始めた。これに対して教員らは口頭指導を続けた」。しかし「指導に応じず、両親も校則違反を指導・改善することができなかった」。両親の協力は裁判で重視される。この生徒は、「染髪実施を認識し、自ら保健室を訪れた。特に抵抗なく、本件染髪行為を受け入れた」と認定された。つまり「本件染髪行為は、教員の生徒に対する有形力の行使」つまり暴行ではあるけれども、「趣旨・目的・方法・対応・継続時間などに照らし、教員が生徒に対して行うことが許される教育的指導の範囲を逸脱したものとはいえない」「違法性を認めることはできない」とし、生徒側の請求棄却。最高裁でも棄却された。この時の裁判官に「原告の言うことと判決が全く違うのはなぜか」と聞いてみた。すると「事実認定だ」と言われた。裁判所の事実認定とは「Xがこう言っている。教員はこう言っている。ではどちら。」ではない。証拠に基づいて裁判をする証拠裁判主義だ。では、どんな証拠か。録音・録画などだろう。Xの証言では「無理やり連れ込まれて、無理やり染められた」であろうが、実は指導により説得され納得して染めたと認定された。この事実認定が大事だ。

次はブラック校則と言われるきっかけとなった裁判であり、文科省も通知を出すきっかけとなった。生まれつき茶色い髪の子が黒く染めるよう教諭らに強要されたもので、女子生徒が大阪府に慰謝料を請求し、大阪地裁は

訴えの一部を認めて、府に支払いを命じた。マスコミはブラック校則と報道したが、実際はそうではない。「髪の染色などを禁じる校則は学校の裁量権の範囲内」としたが、学校側の対応として、不登校になった子どもを出席名簿から削除した」という処分が違法とされた。ブラック校則の問題ではない。しかし、マスコミが騒ぎ、ブラック校則の話が膨んだ。結果的にこの学校は定員割れをした。原因は、指導困難校で厳しい校則だったが、事件後に校則を緩め、近隣の評判も下がったことらしい。ブラック校則でなくても影響が出ることがあることは肝に銘じるべきである。指導困難な生徒を念頭に校則によってある程度の指導や決まりを植え付ける必要性はあると思う。

次は、自動車運転免許取得の制限とパーマ禁止の校則に違反し、自主退学勧告を受けて退学し、その後に訴えた事例だ。学園と校長に対して損害賠償を求めたが、校長は決定機関に過ぎず、校長への訴えは却下された。その高校の校則は「一定の時期以降で、かつ学校に届け出た場合にのみ運転免許の取得を認める」とあり、これは「生徒の生命身体を守り、非行化を防止、もって勉学に専念する時間を確保するため」であり、非常に合理性がある。また、パーマの禁止は「高校生にふさわしい髪型を維持し、非行を防止するためであるから、本件校則は社会通念上不合理なものとはいえない」としている。社会通念とは常識的に見てという意味で、常識的に不合理ではない、つまり、ブラック校則ではない。「同校は本件校則で、学校に無断で運転免許を取得した者に対して退学勧告することを定める」と明文化して公表され「入学に際して、生徒もその父親も本件校則を承知していた」とある。ここが大事だ。親も分かっていた。しかし「生徒は学校に無断で普通自動車の運転免許を取得、学校に発覚した際も顕著な反省を示さなかった」。それでも学校は「今回に限り厳重注意に付する」とした。さらに、校長が生徒と父親に「今後、違反があったら学校に置いておけない。二度と違反しないように」と注意し誓わせた。丁寧な指導である。しかし、「本件校則に違反してパーマをかけ、そのことが発覚した際には隠蔽しようとし、さらに教諭らに侮蔑的な言辞を弄した」。この生徒の行動、態度は反省がないと見られても仕方がない。それまでも問題行動を起こしており、結果的に自主退学勧告となった。これは、当然の結果であり、この高校の、対応は非常によい。一旦は厳重注意に留め、二度と違反しないと誓わせたが、再度の違反により自主退学勧告。この時点で素直に謝って違反をやめれば、退学にはならなかったが、それもせずに退学届を提出し、その後、損害賠償を請求するのは無茶である。この判決には最高裁調査官解説が付いている。調査官の仕事は最高裁の裁判官のサポートだ。この解説が参考になる。まず「独自性を持つ私立学校の教育と、それに応じて希望して入学した生徒という関係」が前提にある。そして「私学の教育方針を具体化する 1 つとして校則を位置付けており、私立高校の校則の内容の当否をその実質にまで立ち入って判断することについては抑制的」と言っている。

次は校則ではないが参考になる例を挙げる。エホバの証人（キリスト教の一派）は決闘を禁じ、武道ができない。高等専門学校に入学した生徒が信仰上の理由から剣道実技の履修を拒否し、必修である体育科目の修得認定を受けられず、留年し、最後は退学処分とされたため、信教の自由と学習権を侵害されたと訴えた。信教の自由、学習権は憲法論だが、公立だから憲法違反が問題となる。憲法 26 条では教育を受ける権利を保障するが、生徒の「学習したい」という積極的な権利が含まれている。この学習権に反すると言うわけだ。「原級留置また退学処分は校長の合理的な教育的裁量に任せるべき処分である。それが全く事実の基礎を欠くか社会観念上著しく妥当を欠く場合に限り違法」となる。つまり、全くの嘘か常識的に見てひどい場合に限ってしか違法にはならない。その一方で「退学処分は学生に改善の見込みがなく、これを学外に排除するやむを得ない措置であり、裁量の範囲は狭く判断するべき」とあり、退学処分は違法になりやすく、慎重にということだ。本件では「剣道実技の履修は、高等専門学校において必修とは言い難く、他の体育種目の履行等、代替的方法によっても可能」と言っている。原告はレポート提出を申し出たが、学校は拒否した。原告が剣道実技の参加を拒否する理由は内心の信仰の核心部分と密接に関連し、決闘はできないという真摯なものだった。実際、原告は他の体育種目の成績は優秀であった。しかし、学校は原告側の代替的措置の要求を一切拒否し、剣道実技の補講の説得に固執した。これは「代替措置について検討したとは言えず、本件処分は社会観念上著しく妥当を欠く」と言われ、最高裁は違法と判断した。この事例は学校関係の判例の中で有名なリーディングケースである。

次は、校則に違反し、無届けでバイク免許を取得し発覚、教諭に免許を提出したが、その後、免許不携帯で 3、4 回バイクに乗車し退学処分となり、損害賠償を請求したものだ。判旨は「本件、校則は生徒の生命身体を守り、勉学に専念させるのを目的とする上、真に免許を必要とする生徒には免許取得の道を開いている」。このように例外を設けることは大事だ。「生徒に対する懲戒処分は事実上の根拠に基づかないか、社会観念上著しく妥当を欠く場合を除き、校長に合理的裁量がある。退学処分については、特に慎重な対応を要する」と判断基準は最高裁と同じだ。「本件退学処分は運転免許証取得と原告所有バイクへの乗車、担任教諭に免許証提出後の 3、4 回のバイク乗車」によるという学校側の判断に対し、「免許取得と原告所有バイクへの乗車は、免許証の提出で不問に付されており、その後の乗車がなければ懲戒処分はなされなかった蓋然性がある」。「修理を依頼されて友人所有のバイクを預かった際の 2 回乗車のみで、これ以外に乗車の事実を認めることができない」とされ、学校の判断に事実誤認がある。学校に免許証を提出した後、原告所有のバイクに乗ることはただの無免許運転だ。しかし、友人所有のバイクの修理を依頼され、預かって修理に行き、行き帰りで 2 回乗ったのは別問題だ。裁判所は、何のために乗ったかも考慮する。また、他の懲戒処分でも十分であり、いきなり退学はおかしいと言っている。この高校は「本件退学処分は社会観念上著しく妥当を欠き、校長の裁量権の範囲を逸脱した違法な処分となる」と判断された。たった一度のいいかげんな事実認定により、入学者が減るなどの強い影響を受ける。この判例のポイントは事実認定にある。原告所有のバイクの単なる無免許運転か友人所有のバイクを修理のために乗車したのかという点まで精査すれば退学処分は重すぎる。何回乗ったという回数の問題ではない。

最後の事例は性逸脱行為があったという件だ。ある高校で女子生徒が寮内にコンドームを持ち込み、他の生徒に配ったことで退学処分になった。判旨によると「集団飲酒で学校の秩序が乱れたことはあっても、飲酒の場に 4 日参加して 3 日飲酒するにとどまり、教育指導を続けることが困難であるほどの常習性がうかがえない」。これはどうだろう。4 日のうち 3 日飲酒とは指導を受けて直ちにやめたということではないのか。性逸脱行為は「男子生徒の無断外泊に端を発して発覚し」ており、女子生徒の部屋にいたのだろう。「他の生徒の間で公然の事実になっていたとか、他の生徒の性逸脱行為を誘発した事実もない」。さらに原告が性行為をしたという日と A が性行為をした日が一致しない。原告と A が性行為をした事実が確定できておらず、他に相当な調査がされた形跡もない。ここが事実誤認である。女の子の部屋に泊まったから性行為をしたと勝手に決めつけたのだ。その認定は駄目だ。もっとも「原告が A と一夜を過ごし、コンドームを持ち込んだ行為は、性逸脱行為と評価できる」として、これは寮内規定違反に当たる。そこで「本件高校から排除する必要が生じたとまでは言えず、より軽い懲戒処分や退寮処分でもよかったのではないか」という判決だった。

次に、自己決定権の重要性を見る。自己決定権は、日本国憲法で認められている権利だ。自己決定権とは一定の私的事柄について公権力から干渉されず、自ら決定できる権利だ。例えば、子どもを持つかどうか、家族のあり方を決める自由、身じまい、ライフスタイルを決める自由。医療拒否、尊厳死等、生命の処分を決める自由、このあたりが中核的な自己決定権である。さらに散歩をする自由、喫煙する自由等の一般的な自由まで認める学説もあるが少数にとどまる。つまり、ライフスタイル、身じまいなどの中核的な権利が憲法 13 条で保障されている。憲法 13 条にはすべて国民は個人として尊重される（個人の尊厳）と規定されている。同条後段では「生命、自由および幸福追求権」とも規定され、ジョン・ロックの「人は生まれながらにして自由平等である」という考え方からきている。この考えがフランス革命を起こし、フランス独立宣言ができた。その影響を受けてアメリカ独立宣言が、さらにその影響を受けて日本国憲法が制定された。この 13 条から導かれるのは、人は違っていて当たり前。徹底した個人主義が憲法の考え方である。

高校生に授業した際、「君にとって幸せって何」と聞くと、「金持ち」とか「社長」と返ってくる。「何の社長」と聞くと「分からないけど社長」と言う。要するに金持ちにつながるものが彼らの思い描く幸福感だ。「幸福追求権」とは金持ちになる権利の保障ではない。幸福は人それぞれであるが、幸福を追及する権利ではなく、幸福を追求する権利、つまり幸福を求める過程を守る権利である。価値観を押し付けないのが憲法の特徴だ。例えば、高校生に「君は正義の味方か？」と聞くとはっきり答えられず、「では、悪か」と聞くと「悪って言われても」と

どちらか分からない。「正義などない」というのが１３条が基礎とする考え方だ。正義と思った瞬間に間違いを犯す。昔の絶対王政下では、価値絶対主義の考え方が支配的で、正義は必ず存在し、それに従って行動した。今は、正義はないという価値相対主義が主流で、各人の価値観に委ねられる。もちろん正義に近づくことは大事だが、正義はないというのが市民革命以降の基本的な考え方である。多数意見が必ずしも正義ではない。少数意見の中にも正義が隠れていることはあり、それが少数意見を尊重することにつながる。これを聞きすっきりしたという高校生がいた。その生徒は「君の考え方はおかしい」と言われたのだろう。しかし、自分は間違っているとは思っていない。それは尊重されるべきだ。この価値相対主義の考え方が 13 条の基本にある。しかし、人は価値絶対主義に傾きがちになるので、注意が必要だ。SNS による誹謗中傷問題がこれにあたる。誹謗中傷する側は善だと信じているだろうが、それは本当に善なのか。松本サリン事件も参考になる。家に農薬があっただけで「あなたがやったんだろう」と言われ続けた善良な人がメディアスクラムの被害者である。メディアのやることがすべて善と言うなら、それは失敗のもとだ。

また、真実に近づくことは大事だが、真実発見の方法を間違えてはいけない。教師は悪いことをした生徒に対し「何をやっている。君が悪いじゃないか」と一方的に責めることがある。これを糾問主義という。昔の裁判では予審判事があらかじめ大体のことを決めて裁判に挙げ、検察官と裁判官が一方的に判断をするという二面構造だった。訴追者と判断者が一致しており、被告人は積極的に無罪を証明しなくては勝てない。被告人 1 人で無罪の証明は難しいため、私立探偵を雇う。シャーロックスホームズがそうだ。ところが今は違う。訴追者と判断者が分断され、訴追者が当事者になった。検察官が訴追し、弁護人が反論し、裁判官がそれぞれの言い分を聞いて判断する三面構造になった。弾劾主義という。訴追者が有罪を立証し、被告人は有罪立証を崩せばよい。被告人は無罪が推定され、有罪だと主張する検察官が有罪立証しなければならない。悪いことをした生徒を糾問することは真実発見を見誤ることになる。認定を誤らないためには弾劾主義的な判断をしてほしい。弾劾主義の方が正義に近づくと考えられている。

弁護士は「なぜ、悪いやつの弁護をするのか」と聞かれる。理由は「えん罪を防ぐ」ためだ。本当の真実が有罪で、裁判の結果も有罪なら何の問題もない。また、真実は有罪だが、頑張って無罪を取るのは、適正な裁判とはいえなくとも、問題はない。弁護士が頑張り、検察官が立証ミスをしただけだ。問題は真実は無罪なのに、有罪になってしまうことだ。冤罪の確立は 0.01%かもしれないが、絶対に防がなければいけない。「個人の尊厳」を守るためである。憲法は、基本的人権の保障、平和主義、国民主権の 3 つがポイントと習う。そんなことより最も大切なのは 13 条の「個人の尊厳」だ。表現の自由、信教の自由よりも上に、個人の尊厳がある。平和に暮らせるのは個人の尊厳を守るためだ。国家権力を濫用されように権力を３つに分けるのも、個人の尊厳を守るためだ。

教育現場における「個人の尊厳」について見る。旭川学テ事件がある。全国一斉学力テストに反対した教員が校長室に乱入し、公務執行妨害罪で起訴された。被告人側は学力テストが違法で、違法な公務に対して公務執行妨害罪は成立しないと主張。そこで最高裁は国が決めた全国一斉学力テストが適法かどうか、教育権の所在はどこかということに答えた。名文なので紹介する。「憲法 26 条 1 項、すべて国民はひとしく教育を受ける権利を有する。この規定の背後には国民各自が一個の個人として成長発達、自己の人格を完成、実現するために必要な学習をする固有の権利、特に子どもはその学習要求を充足するための教育を自己に施すことを大人一般に対して要求する権利を有する」。「子どもの教育は教育を施す者の支配的権能ではなく、まず子どもの学習をする権利があって、それに対応して、その充足をはかりうる立場にある者の責務である。」子どもの学習権が中心ということだ。「普通教育の場では、子どもの教育は教師と子どもとの間の直接の人格的接触を通じ、その個性に応じて行わなければならないという本質的要請に照らし、ある程度自由な裁量が認められなければならないという意味において一定の範囲における教授の自由が保障されるべきである」。教師には教授の自由があると言っている。また、親には、学校外における教育や学校選択の自由もある。「それ以外の領域において国は国政の一部として広く適切な教育施策を樹立、実施すべく、子ども自身の利益の擁護のため、必要かつ相当と認められる範囲において教育内容を決定する権能を有する」。要するに親、国、教師、それぞれに教育内容の決定権があると言っている。国が決

めた学力テストは違法ではないことになる。「もとより教育内容に対する国家的介入についてはできるだけ抑制的であることが要請される。殊にわが憲法の下においては子どもが自由かつ独立の人格として成長することを妨げるような国家的介入は、憲法 26 条、13 条の規定上からも許されない」とあり、子どもの学習権は、13 条の「個人の尊厳」から導かれることを明言した。

最後に、まず、校則違反の生徒を処分する際の留意点。いかなる校則を定めるかは校長の広い裁量であり、校則を無効だと判断した裁判例はない。煙草を吸っただけで退学処分という校則もあり、問題があると指摘された裁判例はあるが、無効とは言っていない。しかし、ブラック校則の制定は学園の良識が問われ、志願者減少につながることになるので避けたい。また、処分の違法性が争われることに留意し、校則違反の対応や事実認定は慎重かつ丁寧にしてほしい。予断を持って一方の主張だけを聞かず、糾問主義は避ける。退学処分に該当する校則違反の事実を確認した時は、まず、停学や自主退学勧告等、より緩やかな処分から検討してほしい。また、処分に迷えば、生徒の学習権を最優先する。当該生徒は本学での学習を真摯に欲しているか等、教育的な配慮を十分尽くすことが大切だ。家族の協力が得られるか等の見極めも重要である。生徒の宗教的な信念から出た行動には格別な配慮が必要で、代替措置も検討する。また、地道な指導の繰り返しや言動を記録に残すことも大切である。例えば校則違反記録簿を作り、違反の事実と指導の内容を記す。秘密録音や録画を躊躇する向きもあるが、証拠として提出しても問題はない。校則を定める際の留意点として、未成熟な生徒を校則により規律するという必要性はあるものの、校則は生徒の自己決定権、学習権を守るためにあるという視点を持っていれば、一定の結論が出る。曖昧な文言は避け、除外事由を設けることも大事だ。また、判定やチェック、指導の仕方には注意が必要だ。この指導の部分はブラック校則の問題ではない。また、学校教育法施行規則 26 条 3 項を確認し、校則違反イコール退学という処分は避け、退学処分の条件は「性行不良で改善の見込みがない、学力劣等で成業の見込みがない」「正当な理由がなく出席常でない。学校の秩序を乱し、その他生徒としての本分に反し」と幅を持たせてほしい。令和 3 年 6 月 8 日の文科省の通知を見ると、「判例では学校が教育目的を達成するのに必要かつ合理的範囲内において校則を制定し、児童生徒の行動などに一定の制限を課することができ、校則を制定する権限は学校運営の責任者である校長にある」。また「社会通念上合理的と認められる範囲で校長は校則などにより児童生徒を規律する包括的な権能を持つと解されている」とある。校長に広い裁量があることは前提とされている。ただし「しつけ、道徳、健康などに関する事項は校則ではなく、学校の教育目標として位置付けるか、生徒の主体的な取り組みに任せる」。また「学校や地域の実態に応じて適切に定められる」と指摘するなど学校種により定め方が違うとの指摘は傾聴に値する。文科省は校則について必要最低限の方向性を示しており、近喫の課題ではないが、校則を見直して少なめにすることも 1 つの方向と言える。校則を無くすというのも選択肢としてはありうる。いずれにしても、各学校がそれぞれの特色に応じてどのように校則を定めていくか、苦心していく必要があろう。

生徒指導部会　実践発表Ⅲ

# 「校則の無い学校での生徒（生活）指導」

（京都府）同志社国際中学高等学校　教諭（生徒指導部部長）
二　股　一　郎

校則とは？　生徒（生活）指導とは？

本校、同志社国際中学校・高等学校には校則はありません。あるとすれば 2 足制ですので、指定の上履きを履くことだけ。もちろん、始業時間その他の時間的な約束事はあるが、持ち物、服装、髪型、化粧・装飾品、一切の校則なし。2 年前から、中学生に対して「スマートフォンは登校後、個人ロッカーに片付け、昼休みに着信等の確認は認めるが、終礼後個人ロッカーから取り出して持ち帰る」というルールはできたが、その程度のルール。

まずは、そのような学校の実態をまずは動画で見ていただきたいと思います。(動画視聴)

なぜ、このような学校なのか、少し背景を説明します。

学校背景

学校法人同志社内の中学校・高等学校

2 つの　大学・大学院　女子大学・大学院

4 つの中学・高等学校　その中の一番新しい　1980 年高校開校　87 年中学校開校

2 つの小学校　　1 つの幼稚園

創立者　新島襄は、江戸末期国禁をおかし渡米しキリスト教との出会い、帰国後　国（公）による教育ではなく、キリスト教に基づく私立学校設立　同志社英学校（1875 年）

以来、「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」を 3 本柱として心の教育を大切に、所謂　「良心」教育。

「良心の全身に充満したる丈夫（ますらお）の起り来（きた）らん事を」　（良心が全身に充満した青年が現れることを）望んでやまない

新島の教育の理想を表す言葉

「少々角ありも可、良心溢るる若者」

→少しぐらい変わっていて枠に収まらなくても、暖かい心と良心が溢れた若者

「倜儻不羈」は、新島襄が教育の理念とした言葉

「確固たる信念を持って自分の責任のもとに独立し、常識や権力に拘束されることのない、既成の尺度では律しがたい自由な精神」のこと

本校の歴史、特徴

1980 年 4 月　西日本初の帰国子女受け入れ専門校として開校（前年に ICU 開校）

1987 年 4 月　中学校開校

開校以来　生徒比　帰国生徒：日本国内生徒の割合　２：１　同じクラスで学び、今では、帰国生徒人数が日本で一番多い学校　約 800 名　　授業は全て習熟度別で展開

（英語 6 習熟度、他教科 2 習熟度（日本語力、数学力によって）

選択授業の多様性　第 2 外国語　ドイツ語、フランス語、スペイン語　中国語、朝鮮・韓国語

心理学、環境学、哲学等、地域研究、国際政治学、聖書研究

本校の理念　新島の教育の理想に基づき

「違いという共通点からの出発」→　基本的には校則無し

生徒一人一人が自ら考え行動し、持てる力を全て発揮できるように

具体例

○携帯、スマートフォンの持ち込み、使用は OK。正しく使用すること（授業中の使用、SNS 等での人権侵害があれば指導）

○二輪、車の免許　車両　取得 OK。保護者の監督下で安全に法規を遵守し乗ること　取得届け出は必要、通学には使用しない

○服装、鞄、髪型、化粧、装飾品等　一切の規定なし（TPO を考えたものであること）

○アルバイト　学期期間中は禁止（学校活動、勉強に集中）　長期休暇中は届け出をして可

校則　誰のための決まり　何のための決まり　時代に則しているか　絶えず考えるべき

1 つの社会である学校において、生徒の自由、人権を守るため、与えられるものでなく、自分達で作り上げるもの、見直しの機会があることが大切（生徒と教員の対話が重要）

例えば、

①本校中学校における携帯・スマートフォンの持ち込み、使用に関して 2 年前から、朝個人ロッカーに片付け、昼休みに着信等確認可、終礼後ロッカーから取り出して持ち帰る。それ以前は、高校と同じく一切の規制なし。使用状況に問題が続き、生徒達にこのままでは規制せざるを得ないから、今一度正しく使うことは意識して欲しいと伝達、1 年間様子みる。守れないケースが何件か発生し、2 年前から一部規制。生徒達も納得、また生徒達の中から以前の状態に戻して欲しいとの要望が出てくれば、今の状態になった経緯を伝え、教員生徒で議論し対応する。

②個人ロッカー

蓋の部分だけ個人所有（3 年、6 年使用）シールを貼ったり、何か書き込んだり OK。ただ、廊下に設置しているため、他人が見て不愉快になるような書き込み等があれば、担任・生徒指導が話す。その際、すぐに消しなさいではなく、この状態は個人の持ち物であっても、不愉快になる人がいる可能性があるから、少し考えてもらえないかと話す。しばらくすると、生徒から落書きを消せないから、中古で良いから替えの蓋をください等の反応や、落書きが消えているケースが多い。

生徒指導　校則の有無に関係無く必要　　決して放任ではなく、生徒の自主性を大切にした、タイミングも内容も適切な指導が必要。校則がないからこそ適切な指導が重要（時間はかかる）。

毎日の礼拝での全教員からの奨励、講演会等　できるだけ多くの機会を利用して、伝えるべきことを生徒達に伝えるように心がけている。

本校における生徒指導におけるキーワード、「自由と人権」「自由と自律」「自由と自主」

1. 人権を考慮しない自由は無い
2. 人権を考えた言動だけでなく、自らを律する力も重要
3. その上で自主的な活動　ができること

懲戒は存在するが、意識としては罰ではなく、力をつけるための指導であること。さらにカウンセリグとの連携、保護者の協力が重要。

生徒指導部会　実践発表Ⅳ

# 「生徒の主体性やシティズンシップを育む生徒指導（支援）～校則・情報モラル～」

（京都府）ノートルダム女学院中学高等学校　教諭
**霜　田　慶　介**

本校では今年度、経済産業省「未来の教室」実証事業である「ルールメイキングプロジェクト」に参加している。認定 NPO 法人カタリバ（以後カタリバ）が主催するプロジェクトで、全国 11 の中学校や高等学校が参加している。カタリバからのコーディネーターの助けを受けながら、Google classroom や zoom などの ICT を使用して活動している。生徒たちが主体的に校則についてさまざまなステークホルダーと対話するなかで、「校則やルールとは何か」を考え、ノートルダム女学院にふさわしいルールをつくっていくことをめざしている。

このプロジェクトに参加するきっかけとなったのは、日本財団が出した「18 歳意識調査～国や社会に対する意識」にある。諸外国に比べ、日本の中高生は、「社会やルールについて関心をもち、考え、意見を交わすことがある」、「自分で国や社会を変えられる」という項目で低い結果が出ていた。これは、学校や校則は「従うもの」であり、自分達で「作り上げていくもの」ではない、という諦めや無関心からきているのではないかと感じた。加えて、校則を守らせることが、生徒と教員の関係を難しくしている要因の一つであるとも感じている。このことは昨今の教員の「働き方改革」にとても重要なことだと思われる。合理性のない校則を守らせようとすること自体が教員の大きな負担になっているのではないか、この問題を解決することによって、教員の働き方がより良いものになっていくのではないか、そう感じたのだ。また、以前受けもっていた高校 3 年生が大学の志望理由書を私のところにもってきて「先生、何を書けばいいですか」と尋ねてきたことがある。「より良い学校教育」とは、きめ細やか面倒見の良い生徒対応という風潮が本校にはある。しかし、何でも教員が面倒をみてしまうことが生徒の主体性や成長を疎外しているのではないかとその時深く反省した。今の時代は VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の世の中であるといわれている。ましてや昨今のコロナ禍を受けて、「答えがない」「今までの常識が通用しない」状況が見られるようになってきている。今必要なのは、さまざまな社会課題を「ジブンゴト」として考え、対話的に解決しようとする能力なのではないだろうか。ルールメイキングプロジェクトに取り組むことによって、このような能力を育むことができる、と感じたのが参加しようとしたきっかけである。

このプロジェクトを進めるにあたり、めざした教育的ビジョンがある。①校則を変えることが最終目標ではなく、プロセスを大切にすること。②プロジェクトを通じて、自己や他者の苦しみや願いを共感（コンパッション）できるようになること。③対話的な問題解決の方法を学び、ジレンマを乗り越える経験をしてみること。④みんなが幸せになる校則について考えることで、社会に対し主体的にエンゲージメントできるシティズンシップマインドを育むこと。これらを実現するにあたり、実際のワークショップでは、具体的方法

をして、①校則を変えるにあたり「大切にしたいこと、相手」を考えること。②対話を通じて、自らの意見を自由に表明できる「心理的安全性」が保たれた環境づくりに時間をかけること。③具体的にどの校則を変えるのか、それを人々にどのように伝え、合意形成までもっていくのかを考えること。④生徒対学校の対立構造にならないよう、学校に関わるステークホルダーとの対話の機会をもつこと。以上のようなことを丹念に活動してきた。

この取り組みの結果、生徒達の間で多くの変容が見られた。学校に関わるさまざまな人達や社会を意識したり、想像したりするようになったこと、「高速の変更を学校に要求する」という態度を変えようと取り組んだこと。「自分にとって変えたい校則」から「みんなにとって幸せな校則」をいう視点をもてるようになったこと。以上のことがあげられる。

一方でプロジェクトを進めるにあたり、教師側の意識（不安）として、「校則は学校（教師）がつくり指導するもの」であり、生徒に校則をつくらせたら学校が混乱してしまうのではないかという不安や、生徒達に校則をつくるだけの知識や経験があるのか、子どもは責任を取ることができないのではないかという思いがあらわになった。また、生徒側には、自分達の活動を伝えたり、合意形成することへの難しさや、「学校の伝統」が障壁となってしまい、一部の生徒や教員、保護者の間で、目的と手段が逆転した意識（校則を守ることが目的、という意識）が根強く、自分達の活動をなかなか理解してもらえないもどかしさを感じたり、多様な生徒に対応できる現代に合った校則をつくることがとても大変であるという課題が発生した。

私は、これらの課題を克服するために、学校や教師の意識改革が必要であると考えている。SEL（社会性と情動の学習）といった教育プログラムや、NVC（共感的コミュニケーション）・システム思考といった組織改革に関する研修を受けることが、今後必要になってくると感じている。

生徒指導部会

## 「総　括」

福知山成美高等学校　理事長・校長
**兒　島　裕　之**

参加頂いた先生方におかれましては、京都での全国私学教育研究集会はいかがだったでしょうか。また、コロナ禍において外出等が難しい方もいらっしゃったと思いますが、多くの先生方にご参加頂き、厚くお礼申し上げます。

当部会は午前中に佛教大学副学長／教育学部教授の原先生の講演「ネット社会と中学・高校生の実態～大規模調査からみえる中学・高校生の人間関係に注目して～」、そして、京都文教中学高等学校生徒指導部の下野龍司先生の実践発表「現代における SNS に関する問題事例と対処法について」と立命館中学高等学校の中学校生活指導部部長の田中孝明先生と高等学校生徒指導部部長の田中京平先生の 2 名の先生の実践発表「中高 6 年間の成長度に応じた携帯電話、SNS の利用ルールと現状」、午後からは堂島パーク法律事務所弁護士の村井勝則先生の講演「ブラック校則の見直しを～生徒の自己決定権とどう向き合いますか～」、同志社国際中学高等学校生徒指導部部長の二股一郎先生の実践発表「校則の無い学校での生徒（生活）指導」とノートルダム女学院中学高等学校生徒指導部部長の霜田慶介先生の実践発表「生徒の主体性やシティズンシップを育む生徒指導（支援）～校則・情報モラル～」を行いました。生徒指導に関わる先生方にとりましては、個人なのか、全体なのか、学校の立場に立つのか、生徒の立場に立つのか、そのようなところで、非常に日々ご苦労頂いていることではないかと思っています。そのような学校の問題点が降りかかってくる大変な役割ではないかと思います。そのような中で同志社国際中学高等学校の二股先生には先進的な発表を頂きました。本部会ではいろいろな角度から実践発表を頂いて感謝しています。

いずれにしても、各々の私学が建学の精神をしっかり守り、そして私学の献身性をしっかり示していく。そのためには、これは確実だというものはございませんが、限りなく確からしさを求めて、日々、努力していくしかないのではと考えおります。

誠に簡単ではありますが、先生方のますますのご健勝と各学園の発展を祈念して総括とさせて頂きます。

# 特色教育部会

人工知能（AI）が人間の知能を超える「シンギュラリティ（技術的特異点）」が 2045 年に訪れると予測されている。人口減少が進行する社会にあって、AI が判断し、ロボットの手で仕事がなされる時代を迎える中、働き方や生き方が変わり、意識や価値観が変動する未来を担うべき若者たちは、何を学び、どのような力を身に付ければよいのか？

人格形成にとって極めて重要な青年期に、自己肯定感を培い、変化に対応できる力を身につけ、豊かな心を持った若者を育むために、今改めて、原点に立ち返り考察を深める。

各私立学校では、創立者の熱い思いが教育現場に反映され、時代とともに変革を遂げながら、脈々と受け継がれている。当部会プログラムを通じて、各校の特長や多様な取り組みを分かち合い、AI の時代に大切にすべきことに目を向けることで、混迷の時代をたくましく乗り越え、より豊かな社会の創造に寄与する若者を育てる一助としたい。

1　研究目標　　AI の時代を生き抜く知恵と力の育成～建学の精神を根底に、未来に挑戦～
2　会　　場　　リーガロイヤルホテル京都　2 階「朱雀」
3　参加対象　　理事長、校長、副校長・教頭、教員
4　参加人員　　４２名
5　日　　程

| 時間 / 月日 | 9 | 30 45 | 10 | 11 15 | 12 15 | 13 15 | 14 15 | 15 45 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 月 22 日（金） | | 開会式 | 講演 I | 実践発表 | 昼食 | 研究協議 | 講演 II | 閉会式 | |

6　内容・日程細目

| | | |
|---|---|---|
| 9:00 | 受　　付<br>（林　　晃・松本　貴裕） | 機材担当：中谷　俊雄・柿原　功二<br>記録(写真)担当：松村　晃治<br>記録・集録担当：村田　俊喜 |
| 9:30 | 開　会　式<br>１．開式の辞<br>２．運営委員長挨拶<br>３．運営委員紹介<br>４．日程説明<br>５．閉式の辞 | 司会：杉島　和史／記録：村田　俊喜<br>特色教育部会運営委員長　阿　南　孝　也 |
| 9:45 | 講　演　I<br>演　題　　「今こそ建学の精神に立ち戻って～一燈園の目指すもの～」<br>講　師　相　　大二郎　　学校法人燈影学園 名誉学園長／一燈園中学高等学校 前校長 | 司会：杉島　和史／記録：村田　俊喜<br>講師紹介：村田　俊喜 |
| 11:15 | 実践発表<br>テーマ　「『東山流 土台力修得方略』～『新たな一歩、変わらぬ一歩』による展開～」<br>発表者　澤　田　寛　成　　（京都府）東山中学高等学校土台力教育開発センター 副所長 | 司会：杉島　和史／記録：村田　俊喜 |
| 12:15 | | |

| | |
|---|---|
| 12:15 | |
| | 昼　　食 |
| 13:15 | 研究協議（全体会）　　司会：松本　善人・杉島　和史／記録：村田　俊喜<br>テーマ　「各学校の特色ある教育の取り組み」<br>・具体的実践例の紹介・共有　等 |
| 14:15 | 講　演　Ⅱ　　司会：杉島　和史／記録：村田　俊喜<br>講師紹介：阿南　孝也<br>演　題　「AI 時代において求められる教育<br>～人工知能・ロボティクス・コミュニケーション場～」<br>講　師　谷　口　忠　大　　立命館大学情報理工学部情報理工学科　教授 |
| 15:45 | 閉　会　式　　司会：杉島　和史／記録：村田　俊喜<br>１．開式の辞<br>２．総　括　　特色教育部会運営委員長　阿　南　孝　也<br>３．閉会の辞 |
| 16:00 | 解　　散 |

7　講師・発表者（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 相　　大二郎 | 学校法人燈影学園 | 名誉学園長／一燈園中学高等学校　前校長 |
| 谷　口　忠　大 | 立命館大学情報理工学部情報理工学科 | 教授 |
| 澤　田　寛　成 | 東山中学高等学校土台力教育開発センター | 副所長 |

8　運営委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 阿　南　孝　也 | 洛　星　中　学　高　等　学　校 | 理事・校長 |
| 副委員長 | 村　田　俊　喜 | 一　燈　園　中　学　高　等　学　校 | 校長 |
| 委　員 | 松　本　善　人 | 東　山　中　学　高　等　学　校 | 副校長 |
| | 杉　島　和　史 | 京　都　橘　中　学　高　等　学　校 | 副校長 |
| | 中　谷　俊　雄 | 京　都　明　徳　高　等　学　校 | 主幹教諭 |
| | 柿　原　功　二 | 京都共栄学園中学高等学校 | 教諭 |
| | 林　　晃 | 龍谷大学付属平安中学高等学校 | 教諭 |
| | 松　本　貴　裕 | 洛　星　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 松　村　晃　治 | 洛　星　中　学　高　等　学　校 | 事務 |

特色教育部会　講演Ⅰ

# 「今こそ建学の精神に立ち戻って～一燈園の目指すもの～」

学校法人燈影学園　名誉学園長／一燈園中学高等学校　前校長
**相　　大二郎**

前半と後半に分けて話したい。前半は本校の創立者である西田天香の生涯について、後半は文科省が「教育課程特例校」と指定する特色教育について話したい。

西田天香は明治5年に滋賀県長浜に生まれた。最終学歴は小学校卒だが、父は自分の手元で四書五経などの高度な教養を身に着けさせた。書や歌についても非常に含蓄の深いものを残しており、15歳の時の夢は「日本銀行の総裁」を夢み、20才の時には「英雄となる資格はないわけではない、英雄になりたいと思わぬだけだ」という漢書を残している。

また、生来争いを好まず20歳の徴兵時、屯田兵という北海道開拓に携わることで兵役を免れる制度を知り、数十戸の農家と共にその主監として北海道開拓を志した。原始林を伐採し、連れて行った百姓とその家族の仮設住宅を建て、そこに畑を作って米やトウモロコシ、ジャガイモなどを植えた。成功した年もあったが、日清戦争の勝利に伴い米の需要は止まった。同時に開拓した必成社という村が大火事と洪水に見舞われ、一方では郷里の資産家から借り入れた資金に対して「利子をつけて返せ」と迫られ、また一方では連れて行った百姓から「給料を上げろ」と糾弾されて挫折した。

その時「共同生活をしながら、争いのない生活を」というレオ・トルストイの教えに共鳴し、それが今の山科の一燈園という生活共同体を創る土台になった。当時、足の指を切断、血書まで認めるまでに行き詰まっていた天香は死を決意し、三日三晩飲まず食わずで死を待つ。四日目の朝に赤ん坊の泣き声を聞き、後にこう記した。

「夜は白々と明けた。このときふと耳にしたのは赤子の泣き声であった。はっと思った。私もあの赤子のように泣いたなら。あの子は今泣いている。あの子の母親は腫らした乳房を抱えてうろうろしているに違いない。もしもあの子が泣かずに飢えて死んだなら母は乳を持て余してどんなに嘆くであろう。泣いてくれればこそである。乳を飲むのは生存競争ではない。他をしのぐのではない。飲むことによって母も子も喜び合うのである。子が産まれる前に乳はない。生まれて初めて乳が出る。母も子もその乳のために何らの努力もしない。自然に恵まれて二人とも助かる。人類の食物もかくあるべきだ。もちろん無理に生きようとするのではない。許されるならばである。それならいかにして泣いたらよいか。またはここにじっとしていてよいのか。」

この時天香は32才、32才の大人が赤子の様に飢えを伝えるには、体の動く限り何かをさせていただくことであった。店の手伝いから畑の作業、納屋の整理からトイレの清掃等、目につくものは何でもすることであった。このように報酬を求めずその日その日を生きてゆく宿なしの天香の周りに道を求める様々な人が集まってきた。天香は自分の托鉢先をその青年に譲り自分はまた新たなご縁を結ぶ。一方この風変わりな求道者を注目する人々も増えていった。救われた人たちの中にある婦人がいた。彼女は郷里の資産家の妾であったが、天香の「人謂壺中玩、不関花自真」（人は謂う壺中の玩、関せず花自ら真）という天香の励ましの言葉に救われて、日に三度の髪結を一度に減らし金を節約して一棟の建物を建てて宿無しの天香に捧げた。それが今も残る一燈園の建物である。

天香は礼拝堂を建て次に家族で入園する人たちのために学校を建てたことで教育という土台が根付く大きなきっかけになった。一燈園の教育を一言で言えばどう答えるかという質問に対し「自然に適う教育とでも言おうか」と答えている。この「自然」について分析してみると、人間は生を授かると同時に「脳」と「心」と「体」を授かる。自然に適うにはこの「脳」と「心」と「体」をバランスよく鍛える必要がある。「脳」を鍛えるのは「学問」

であり、「心」を鍛えるのは「祈り」であり、「体」を鍛えるのは「汗」である。「祈り」というのは宗教の祈りではなく生活の祈りという、人間として生まれてきたことに気づくことである。「汗」というのはスポーツの汗ばかりでなく、他のために何か汗を流して役に立つということである。また「脳」を鍛えるのは学問であり、知識と技術には答えがあるから教わることができる。

脳と技術で「教わる教育」を「IT 教育」（情報技術 Information Technology）と仮に名付けた。一方、心と体で「伝わる教育」または「気づく教育」を「IS 教育」（情報感性 Information Sensibility）と名付ける。一燈園では生活教育ということを大事にしている。毎朝 15 分程の瞑想をする。この時間は答えのない課題を考える。「なぜ自分は男(女)に生まれたのか」等。給食は板の間に正座して黙食する。黙食とは話をしないということではない。食材と対話する(自己との対話）ということである。清掃も同様である。校庭や教室や廊下やトイレの掃除をすることで相手と向き合う。落ち葉を掃くときには落ち葉と向き合う、廊下を掃くときには廊下のごみと向き合う、そうすることで楽しみが出てくる。生活教育の中に道徳がすべて入っているため、一燈園では敢えて道徳という言葉を使用せず一燈園の学校の特色として「天香科」と名付けた。食作法、清掃、作務、奉仕活動、平和学習、人権学習を含み、募金活動をして支援もしている。先生方の奉仕活動の一環として能、謡曲、日本舞踊、洋舞、剣道、珠算といった、子ども達にとっての「異文化」を教えてくださっている。この先生方は全員プロである。

それからイギリスのギャップイヤー制度、高校を卒業した 18 歳の青年達がストレートで大学に行かずに 1 年間ギャップを取って、自分の好きな国を選び奉仕活動を行うギャップイヤースチューデント、一燈園に 2 人ずつ一年間高校生と一緒に過ごす。子どもたちと一緒に、毎朝、礼堂で明かりを落として静寂な空間で 15 分間瞑想する。拝む対象は窓から見える大自然だけである。

「夏安居」という夏季学校では全国各地の中学高校の先生方が手弁当で集って自分の専門教科を授業奉仕して下さる。今年は京都精華大学のウスビ・サコ先生に基調講演をお願いした。また、高校生が 2 年生の時には、天香の故郷である長浜の町を一軒一軒訪ねて、お手洗いの掃除をさせてもらう年頭行願という行事がある。ある生徒は 8 軒目の靴屋さんでようやくお願いして掃除をさせてもらうことができた。バケツに水をもらい、扉から拭き始めたが汚れが酷く何度も雑巾を絞ってゆすぐうちにバケツの水も汚れてきた、傍で見ていた家のご主人が水を替えてくれた。雑巾をゆすごうとするとその水はお湯になっていた。両手を突っ込んでいると手にしみこんでくるお湯の温かさがご主人の心の温かさのような気がしてうれしかった。命や心は口や言葉では教えられないということである。「命が大事だ」「心が大事だ」というセリフを何百回と学生に訴えても、彼らはすでにそれを知識として知っているがためにそよ風のように頭上を通り過ぎるだけだ。悴んだ手に沁み込んでくるお湯の温かさは心というものを実感させる。この生徒はもう心というものを忘れないだろう。天香は「子ども達はすべて両親からもらった光を持っている。だから一燈園では拝んで育てよう」という主旨の「拝育」という言葉を残している。教員を育てるのは生徒達であるという、「自然に適う」ということが天香氏の教育の基本ではないかと思う。

昔から一燈園にはいろいろな方が海外からも来訪している。ロシヤの文豪レオ・トルストイの末娘アレキサンドラ・トルスターヤ女史、三重苦のヘレン・ケラー女史、ポーランドのマキシリアーノ・コルベ神父、マハトマ・ガンジーの孫娘エラ・ガンジー女史等々。このように小さな学校だが、国際的にもいろいろなご縁が広がっていることは嬉しく思う。またこの少子化の時代平成 14 年以降、小中高ともに少しずつ生徒が増えていることはうれしいことであるが日本一小さいというタイトルはここ暫くはどこにも奪われる心配はない。

最後に、天香氏の言葉を紹介する。

「活発に遊び、しんみりと勉強する。　拝みあうこと。互いに助け合い、励まし合うこと。
他を咎めず、そして人の咎をも謝ってあげること。　そして魂の尊く、綺麗な人になれますように。
自分の利益のためでなく 平和のため、世の人のために役立つことができますように」

特色教育部会　実践発表

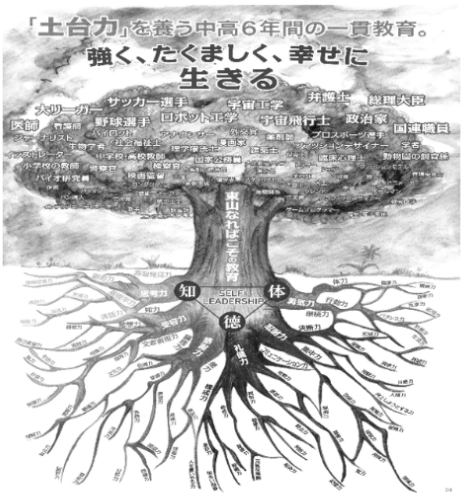
# 「『東山流 土台力修得方略』～『新たな一歩、変わらぬ一歩』による展開～」

（京都府）東山中学高等学校土台力教育開発センター　副所長

**澤　田　寛　成**

本校（東山中学・高等学校）は、2002 年に大きな学校改革を行ない「スポーツの盛んな進学校」として走り続けた。2004 年に「セルフ・リーダーシップの育成」を教育目標とし、2009 年に「土台力の養成」を教育方針とした。さらに 2014 年には、この教育目標と教育方針を釈尊の自灯明・法灯明の教え（自己を灯明とし自己をよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を灯明とし法をよりどころとして、他のものをよりどころとすることなかれ）と重ねた。これにより、浄土宗宗門男子校としての特色教育として、内外問わず多くの支持を得るようになった。そして、2010 年に 1311 名であった全校生徒数（中高計）が 2021 年には 1828 名となった。23 年ぶりの 1800 名越えとなった。

初代「土台力の木」




2009年

２代目「土台力の木」

2013年

３代目「土台力の木」

2020年

「土台力」は、2008 年に進路指導部が校内教員に向けて発信した言葉であり、小手先のテクニックよりも基礎が大事との考えを前面に押し出したものであった。その翌年（2009 年）、土台力を木の根に見立て、土台力を具現化した初代「土台力の木」が完成した。「何があっても倒れない木」の底には、強く長い根が隠れていることをイラストで表現している。さらに、一目見て分かるスマートなものにすべく、2013 年には二代目「土台力の木」を制作した。よりリアルにするとともに、「教育」を「土壌」に見立てて意味付けを加え、空や地面までも意識した。幸福感をも伝える本校らしい納得のいくものになった。しかし、土台力の要素についてはそれぞれの教職員の理解任せになっており、統一はされていなかった。そこで、2019 年 7 月に三代目「土台力の木」を制作することになった。「土台力の木の根」を「卒業までに身に付けさせたい力」とし、全教職員のアンケートを基に土台力を再構築した。土台力は３大分類９中分類に集約し、イラストにはピクトグラムやユニバーサルデザインを用い、

「セルフ・リーダーシップ」は「土台力の木の幹」に見立てた。2020 年 2 月までの 8 カ月と、時間をかけての制作となってしまったが、全教職員が関わっての制作という面で大きな意味を持った。さらに、「土台力の木」ポスターも制作し、全教室に掲示することにした。日々、全生徒・全教員の目に「卒業までに身に付けさせたい力」が入るようになった。2020 年 4 月に、「土台力修得のための地盤」ができ上がったことになる。

| 大分類項目 | 中分類項目 | 小分類項目 |
|---|---|---|
| まなぶ | 知識 | 基礎学力、読解力 |
| | 思考 | 考える力、想像力、論理的思考力、論理的に説明する力 |
| | 探究 | 観察力、探究力、洞察力、創造力、楽しむ力、知的好奇心 |
| つながる | 自立 | 挨拶、礼儀・規律、基本的生活習慣 |
| | 和合 | コミュニケーション力、人の話が聞ける、伝える力、まわりを動かせる力 |
| | 共生 | 素直な心、思いやる心、協調性 |
| つくる | 自律 | 自律心、精神力、忍耐力、継続力 |
| | 挑戦 | 志、挑戦力 |
| | 遂行 | 計画力、行動力、判断力、体力 |

さて、土台力修得のための方略であるが、次の 5 つにまとめることができる。

**１．環境を整える。**

心が通い合う温かい雰囲気を作ることが重要だと考えている。生徒達は素直である。我々が応援をすれば心から感謝してくれる。

〈実践例〉不定期に「豚汁会」というものをやっている。夜の 7 時前後に、食堂で豚汁やぜんざいを振舞うというものである。放課後に自習して残っている生徒達が行列を作り並んでくれる。心の通い合いによって「素直な心、思いやる心」が身に付いてくれていると実感している。また、環境作りには保護者の手を借りることもある。毎年 4 月に鯉のぼりの寄贈をお願いしており、いただいた鯉のぼりを飾らせていただいている。校内を無数の鯉のぼりが舞い踊ることになる。男子校ならではのイベントとなり、「志」を確認する機会になっている。

**２．** 学び方を伝える。

日本の茶道や武道などの師弟関係のあり方の一つである「守破離（型を守る→型を破る→独自の型）」を意識した教育を展開したいと考えている。

〈実践例〉入学直後に学習説明会を実施し、学習における姿勢を説明する。「エビングハウスの忘却曲線」、「日々の振り返りの大切さ」、「平凡×徹底×継続＝超非凡（鍵山秀三郎「正しく生きる」より引用）」などを柱に説明している。また、OB からの体験談に触れる機会もたくさん用意している。現在は、コロナ禍であるため、合格体験談発表会もライブ配信や録画配信など工夫しながら実施している。「人の話を聞く力」を得る機会になっている。

**３．** 日々の充実を図る。

世界中で使われているどこにでもあるツールを使って、日々振り返ることが大切だと考えている。

〈実践例〉「生徒手帳」「10 年カレンダー」「3 年日記」をオリジナルで作っている。PDCA サイクルを回すには、これらの役割は大きいが教員が回収してチェックすることはしていない。しかし、これとは別に、毎週 1 回ファイル指導を行い、そこで学習面における PDCA をチェックすることにしている。「計画力」「行動力」「判断力」「忍耐力」「継続力」を身に付ける機会になっている。

**４．** チャレンジを推奨する。

チャレンジする生徒が多いクラスは、クラスメートもその生徒達の影響を受け、前向きで活気があるクラスになる。

〈実践例〉夏休み前に「東山チャレンジ」の募集をかけ、個人や団体での挑戦に対して補助金を出すという取り組みをしている。プレゼン審査や成果発表の機会もあり、主体的な学びの推進の機会になっている。その他、校

長がお題を出す「校長チャレンジ」、数学科主催での「数学オリンピック校内選考会」、学者からの教えを基に自分たちで学び合う「脳科学研究会」などもある。「探究力」「想像力」「楽しむ力」を得る機会になっている。

**５．** アウトプットの機会を設ける。

本校はアクティブラーニングを推奨している。特に、「書く、話す、発表する」を含めた学習を重視している。

〈実践例〉アクティブラーニング公開授業月間（6 月・9 月・11 月）やアクティブラーニング協同勉強会（年間 5 回）を 6 年間継続している。授業以外にもアクティブラーニングを活用している。例えば、面接対策講座では、ルーブリックを用いて生徒同士で評価をし合う。そうすることで、他者の面接から効率的に多くのことを学ぶことができる。「コミュニケーション力」や「伝える力」を得る機会となっている。

最後に、今年度の新たな取り組みを報告する。

本校では、2016 年より「学習力強化プロジェクト特別委員会」を設置し、主体的な学びの実現に向けた教育を展開してきた。6 年目を迎えた今年度は、これまでの取り組みをさらに発展・充実させるべく、新たに「土台力教育開発センター」を設置した。昨年度までとの大きな違いは、教育 IR（Institutional Research）推進 WG を設置した点にある。教育 IR 推進 WG は、現在、2018 年度に始めた「東山アセスメント」の改良、2019 年度から実施している土台力修得度を測る「卒業アンケート」の改良に取り組んでいる。並行しながら定期的な学習調査を積極的に取り入れ、2020 年度作成した「準正課カリキュラムマップ」の改良も随時行っていこうとしている。土台力修得に向けたカリキュラムマネジメントの効率化を図っている。

特色教育部会　研究協議（全体会）

## 「各学校の特色ある教育の取り組み」

特色教育部会研究協議（全体会）を実施するにあたり、参加者に各校の特色ある教育の事例に関してアンケートを実施した。そのアンケートをもとに、4名の参加者にさらに詳しく報告して頂いた。

（静岡県）**浜松学芸中学高等学校**

**「普通科地域創造コース～地元をよく学び、Ｕターン学生を増やしたい～」**

浜松市の魅力を追求し、それを発信するプロジェクトに取り組んでいる。1年生5単位、2年生4単位、現地調査、事業者協働、ポスターづくり、プロジェクトビデオ制作、イベント企画を行う。

普通科に進学して何を学ぶんだ、がはっきりしていて、人気上昇中のコースになっている。高校観光甲子園2連覇中。もともとは探究活動として生徒の中で育ってきた活動をコースとした。

（滋賀県）**近江兄弟社中学校**

**「ＩＣＴ、探究学習、マーカレスモーションキャプチャなど」**

1. ＩＣＴ、探究学習、マーカレスモーションキャプチャ

京都工芸繊維大学の装置を借用し、マーカレスモーションキャプチャを用いた探究学習を実施した。内容としたは「指示語とジャンプ動作の関係」とし、先行研究を踏まえて、新しい指示語をつくらせ、実験、検証を行った。

2. ＳＴＥＡＭ教育、技術、情報、micro：bit

技術と情報の教科において、micro：bitを用いた「おそうじロボット」の開発を行っている。ステップとして、①ラジコンとして操作し、ワーパーで掃除するロボット。②距離センサーを用いて自動で進路を変えるロボットにワイパー掃除をさせる。③ファンを追加し、空気の流れを考察して、ゴミを吸い込むお掃除ロボットとする。

3. 数学、ｓｐｈｅｒｏ、ＰＡＳＣＯ

数学教育において、プログラミング機器を用いた授業を実施、計画している。

（実施）sphero：プログラミング、速さ、時間、角度を入力できる。図形や速度の授業。

（計画）PASCO：距離センサ、物体との距離、速度、時間が測定できる。2次関数、1次関数の授業。

（島根県）**開星中学高等学校**

**「起業家セミナー（中学3年生　探究型授業）」**

地域の様々な種類の企業と新商品のプランニングを行い、校内で販売まで行う。

予算立て、企画立案、マネジメント等、実践的な体験を通じて、地域社会と学ぶ。

（大阪府）**常翔学園高等学校**

**「キャリア教育、探究活動、グローバル教育など」**

●キャリア教育、探究活動

【スーパーコース、薬学・医療系進学コース、一貫コースⅠ類】

高校1年　ガリレオプラン探究Ⅰ　一般的なキャリア教育。

高校2年　ガリレオプラン探究Ⅱ　チーム毎の実験や研究、ゼミ。

高校3年　ガリレオプラン探究Ⅲ　論文をまとめる

【全コース】

高校1年　企業探究学習

josho cup 1st　（企業毎の発表会）、2nd（校内発表会＝企業探究学習の最後のまとめ）

【特進コース、一貫コースⅡ類】

ヤングリーダーズプラン（地域活性化プロジェクト）

【文理進学コース】

夢発見ゼミ（大学連携、SDGs探究など）

●グローバル教育　夏期休暇中　※コロナ前

【高校1年（希望者）】　Basic English Camp

【高校2年（希望者）】　Global Leaders Camp

【特進コース、文理進学コース】　海外研修旅行（シンガポール／マレーシア）

【スーパーコース、薬学・医療系進学コース】　海外研修旅行（シンガポール／アイルランド／カナダ）

【高校1年・2年（希望者）】海外研修プログラム（オーストラリア）

【高校1年・2年・3年（希望者）】海外研修プログラム（フィリピン）

特色教育部会　講演Ⅱ

# 「AI 時代において求められる教育 ～人工知能・ロボティクス・コミュニケーション場～」

立命館大学情報理工学部情報理工学科　教授
**谷　口　忠　大**

4 部構成で進める。まずは AI の現状、続いて記号創発ロボティクス、ビブリオバトル、最後に私論として、AI 時代に求められる教育について話したい。

人工知能ブームは 2013、14 年頃だ。AlphaGo が囲碁のプロに勝利したことは記憶にも新しいと思う。他にも Google Home、Amazon の Alexa、iPhone の Siri などの音声認識の性能は非常に上がり、音声認識で様々な指示を出し、音声合成もできる。もう一つ大きなものは機械翻訳だ。ワンクリックで日本語に翻訳でき、性能も向上した。人工知能は非常に身近なものになった。人工知能と聞くとすごいものを研究しているようだが、実際は夢のような人工知能はほとんどない。機械翻訳や音声認識、画像認識などが今の人工知能ブームを牽引している。人工知能という言葉自体は非常に曖昧だ。学問とは定義の上で論理的に展開すべきだが、人工知能はそもそも宿命的に曖昧だ。私自身の定義的なものは人工知能とは何か確立した学問体系というより、取りあえず人間のような知能を作りたいという思いが先にあり、そのための研究全般を人工知能研究であると考えている。その意味で非常に発展途上である。困ることは、人間の知能とは何かが誰も分からないことだ。人間の知能を完全に定義できる哲学者、心理学者がおらず、ゴールさえ分からず模索している。その模索中に生み出されたものを使っているのが人工知能というフィールドだ。人工知能ブームは 3 つに分類される。最初の第一次 AI ブームが 1950 から 60 年代、第二次は 1980 年代で、一度この時期にピークを迎える。その後は全く見えず、2010 年代からまた爆発的に増えた。第一次は人工知能元年とも言われ、1956 年にアメリカでダートマス会議が開かれ、初めて AI という言葉が使われた。その前に第二次世界大戦があり、その時初めて、チューリングマシンなどの電子計算機の原型が生まれた。初めて考える人工物が考え始められた。それまでも自動システムである蒸気機関車や自動車はあった。それは自動で動くが、エネルギーが必要だ。ところが、初めて、考える、計算することができるようになった。このままいくと、人のように考えられる知能を作れるのではという最初の動きだった。その後、1980 年代に知識工学という分野ができた。チェスで Deep Blue という IBM の計算機が当時のチェスのチャンピオンを倒した。しかし、多くの壁にぶつかり、簡単には進まない。それから、コンピュータに学ばせる機械学習が数学的な基盤、そしてデータを集められるようになり、計算機の機能も上がり、2012、13 年頃からディープラーニングが盛り上がり始める。それまでに蓄積はあったが、使えるようになったのが 2010 年代の人工知能ブームだ。最初は、人工知能と言わなかったが、研究成果を社会、新聞で人工知能と言うようになった。では、知能とは何か。様々な切り取り方ができる。一番簡単な切り取り方は知能とは何かの機能、ファンクション（function：関数）であることだ。数学やプログラミングの関数もファンクションという。関数は何かを入力した時、それに対して適切な処理をし、適切な結果を出してくれるものである。例えば画像認識では、パソコンやスマホ内の画像は基本的に 1 ピクセルに RGB の 3 つの値があり、縦 100×横 100 の画像は 3 万個の数字が並ぶデータだ。そのデータに対する答えを関数は適切に出力し、画像認識ができあがる。同様に、音声認識だと WAV ファイルだ。音声データもデジタルデータであり、数字の並びを変換して音声をテキストに変える。数学的な変換でほとんどの話ができる。だから、機械翻訳は日本語から英語、英語から日本語へ、テキストからテキストへ変換している。人間

の知能はすべて関数かと言うと違うが、知能の一部はそう表現できる。これをどう作るかが問題だった。人間がどうやっているかということは論理的に説明できないし、明晰に書き下せない。そこで、プログラミングに限界があるなら着目点を変えようと思い、何かしらの特徴を作ろうと考えた。例えば人間はイヌの画像を見てイヌだと分かる。それならば、ある種、人間の一問一答のような画像データに対して、イヌのラベル付きデータを大量に用意する。そして、そこに関数を使う。関数のパラメータを最適化して作ったのが 2000 年代から 2010 年初めの機械学習、パターン認識である。ところがこの方法ではなかなか成果が得られなかった。それを乗り越えたのが 2020 年代の AI ブームの引き金となったディープラーニングである。特徴抽出器という部分自体も大量のデータがあれば、そのデータから学べるのではないかと考えた。大量のデータを用意し、すべて一気通貫で End-to-End、画像のピクセル情報だけを入れて、端から端までの関数を学習するというディープラーニングができた。それによりパフォーマンスが上がった。Convolutional Neural Networks がラージスケール、大規模画像認識チャレンジという世界大会を 2012 年頃に行った。それまで見向きもされなかったディープラーニング、Neural Networks、この Neural Networks のアプローチが 2 位の東京大学のチームに 10%以上の差をつけて圧勝した。Neural Networks のアプローチは 2000 年から 2010 年頃は時代遅れと考えられていた。ある機械学習の国際会議を見ていると、Neural Networks という言葉と、その論文が採択されるか否かには負の相関があると言われた。そこからの大逆転に周囲も驚いた。これには信念を持ち研究を続けることは大切だと思わされた。2010 年以降はディープラーニングばかりとなり、2015 年頃には画像認識のパフォーマンスは人間の精度を超えた。それから 5 年以上たつが、大切なのは画像集合という限られたものでは人間が負けることだ。

ディープラーニングとは何か。基本的には画像の 3 万次元ベクトル X に、行列である W を掛ける操作が始まりにある。各ベクトルの各要素に重みを掛けて足し合わせていき、そのあとにサイン関数や指数関数のような非線形関数を一種類用意して、それに入れていくと高次元のベクトルが出てくる。そして、それをまた一次変換する。一次変換しかしていないが、それを何回もやる。一次関数だけだと直線の一次関数しか作れないため、難しい形はできないが、一次変換してから曲がる関数に入れ、それをまた一次変換することを繰り返すと複雑なものを段階的に作れる。本質的に学習パラメータは一次変換しかしていないため、トレーニングや学習をさせるとき、データにフィッティングさせるときは、この一次変換している行列のパラメータ、数字だけを探索して変えればよい。そして、この行列のある要素を大きくすると出力がどう変わるか、小さくするとどう変わるかは微分値で計算できる。パラメータ、200 万個をすべて偏微分にする。手ではできないが、コンピュータではできる。これらのことからディープラーニングはシンプルな構造だと分かる。また、式変換は画像のみ、出力はラベルのみであると決めていない。そのため、工夫次第で様々なことができる。例えば、画像キャプション生成（image captioning）というタスクは屋外で多くの人が買い物をしている画像が入ると、A group of people shopping at an outdoor market とテキストに変換する。出力側に大量の画像を用意し、それを書き下すとどうなるかという文章とそれらの組み合わせを大量に用意し学習することで変換できる。この手法への変化に大きな影響を与えたのが翻訳だ。翻訳はそれまで言語学の知識を使いながら文法を考えて機械翻訳をしていた。だから 2002 年頃は、人工知能研究者は言語学者とコミュニケーションをとり、言語学を勉強しなくてはならなかった。今の機械学習の機械翻訳は言語学の知識を一切使っていない。大量に日英の対訳データを用意する。出力がクラスラベルではなく、出力をコントロールのゲームパッドの主力にするとゲームをプレイさせることができる。これが 2014 年頃に Atari のゲームをプレイさせる AI が出て、Google の DeepMind がプレイするものを見せた。このようなゲーム AI は 10 年、20 年前からあった。なぜこのゲーム AI に驚いたかというと、普通はこのようなプレイをする時には特徴量を考える。つまり、バーが X 座標でどの辺にあるか、ボールがどのくらいの速度でどこに飛んでいるかなどの情報を数値にして学習させるが、このアプローチはそれを一切しない。RGB の画像そのものをインプット

にする。デビット・シルバー筆頭のチームが次にやったのが AlphaGo である。ゲームをするとき、カラーのピクセルが並んでいる画面を見て、今どのくらい自分によい状態かを読み取り、次にどういう行動を取るべきかを考えなくてはいけない。将棋やチェスのプロは AI に負けていた。難しかったのは盤面の評価である。囲碁はこの盤面で、どのくらい自分が勝っているのか判断が難しい。それをパターンから学習できるようになったことが大きなところだ。このような形でインパクトある成果が出てきたのが今の AI ブームの主流の流れである。

2010 年代後半から今もオンゴーイングで生成系のアプローチがかなり出てきた。Adversarial nets が有名だ。何かを入力して画像を作り、画像が何かを理解するというより、画像データを大量に集めて画像を作る。この手法は今ほとんどオープンソースになり、Google 等がやっているのはほとんど GitHub というようなサイトから落とすことができ、高校生でも遊ぶことができる。これを数学的に説明すると確率分布のモデリングである。3 万次元のベクトル空間をイメージしてほしい。3 万次元のある点はある女の子の顔とする。数字が並んでいるその点を少しずつ横にずらす。点の間が少しずつ変化し、ノイズが乗っても、まだ女の子の顔と分かる。女の子の毛先の位置が少し動くことを考えると、その 3 万次元の空間の点の上では近い場所にあるということだ。こう考えると、実はキャラクターの顔の画像は 3 万次元の空間の上の一部分なのだ。ところが、それはすごく狭い領域できれいに分布していない。その部分空間をうまく確率分布としてフィッティングして見出す。それが見出せたら、その確率分布からサイコロを振るように 1 点取り出す。そうすると画像になる。自動作曲も考え方は同じだ。それらは奇数で確率分布のモデリングの視点で考えられる。作詞作曲をするとき、曲を聴き、パターンを見出し、盗用にならない範囲でメロディーを作る。人間がやっていることもこれに近い。人工知能は何々ができても創造的なところができるのは人間だけという言説が安易にされる。だが、その創造性は何かよく分からない。むしろ、その創造性の大部分は簡単に AI に奪われていく部分かもしれない。現在、私達が技術として認識している人工知能は数学の上に成り立っている。高校でのベクトル、線形代数、確率・統計、微分積分等がないと成り立たない。これが大きなポイントで、それまで情報系はプログラミングが大事で高校の数学にあまりない新規科目のイメージだった。ところが今では高校の数学の上に積み上げられている。2010 年代の AI ブームは高校数学の情報科学の応用を直結させており、私達のカリキュラム的には非常にやりやすくなった。

次に私たちが研究している記号創発ロボティクスを紹介したい。関数としての知能は確かに使えるが、自分とは何か、人間の知能とは何かを問いたい。人間の画像認識は大量のデータを用意しなくても認知発達し、生まれて環境と相互作用し、徐々に育って、身に付けていく。言語も子ども達が自分の感覚で、環境とインタラクションしながら言葉を聞き、言葉を覚えていく。このように自らの身体的経験と感覚、運動情報の統合を通して、機能や言語を獲得し、コミュニケーションを可能にする。私達がどのようにコミュニケーションをとるかを考えると、そこまで理解しないといけない。だから、ロボット自ら環境の中で動くことで何かを獲得するような発達的な知能を持たせることを重視する。その意味では関数ではない。人間は自分の五感で感じるもの以外は一切入力として得られないが、その中で徐々にいろいろな機能を得る。ロボットがペットボトルをつかみ、手触りや触覚情報を得、振って音を聞き、見た目をカメラで撮影することで画像情報を得たとする。ロボットはマルチモーダル、多感覚な情報を受ける。そして、視覚情報、聴覚情報、触覚情報を情報統合する機械学習をする。クラスタリングと言われる。これを行うと、これはペットボトル、これはスポンジボールと人間が教えずとも、ロボット自身がペットボトル、スポンジボールなど様々なカテゴリーを見出すことができる。20 世紀の思想的には言語優位的な考え方があり、カテゴリーは人間が区別するからそこに区別があるのだという考え方が多いが、少し違い、結局人間は自分の身体で環境を認識するため、カテゴリーを見出せるのだ。また、物体の概念のみならず、場所の概念も学習させる。掃除ロボットに玄関を掃除しておいてと言うだけで指示を終えたいが、その指示だけで玄関の掃除を終わらせることはできない。私達の持っている言葉の意味はただ言葉と言葉の関係性の知識で学ぶだ

けではなく、現実世界の何であるかということ、その言葉の意味が分からないと実世界では役に立たない。このような情報をマルチモーダルな情報とセットにして学習させている。一方でサービスロボットにある程度インプリメンテーションし、実装して、学習成果のデモをしている。SF 的な意味でイメージされる人工知能はどちらかというと、自分の体を持っていないとか、自分でどんどん学習していくイメージだと思うが、そういうものが実世界に現れるのはまだ先だ。人間の仕事が AI に奪われると言うが、自ら実世界の中で行動する知能はまだだ。だが、音声認識や画像認識ツールは進歩した。メジャーではないがモラベックのパラドックスというものがある。コンピュータは知能テストを受け、チェッカーをプレイする等、その中で小難しい問題をやるのは強い。四則演算はコンピュータにかなわない。一方で 2 歳児ができる実世界で何かものをつかんで持ち上げたりする方がはるかに難しい。だから、AI はすごく難しいものを解いてブームになる。囲碁という思考力を試されるもので勝って人工知能が注目を浴びた。一方で掃除ロボのように部屋の隅々まで掃除すること苦手である。人工知能が人間を超えたと言うが、かなり以前から囲碁のアプリに勝てなくなり、AI に抜かれており、それが本質なのかよく分からない。

次に、知的書評合戦、ビブリオバトルとコミュニケーション場についても話そう。まずビブリオバトルだ。ルールは簡単で、メンバーそれぞれがお気に入りの本を持ち寄り、与えられた 5 分間で順番にプレゼンしていく。スライドの準備は不要で、各自の表現で本の面白さを伝える。そのあと 2、3 分間でディスカッションをするが、最終的に読みたくなった本に全員がそれぞれ一票を投票し、最多票を集めた本がチャンプ本になる。読書感想文の発表会とかプレゼン大会のように取られることもあるが、本質は違う。公式ルールには 1 個 1 個に機微がある。参加者自身が面白いと思った本でないといけないのはだれかに紹介を強要された本ではビブリオバトルの機能が発揮されないからだ。また、チャンプ本を決めることも重要だ。さらに、どの本が一番読みたくなったのかが基準であることも大切で、誰のプレゼンが一番よかったかではない。これを行うと、人を通して本と出会うきっかけができ、反対に本を通して人を知ることもある。またビブリオバトルを定常的に行うと、発表者は読まざるを得ず、それだけで読書推進効果がある。そして、本について語ると自分のことを話すことになる。なぜこの本を読もうと思ったのか、なぜなら私は何々が好きだからなど、自分がそれを選書したという行為、それが意義を持つ。自分で本を選ぶことが重要だ。この本が好きだと持ってきた時点で、自分の様々なバックグラウンドを表象している。これにより、日常の学校の生活空間で知らなかった情報が回る。人を通して本を知る、本を通して人を知る、その両方の機能が相まって、高校や公立図書館、イベントや書店など、様々なコミュニティに広がる。ビブリオバトルは最初の時点で論文にし、最初は情報共有の場として提案している。研究者の中の実践で生まれたものだが、そこで考えていたことはメンバーが興味を持つ本、そのコミュニティにとって面白い本、書店の高ランキングではなく、私達のコミュニティにとって面白い本をどのように見つけてくるかということだった。それぞれに本の知識があり、その知識をフル活用して、メンバーが読みたくなる本を持ってこなくてはいけない。ビブリオバトルは皆で手分けして本の森を探索する冒険の旅だとよく言う。この考えを別の視点でいうと、日常のある種の活動のゲーム化だ。どうしても、教育の場やコミュニケーションの場は、先生がいて、非常に非対称な状況で生徒側を受け取り手とみなしてデザインすることがしばしばある。参加者の能動的な参画を促し、それによりその場を持続させようとする考え方が重要だ。どんなに面白いゲームも参加を強制すると面白くなくなる。これはビブリオバトルの普及でも難しい壁になった。ビブリオバトルは皆が勝ちたいと思って面白い本を持ってくるから、面白い本が集まる場になる。そこに、試合をあきらめた人間が集まると、面白くない本が集まり、面白くなくなる。だから、授業内でのデザインはどうするかは個別議論になる。ビブリオバトルはビブリオバトル一つで終わらせるのではなく、ある種のコミュニケーションの場をゲーム化し、その参加者の知識をうまく活用させることを考える。そういう場というもの、何かのルール、メカニズムをセットして、そこに参加者が集まり、

先生の指導はなく、ルールに従って様々なことをするということだ。その結果、参加者の成長が促され、面白い結論が見出されるという、コミュニケーション場になる。そして、この設計論を行ったのがコミュニケーション場のメカニズムデザインである。約 10 年前からビブリオバトル発案後に言い始め、約 2 年前の JST の研究プロジェクトの中でも行った。この中で教育に関係して話したいことはパーラメンタリー・ディベートである。日本のディベート教育は今ひとつ浸透していないが、非常にゲーム化されている。ゲーム化されている中で発信力、論理思考力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力が身に付くと言われている。日本はコミュニケーションに輪を求めすぎるところがあり、対立構造を作るディベートがネガティブに捉えられることもある。うまく広がらなかった理由は実践の方法などで少し間違えているところが多かったのだと考えられる。

会議で若手や後輩が発言しない状態を解決するために行った研究もある。発話権取引だ。最初に、1 枚出すと 30 秒話せるカードを全員に同数枚配る。誰も話さない時はランダムに誰かを当てて話してもらう。会議が進み、話すことがなくなれば話したい人にカードをあげても構わない。こうすると、年長者が話し続け、発話権を取れない人が話せないという状況を防げる。発話時間が均等化されるが、このアプローチを行うと発話内容も変わる。発話権取引のようにすると、「意思表示」や「理由」はかなり増え、反対に「経験」はほぼ減る。普通のコミュニケーション場を考えると、お喋りを普通にして、何も設計していない。だが打合せになると、司会の立場が生まれる。司会は通常、年長者やリーダー格の人がやることが多く、発話権は誰かの発言終了後、司会にまた戻ってくる。次に発話権を誰かに渡さないといけないが、司会側は誰がどういう意見を持っているか分からない。そうすると、誰々はどう思うかと話を振っていくことになる。その結果、話を回すために年長者の経験を話すことが増える。これが発話権のやりとりと関係しているかは分からないが、生まれてくるコミュニケーションの形が変わっていく。

最後に、AI 時代に求められる教育だが、私論で、AI の話とリンクさせながら話したい。AI に何をやらせるか、AI ができることは人間がやらなくていいのではと言われ、教育サイドがこれから何を教えていくべきかと悩むことがある。その時往々にして、AI で見るものが間違っている。今ある AI 技術とは精度が高まった音声認識装置、画像認識、機械翻訳だ。メロディーや画像の生成、ルールや簡素化、固定化された世界、コンピュータの中で完結できる囲碁やチェスをするような知能は実世界には出てこない。AI が人間の仕事を奪うようになるとどうすればよいかと言う時に、思い浮かべる AI は SF に出てくる AI だ。すべての家事を手伝ってくれる AI はかなりの部分が夢物語だ。ところが、教育議論や人文議論、AI 倫理の議論になると、一気に近未来的なイメージを前提とした議論になり、あまり実用的ではない。もっとリアルな危機は他にある。AI に関して考える時には、AI を擬人化しないことが大切だ。機械翻訳一つ取っても、人工知能が日英翻訳をしてくれるというと、人工知能が日英翻訳をしてくれたと思うが、人工知能技術を使用して日英翻訳とするというと少しマイルドになる。そういう視点で物事を考えなければならない。未来ではどういう仕事が AI に奪われるかというランキングがあるが、人工知能に仕事が奪われるという考えにも擬人化が入っている。確かに、大まかな翻訳の仕事ほとんど奪われていくだろう。その意味で、人工知能が仕事を奪うとは何も特別なことではない。人工知能が仕事を奪うとは、擬人化が入ったために人類史において初めての出来事のようなイメージだが、工業化が進む中で仕事が奪われる事例はオンゴーイングで常にある。歴史的に言っても、産業構造は技術開発とともに着実に変わっていく。そのコンテクストで何の仕事が失われるかを考えるべきで、人工知能が仕事を奪うことに対して過度な擬人化をすることは百害あって一利なしだ。また、単純な作業や計算は AI に任せ、人間はもっと創造的なことに集中すべきという考えがあるが、これはよくない。AI に取って代わられることは、AI と私達が知識勝負をするわけではない。私達の相手は、AI を使うことで、私達が産業的優位に立つ相手だ。基本的には人がいないところでアーキテクチャのシステムの手足になって人間が動くという構造が出てくる。このような時は必ず、手足になる側の人間は取り換え可能

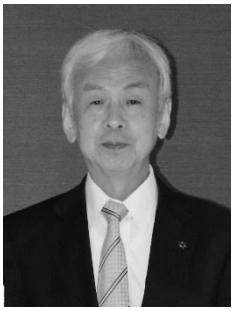
な要素になる。このような経済システムでは雇用の単価は買い叩かれるため、安い賃金に向かっていく。その一方で、そのアーキテクチャを作った資本家と経営者にはこのフローが大きく跳ね返ってくるという構造が出てくる。このように、AI が入ることにより社会構造が変わるため、それに向き合う力を付けないといけない。AI 時代の数学は、非常によい時代に入っている。「数学は何の役に立のか」という問いに、大人達は様々な回答を与えてきた。2020 年代の今だからこその答え方がある。スマホの中は数学に満ちあふれている。カメラで撮った画像の圧縮には三角関数が不可欠だ。ゲームアプリの動きはベクトルや微分積分に基づく物理演算によって支えられている。地図アプリの自分の位置を推定する技術は確率統計の数学を使ったモデルに基づいている。そもそもスマホは情報処理の技術の固まりだ。それを通して得る体験のほとんどは人類の生み出してきた数学的あるいは情報的概念によって支えられている。人工知能技術もそうだ。スマホの中を見るだけでも、本当に子ども達が触れているものは数学に満ちあふれている。それらはほぼ無料でプログラム環境を作り、実践できる。高校で習う数学と応用、そこで何か動くものは直結している時代になっている。だから、これほど数学が何の役に立つかを話しやすくなった時代はない。どう使われるかが分かった上で、アプリケーションとしての勉強をしていくのは大切だ。

最後は、発信することによる学びについてである。日本の大学ランキングの下降は止まらない。もはや後進国化に歯止めがかからない状況にある。日本人はとにかく発信が弱い、主張ができない。中国人もアメリカ人も強い。イギリスでも自分の主張を立てて、それを論理でサポートするようなコミュニケーションを叩き込まれる。イギリスでは国語教育の考え方が違う。日本の国語教育はゴールが理解の側にある。しかしイギリスでは自ら考えたことをいかに発信するかということをゴールにして国語教育をしている。大学で論文を書くようになったが、主張するということは頭の切り替えが難しい。大学に入るまで受けてきた教育ではそこはなかった。そこが日本の弱体化につながっているイメージを受ける。そこに何か貢献したいため、ビブリオバトルがある。ビブリオバトルは自分の好きなことを発信する。ビブリオバトルは非常に敷居が低く、小学生でも中学生でもできる。そこからディベートに進んでほしい。同調圧力に屈するのではなく、自らを使い、何か異なる、人と違う好きなことをしっかり発信できることが大切だ。そして、これらのことができている文化圏が同時に育てているものが寛容さである。変なことを言っても、まずは聞いてあげることだ。変なことを言うことと、その人の存在価値があるかなしかは別の問題である。まず人格を尊重し、寛容な空気を作り、受け止める、そういう文化を学校の中で作っていくことが大切だ。また英語教育についても同様で、プロジェクト発信型英語でビブリオバトルを英語で行うものもある。英語でもいかに伝えられるかだ。自分が伝えたいことは何かを話すことを軸にし、そのためには、どのような単語が必要か等、そのように回していくと、モチベーションも駆動できてよい。このように AI で社会も変わり、教育のツールも変わっていく。AI 時代という曖昧模糊としたものに振り回されるよりは今あるツール、環境の変化、例えば Zoom よって海外の学生と英語でコミュニケーションする場ができ、留学しなくても教育の場は作れるような時代になった。そういうものに向き合いながら、教育環境を作っていくことが大切だ。

特色教育部会

# 「総　括」

洛星中学高等学校　理事・校長
**阿　南　孝　也**



特色教育部会では、2 つの講演と 1 つの実践発表、そして会場の先生方も参加する形の研究協議を行いました。

学校法人燈影学園名誉学園長であり、一燈園中学高等学校前校長の相大二郎先生の講演「今こそ建学の精神に立ち戻って～一燈園の目指すもの～」では、教育の原点を大切にしていることを熱意を持って伝えて頂き、涙ぐみそうになりました。その原点を大切にしてこれから様々な１つ１つのことを丁寧にしたいと思っています。そして、「命は大切、心は大切に」ということは言葉では分かっているので、言葉ではなく、そう感じさせることがとても大切だという相先生の言葉が印象に残っています。東山中学高等学校土台力教育開発センター副所長の澤田寛成先生の実践発表「『東山流 土台力修得方略』～『新たな一歩、変わらぬ一歩』による展開～」では、様々な工夫をされている話をお聞きしました。生徒手帳は普通の手帳ではなく、そこに先生のコメントがあるということや、特に感銘したことは 10 年カレンダーです。本当に素晴らしい取り組みで、それらをすべて分かる形でお示し下さる寛容さにも感激しています。立命館大学情報理工学部情報理工学科教授の谷口忠大先生の講演「AI 時代において求められる教育～人工知能・ロボティクス・コミュニケーション場～」では、谷口先生は AI の研究者ですが、何を大切にしているのかということを教えて頂きました。私は数学の教師ですが、数学についてもいろいろなところで使われているということを、知ってはいましたが、改めて子ども達が関心を持つ形で伝えることができるということまで教えて頂いたことをうれしく思っています。

また、研究協議は参加型ということでしたが、当日のアンケート調査にもかかわらず、大勢の方にご回答頂きました。時間の関係で 4 人の先生の発表しかできませんでしたことを心からお詫び申し上げます。そして、4 名の先生方は急なお願いにもかかわらず、皆様が動画等を用いて分かりやすくコンパクトに発表して頂きました。

私の尊敬する学校法人ノートルダム清心学園理事長だった渡辺和子先生は「子どもが親の言う通りにはなりません。する通りになります」と言っています。だから、子どもに自己肯定的な生き方をしてほしいならば、まず親や教師が自己肯定的な生き方を見せることが何よりだということを強く思っています。今回の部会を通して、そのようなことを強く感じました。少しでも子ども達の手本となる教師、手本となることができればと思っています。

皆様方が何か掴んで下さり、それを生かして頂けたら、幸いに存じます。またお目にかかることを願いまして、総括とさせて頂きます。

# グローバル教育部会

21 世紀に入って以降、これまで以上に頻繁に「グローバル」という言葉を耳にするようになった。中学校や高等学校の教育現場においても多くの学校が「グローバル人材の育成」を教育の柱の一つとして掲げ、その実践に積極的に取り組んでいる。また、今年度から学習指導要領の改定により、「主体的・対話的で深い学び」を通して「何ができるようになるか」を明確化することに主眼を置いた新しい教育課程が展開されている。

教育の転換期とも言える今、当部会では、「問い」からグローバル人材育成を支援する学びの実践に関する講演、私学発祥の地（828 年に空海が綜芸種智院創設）とされる京都の地において実践される「建学の精神」を礎としたグローバル教育や、ポストコロナ時代の世界と Society5.0 をリードし、SDGs の達成を牽引する WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）など、幅広いグローバル教育の実践発表を通して共に考えていきたい。

1　研究目標　　私学が変える日本の教育～グローバルスタンダードへの挑戦～
2　会　　場　　リーガロイヤルホテル京都　2 階「春秋」
3　参加対象　　理事長、校長、副校長・教頭、グローバル教育担当教員
4　参加人員　　４３名
5　日　　程

| 時間 / 月日 | 9 | 30 | 45 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 30 | 16 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 月 22 日（金） | | | 開会式 | 講　演 | | 昼食 | 実践発表Ⅰ・Ⅱ | | | 閉会式 | |

6　内容・日程細目

| | |
|---|---|
| 9:00 | 受　　付　　機材担当：岡田　隼人・西尾　洋輔<br>（佐野　貴史・宇治田　展明・川端　悠紀）　　記録(写真)担当：西尾　洋輔<br>記録・集録担当：伊藤　大輔 |
| 9:30 | 開　会　式　　司会：山田　　亘／記録：伊藤　大輔<br>１．開式の辞<br>２．運営委員長挨拶　　グローバル教育部会運営委員長　福　家　崇　明<br>３．運営委員紹介<br>４．日程説明<br>５．閉式の辞 |
| 9:45 | 講　　演　　司会：山田　　亘／記録：伊藤　大輔<br>講師紹介：山田　　亘<br>演　題　「グローバル化を目指して人材育成を支援する学びとは？<br>～学習者みずからによる問いづくりを設計し、実践する～」<br>講　師　佐　藤　賢　一　　京都産業大学総合生命科学部生命システム学科　教授 |
| 12:00 | 昼　　食 |
| 13:00 | |

| | |
|---|---|
| 13:00 | |
| | 実践発表Ⅰ　　司会：山田　亘／記録：伊藤　大輔<br>テーマ　「花園式グローバル人材育成法～スーパーグローバル ZEN（禅）コースの挑戦～」<br>発表者　中　村　広　記　（京都府）花園中学高等学校　副校長 |
| 14:15 | 実践発表Ⅱ　　司会：山田　亘／記録：伊藤　大輔<br>テーマ　「イノベーティブなグローバル人材育成への挑戦～WWL 拠点校の実践～」<br>発表者　上　杉　兼　司　（京都府）立命館宇治中学高等学校　WWL 事務局長<br>酒　井　淳　平　（京都府）立命館宇治中学高等学校　キャリア教育部部長 |
| 15:30 | 閉　会　式　　司会：山田　亘／記録：伊藤　大輔<br>１．開式の辞<br>２．総　括　　グローバル教育部会運営委員長　福　家　崇　明<br>３．閉会の辞 |
| 16:00 | 解　　散 |

7　講師・発表者（順不同）

| | | |
|---|---|---|
| 佐　藤　賢　一 | 京都産業大学総合生命科学部生命システム学科 | 教授 |
| 中　村　広　記 | 花　園　中　学　高　等　学　校 | 副校長 |
| 上　杉　兼　司 | 立　命　館　宇　治　中　学　高　等　学　校 | WWL 事務局長 |
| 酒　井　淳　平 | 立　命　館　宇　治　中　学　高　等　学　校 | キャリア教育部部長 |

8　運営委員・指導員（順不同）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 福　家　崇　明 | 京都産業大学附属中学高等学校 | 理事・校長 |
| 副委員長 | 山　田　　亘 | 京都産業大学附属中学高等学校 | 副校長 |
| 委　員 | 中　村　広　記 | 花　園　中　学　高　等　学　校 | 副校長 |
| | 佐　野　貴　史 | 京都聖カタリナ高等学校 | 副校長 |
| | 岡　田　隼　人 | 京　都　美　山　高　等　学　校 | 主幹教諭 |
| | 宇治田　展　明 | 京都聖母学院中学高等学校 | 教諭 |
| | 西　尾　洋　輔 | 京都産業大学附属中学高等学校 | ICT 支援員 |
| | 川　端　悠　紀 | 立　命　館　宇　治　中　学　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 伊　藤　大　輔 | 京　都　成　章　高　等　学　校 | 教諭 |
| | 飛　田　佐和子 | 洛　星　中　学　高　等　学　校 | 養護教諭 |

グローバル教育部会　講演

# 「グローバル化を目指して人材育成を支援する学びとは？
# ～学習者みずからによる問いづくりを設計し、実践する～」

京都産業大学　生命科学部　産業生命科学科　教授
特定非営利活動法人　ハテナソン共創ラボ　代表理事
**佐　藤　賢　一**

私達は普段、学習者が自ら問いを立てるという学びのあり方を探究し、いろいろなコミュニティ活動の場で実践を広げている。その具体的な流れを学習者の立場に立ち、実際にはどのような取り組みなのかをつかんで頂きたい。

3 つの問いを立てた。1 つ目はグローバル教育やグローバル人材育成とはどういうものなのか、自分の身の回りの関係とどうつながるのかという問い。2 つ目は持続可能な開発目標、SDGs をテーマとして学習者が自ら問いを立てる授業とはどんな授業なのかという問い。最後は、私達がテーマに掲げている問いづくり、特に学習者が自ら問いを立てることがなぜ大事なのか、重要なのか。グローバル教育やその人材育成とは何かという問いだが、私が勤務する京都産業大学の建学の精神は創始者である初代総長の荒木先生が表したものとして、今も本学に脈々と語り継がれている。ここにはグローバルという言葉は書かれていない。私達は昨今、世界規模の問題や課題、学びのテーマを表現する時にグローバルという言葉を使う。しかし、この建学の精神を見ると、全世界の人々からという言葉や、全人類のという表現が出てくる。これはまさにグローバルを表現しようとしている言葉にほかならない。つまり、半世紀も前から建学の精神では、日々の学びを支えているいろいろな概念や理念、目的、教育目標はグローバルな視点を意識して、あるいはしっかりと言語化する形で脈々と今に続いている。私達が取り組んでいる日々の教育活動はこの 5 年 10 年の間にグローバリズムという言葉とともにグローバル化を推進しているというものではなく、これまで継続性のあった営みが新しい表現、キーワードで表されるようになったという受け止めがしっくりくるということを改めて感じることができる。グローバル教育、人材育成は建学の精神、日々の教育活動との向き合いから改めてその重要性を感じ取るとともに、何か新しいことをゼロから始めるのではなくこれまでの経験値を生かして今後どういう新展開があり得るかという未来志向を促すものと考えている。

2 つ目は SDGs をテーマとする問いづくり授業を紹介し、そのワークを体験してほしい。ハテナソンセミナーという問いづくりに主軸を置いた大学での授業を 3 年前から担当している。それまでは生命科学部の授業担当をしていたが、初めて全学共通教育の科目の授業運営をするようになった。このハテナソンという言葉は「ハテナ」と「マラソン」を組み合わせた言葉だ。ハテナをたくさん作るという意味をイメージした。このハテナソンのもとになったアメリカで作られたメソッドは QFT（Question Formulation Technique）という。今ではアメリカを起点としていろいろな国で教育業界だけでなく様々な分野で問いづくり、あるいは課題発見という文脈で使われ始めている。

生まれてから高校を出るまでの間の 3 つのスキルについて、アメリカの調査結果がある。読み書きのスキルは当然ながら年齢とともに向上していく。一方でアスキングクエスチョン、問いを立てる能力では子どもの時は非常に活発に質問をしていたが、年齢を追うごとにそのスキルが落ちていく。加えて別調査で、「教室の中で質問している人は誰か」という問いでは圧倒的に先生であるという結果が出ている。数で言えば圧倒的に多いのは生徒のはずだが、生徒側が質問する機会は非常に小さい。この背景は効果的な発問が先生からの働きかけとして授業

を構築していくことだが、オーソドックスな学びとして、効果的であり歴史のある営みだ。一方で、質問するという行為にフォーカスした時に偏りが「見える化」する。ここで問題意識を持った時、問いづくりのメソッドを使うことでこの状況をほぐしていけないかという提案があった。今はネット上でキーワード検索をすると、いろいろなことを教えてくれる時代になった。そんな時代に私達がすべきことは何か。質問をすれば答えが手に入るような時代だから質問しなくていいのかというと、そうではなく、誰も答えることができない難しい問いをどんどん考えていこうと提案している。レオナルドという著述家はどのような分野の世界でも、適切な問いを立てる能力はこれから重要になっていくと訴えている。経営の神様と言われているドラッガーもあらゆる会社の失敗は適切な答えが見つけられなかったのではなく、適切に問いを立てられなかったことが失敗の原因であると言う。問いの重要性は古くから認識され、それを学校の先生が適切な問いという形でこれまでは運用してきた。そこを変えようと提案するのが問いづくりのメソッドだ。私達が推進しているハテナソンではアイデアを作る営み「アイデアソン」、そしてそのアイデアを実際に社会に実装して解決の糸口を探る「ハッカソン」という 2 つのマラソンを示している。ハテナは自分達で見極めて言語化できるからこそ、具体的なアイデアや解決策が自分達で考えられるようになる。それらを組み合わせれば、ハッカソン、具体的なアクションにより未来づくりができるようになるという考え方だ。ハテナソンでは問いを立て、課題を明確化する。いわゆる課題発見学習という言葉と相通じるものがある。一方アイデアソンは仮説を立て、解決策を導き、見通しを立てる営みになる。いわゆる課題解決学習の一部をなすものだ。そして最後、実行、検証はハッカソンが担う部分で、具体的な行動に落とし込み、その結果からまた学びを獲得する、新しい問いを立て直すとか、新しい仮説を立て、それを検証するというサイクルに入っていくことである。ハテナソンセミナーでは大学生としての学びを充実化させ、卒業までの 3 年でどのような目標を立てて学んでいくかを 1 人 1 人に企画立案してもらうという出口を用意している。主に 3 つのテーマのもとで問いづくりを行い、問いを起点とする学びをコンセプトにしている。そのテーマの 1 つ目は、社会や世界という広がりを持つテーマのもとでの問いづくり。2 つ目は自分がいる大学、自分が学びを重ねる専門の学部のテーマでの問いづくり。3 つ目はより思考範囲を狭めて、自分自身をテーマに問いを立てていく。ある意味キャリアデザインのような部分を含む問いづくりだ。これを順次重ねて大学生としての考えるスキル、そしてビジネスの世界で通用する思考力をリテラシーとして手に入れていく。

普段は、今あるハテナを入り口に簡単な問いづくりワークとして問い集めをする。これは全員がハテナを 1 つ出していることを前提とし、そのハテナを使ったワークで、思い浮かんだ問いを紙に書き、他のメンバーに聞いてもらう。聞いたメンバーはその問いに対する問いを返すというワークだ。相手から問いを立ててもらう、あるいは課題を提示されると、それに対する答えを探そうとする。条件反射的に仮説を提案しようとするが、このワークでは答えてはいけない。相手が投げかけてきた問いを掘り下げるための問いを重ねるというチャレンジだ。まずウォーミングアップとして自分の身近に感じられるテーマのもとでの問いづくりで地ならしをした上で、QFT を使った学びのテーマに則した問いづくり授業を展開している。「学校の中での先生と生徒の関係に 1 つ変化を入れてみませんか」つまり「質問する人を先生ではなく生徒にしてみるのはどうですか」という提案だ。もちろん生徒からの質問を促すための仕込みが先生には必要となる。単純に、「では質問して」という話ではないが、そこがまた興味深いところでもある。

新しい問いづくりのメソッドとして、問いの焦点、英語ではクエスチョンフォーカスと言い、先生からの最初のアクションを表すものがある。先生は発問により授業の展開を起点として動かすことが一般的だが、ここでは発問の代わりに学び手が問いを作るためのきっかけになるような情報、テーマを提示し、そこを問いの焦点の共有と表現している。では、どのようなものが問いの焦点として使われるのか。Sustainable Development Goals ロゴマークは 17 個のそれぞれのゴール設定が簡単なフレーズで色とりどりの箱の中に収められ、それに付随した

グラフィックデザインも含めて印象的、かつ難しい表現になっている。持続可能な開発目標をテーマとして大学生に最初に見てもらう情報はこのマークである。私からは特に説明をせず、まずこのマークを見ながら疑問、関心、自分が掘り下げたいと思うこと、いろいろな切り口で学生に質問を作ってもらう。そのときに注意してもらうのが 4 つのルール設定だ。まず、問いを出し合う時間帯を全員できるだけ多く出せるように協力してほしいこと。2 つ目は、説明や話し合い、評価、問いへの回答をしないこと。3 つ目は、発言者は意見や主張ではなく、疑問文を発言することに努める。4 つ目は 3、4 人の中で記録係を 1 人決め、出た問いをワークシートに書き込むこと。記録係は、自身の問いを含めて、みんなが発言した問いをできるだけ発言した通りに記録するように努めてほしいこと。これらはユニークなルールだと思うが、1 つ目のルールは比較的どのようなワークでも出てくる話でたくさん出そうということである。そのためのユニークな仕掛けとしてあるのが 2 つ目だ。説明、話し合い、評価、回答、こういった問いではない言葉を排除する。これは、頭に蓋をしないで済むようにするための仕掛けという位置付けになる。つまり、人というものはいろいろ説明したくなり、その背景をみんなに披露したくなるものであり、何か相手が言ってきたことに対して反応し、「いいね。面白いね。つまらない。」という感情表現をすることも普段は普通にしている。そのような諸々のやり取りが実は自分の考えを自由に出すことに対して妨げになると考えられる。いろいろな気持ちがネガティブに作用して、お互いに出したいものが出せない、あるいは出したいかどうかも分からなくなってしまうことが教育の現場にかかわらず、いろいろな場で気づきとしてあることが背景になっている。そのように提言化して、お互いに安心安全に自分の考えを素直に言語表現することができる場を作ることが、2 つ目のルールを中心に埋め込まれている。1 人 1 人が確実に、成果物に貢献するための仕掛けと考えるとよい。さて、今回はロゴデザインを見るという非常にシンプルな入り口での問いづくりだった。私の授業展開の中では、最初は入り口から徐々に前提となる標準化されるべき知識や経験知を重ねては、問いをまた重ねていくという体験を学び手に持ってもらうようにしている。

第 2 段階として SDGs の本質理解を目的としたゲームワークショップをご覧頂く。具体的な中身を理解するための概要説明、いわゆるインプット行為のコンテンツの一部だが、幾つかのカードゲームの公認ファシリテーターという立場でいろいろな現場でワークショップの運営をするが、授業の中ではそういった体験をまずは SDGs に身近になってもらうための仕掛けとして使う。「2030SDGs（一般社団法人イマココラボ提供）」というカードゲームがある。このゲームは学び手達が教室の中で教室内にいる全員が世界を担う世界市民だという世界観を作る。皆がゲームの中でプレイする諸々のことがたった 1 個の地球の未来を作っていく。そして何よりも、自分達の未来も作っていくというシミュレーションゲームになっている。具体的には、5 つのパターンのゴール設定がチーム単位に割り振られて、それぞれに思い思いの活動をそれぞれの目的に沿ってゲーム中にたどっていく。その結果、たった 1 つの地球の 3 つの要素、「経済」、「環境」、「社会」がどのような発展を遂げていくかを同時にモニタリングできるという仕掛けになっている。このようなゲーム体験を通して、SDGs とはどういうものなのかというインプット的な講義を重ねる。経済、環境、社会をバランスよくしていくという理念・目的を今度は文字情報や動画、映像資料等で提供し、具体的な 17 個のゴールをある程度説明して、さらに 169 のターゲット、例えば貧困をなくすといった時に貧困がそもそもどう定義されているのかはロゴデザインを見たときに共通に出てくる問いの 1 つではないか。具体的な内容も国連が発信しているアジェンダを読めば分かることを情報として提供し、場合により文書を学び手達に目を通してもらい内容をシェアしてもらう、そのようなワークを挟み込むことで SDGs についてリサーチクエスチョンを立てるための前提として必要と思われる知識の標準化を図る。それらを経て、重要なキーワードは「世界を変革する」とか、「誰も 1 人取りこぼさない」というキャッチコピーがあることにも触れてもらい、1 回目の問いづくりにあった問いの答えが見つかったかどうか、そして、見つかったのであれば、さらに尋ねたいことは何かという働きかけをし、2 回目の問いづくりをする。

そして、3 つ目の段階は接続と俯瞰というように応用展開のインプットになる。第 2 段階では本質理解、内容理解ということで誰でもアクセスできるような情報を紹介しつつ、実際に資料を使い、ゲームタイプを通して、学びに落とし込む。今度は自分で SDGs とどうつながるのかを考えることで SDGs をはじめとするグローバル展開をする。いろいろな課題解決の営みを学ぶにあたっての肝になる。そこでよく使っているコンテンツの 1 つは世界につながっている、そして課題と課題が実は密接につながって、さらに自分自身の 1 日の営みがそこに紐づいているという意識付けだ。紹介しているのは「風吹けば桶屋がもうかる」という古くからの言い回しの現代版として、「スナック菓子を食べると、地球が温暖化してしまう」がある。インドネシアのジャングルは 1980 年代からどんどん森林が伐採されて赤茶けた土地ができ、広大な緑に置き換えることを数十年来行っている。1980 年代に森林伐採が環境に負荷を与えると声高に言われ、さらにエスカレートしているのはどういうことなのかという問題提起から入る。インドネシアの農園のヤシから取れるヤシ油、パームオイルと言われているものに、スナック菓子やシャンプー、洗剤などの生活用品の中に入り込んでいる油の多くが依存している状況である。日本ではこのパームオイルの需要が非常に高い一方、それがどのように出回っているかは一般消費者には分かりにくい構造になっている。食品成分の中では植物性脂肪分のような書き方をされているだけで、どこからどのような成分が使われているのかというところまで踏み込んだ情報には簡単にアクセスできない。この 20、30 年の間に需要が非常に高まっている。今では 1 人当たり 5 ㎏のパームオイルを使っている。パームオイルは日本では作れない。だから諸外国の大規模農園に依存するという構造がある。森林伐採が環境への負荷になるということは半ば常識化していて、今では、人類のいろいろな活動に伴う地球温暖化ガスが気候変動の主原因だということが IPCC の第 6 次報告書には断定的に専門家集団からの提言として出ており、かなり定説化している話だ。私達が好む安いお菓子のようなものに対する需要が高まることで、それを手に入れるための安くて品質のいいパームオイルに対する需要が高まり、その供給のための大規模なプランテーションが必要である。ここで初めて森林伐採とヤシ農園のつながりにより、「スナック菓子が地球温暖化」というフレーズがありえるという仮説設定になるわけだ。世界で起きているネガティブなことは多くあるが、「スナック菓子が地球温暖化」のようなフレーズは幾らでも作ることができる。そういう思いがけないつながりとループはお互い関係しているのではないかという考え方も導入する。例えば地球温暖化で農園での作物の取れ高が激減し、貧困にあえぐ人達がいることで、児童労働や児童労働によって学校で学ぶ機会を奪われた子ども達が、いろいろな意味での格差に対する怒りが根っこになりテロリズムに走るという点だ。そういった縦のループも容易にイメージできる。そういうことで、今世の中にある問題は 1 つ 1 つの問題がクリアに解決の糸口を探せるようなものではなくなり、ジグソーパズルのピースを 1 つ 1 つ埋めていけば確実に前に進める状況ではないという共通理解がある。同じパズルで例えるならば、ルービックキューブのようにある色を整えようとすると別の色がずれてしまうという、すべてを一致させるにはかなり実行困難な課題に囲まれている認識がある。その意味では、改めて SDGs のロゴデザインで四角く区切られてきれいに並んだ 17 個の課題というのはルービックキューブになぞらえると、お互いがお互いに複雑に絡み合って課題を成しているのではないかと見直すこともできる。例えば、「質の高い教育をみんなに」という、日本ではかなり評価が高い唯一の項目だが、これがうまくできていない国や地域は学校がないというインフラの問題や、学校はあるが女性に教育の機会を提供しないというジェンダー問題、さらには、学校はあるが男女とも家が貧しく働くため学校に行けないとか、そういう複雑に複層化した課題として「質の高い教育をみんな」にというミッションがあるということができる。その意味で、世界はこの課題を通して複雑につながり合っている。さらに、私達の生活必需品の中に見えざる気候変動の原因がたどれるかもしれないことは、1 日のいろいろな活動を意識するしないにかかわらず、この課題につながっていて、私達が起点になって課題が作られているかもしれないという考え方を持つことが SDGs の掲げている理念目的に埋め込まれているということである。もう 1 つの本質は、SDGs

のカードゲームの中で使った世界の状況、1 つ 1 つのチームに与えられたゴール設定を例に取り上げ、私達は一体、何をどこまで手に入れれば幸せと言えるのか、持続可能と言えるのかという基準がないことを問題として提起している。2030 年にここまでやるというバックキャスティング的な行動計画を立てたことにより、そこまでやればある程度の達成感を味わっていいという、逆の意味での安心感を SDGs は可能性として示してくれているのではないか。どれだけの貯金が国にあれば、どれだけの財政的なゆとりがあれば、国が豊かと言えるのかということについて、世界標準の申し合わせというものは存在しない。それが可視化されることが明るい未来を建設的に協働しながら作ることに役立つのであるという概念的理解は SDGs が担っている部分ではないか。そういったことを学び手、生徒達、その周りにいる学習者と共有して意見交換しながら、SDGs を「自分事化」していくという学びの段階につなげていく。バックキャスティングと言ったが、従来は現状を改善していく積み重ねが未来を明るくするというフォアキャスティングというセッティングが主流だった。SDGs に象徴されるように 2030 年にここまで達成するのだという宣言が今どこまで何をすればいいのかというバックキャスティング的な発想につながり、今の世の中の動きをリードすることができる。SDGs の重要なキーワードは何だろうかという問いに対しては、Transforms「変革する」というキーワードがあるということと、「誰一人取り残さない」という社会の実現を SDGs は重要なメッセージ、キーワードとして提示しているという話である。ここまでが第 3 段階で自分と SDGs をつなぐという学びのプロセスだ。

ここからは The Question Formulation Technique のオーソドックスな流れに準じてたどっていく。問いを出し合うプロセスはいろいろな考えを発散的に出すという発散思考の段階だったが、次のステップは収束的な思考にスイッチし、問いを分類、変換する。まず①として、閉じた問いには三角、開いた問いには丸をつける作業である。閉じた問いとはその問いに対する答えが「はい」や「いいえ」で答えとして成り立つようなもの、あるいは何か単語 1 つで明瞭に答えることができるものを言う。一方、開いた問いとは問いに対する答えが、「はい」や「いいえ」では成り立たないもの、つまり、何か説明が必要となる、人それぞれにいろいろな答えが出てくる可能性がある問いのことを言う。②は①の作業をしながら同時にすることになると思うが、閉じた問い、開いた問いとはそれぞれどんな特徴があるのか。どんな場面で閉じた問いの使い勝手がよく、悪い場面とはどんなときか。③として、最後にこれは分類が終わった後にどれか 1 つ問いを選び、それが閉じた問いであれば開いた問いに、開いた問いであれば閉じた問いに作り直してみるというワークである。この方法で、閉じた問い、開いた問いにざっくりと分類ができる。どちらに分類するか迷った問いがあるかもしれない。要するに、どう答えたら適切なのかがはっきりしないということで、尋ねた側の意図が相手にきちんと伝わる書かれ方になっているか、表現の仕方になっているかというところにクエスチョンがある。私個人ではそういう場合は、無理に丸、三角にする必要はないと思っていて、むしろその問いをどのように作り直せば、より明確に閉じた問いになるか、あるいはより明確に開いた問いになるのかという作り直しの機会があると考えればよいと思っている。そして、問いの特徴を話し合うところでは、どんな場面で閉じた問いが機能するか、あるいは開いた問いが逆に機能するのかを考え、問いを重ねていけば、自分がほしい情報が合理的に有効に手に入り、戦略的な問いづくりを学ぶ機会を提供してくれる。戦略的な問いづくりとは有名人のインタビュー記事でインタビュアーが何をどんな順番で尋ねているかというところに身近な事例を見ることができる。面白い内容豊かなインタビューの記事はやはり問いの順番が適切だ。それが閉じた問いだけでは面白くないものになるし、あまり開いた問いばかりだと冗長なものになるということは容易に想像できる。後は文脈的な解説をすることもあるが、例えば選挙の後に出口調査が行われ、それによって報道局はどの政党が優勢なのか、どの候補者が当選確実なのかをいち早く届けようと頑張るが、その時には閉じた問いが非常に有効だ。多くの回答を早く手に入れることができるという意味で、あなたはどの政党に入れましたかと尋ねる。ただ一方で、これが万能かというと決してそうではなく、予想に反してある政党が負け

た場合、投票者１人１人に投票心理を尋ねるという開いた問いがあり得る。そこで出てくる回答は閉じた問いのように数をたくさん集めることは難しいが、今回の投票行動がどうだったのか分析することに役に立つことが想定できる。いろいろな文脈で、開いた問い、閉じた問いの適切性があるということを学習者に腹落ちしてもらう。この分類は良い悪いを決めるためのものではなく、抽象化された問いの機能を身につけてもらうためのものと位置付けて取り組んでいる。問いの作り直しはまさに実践的な働きかけで、1 個でもオリジナルの問いが作れれば、そこから派生して様々に問いを作ることができることを学習者に体験してもらう。例えば 1 つ目の段階で問いを多く出し合うところがうまくいかなくても、問いが 1 個でもあればしめたものだという気持ちになってもらう。そういう意味では成功体験を届けるという機能もこの開閉変換というワードには埋め込まれている。そして、QFT の最終段階は自分達が立てた問いの中から大事なものを選び取るというワークである。優先順位付けだ。「大事な問いを 3 つ選んでください」ということが基本系で、ワークシートの裏面に大きな 3 つの枠が用意されている。その後、グループごとに作った問い作りのワークシートを交換し、情報交換を行う。複数のグループがあることでいろいろな考えに接するチャンスも生まれる。隣同士のグループで問いづくりの結果をシェアするだけでも新しい発想や思いがけない共通点などに接することができる。基準を設けることで、教師側が意図したデザインに学び手をガイドするというデザインの部分もある。加えて、大事な質問を選ぶにあたって何かしらの交渉があるかと思うので、合意形成のためのプロセスを学ぶ機会も提供してくれる。実際にどう決めたかをグループ間でシェアするだけでも、小さなデモクラシーを体験するような学びになる。自分ではない誰かになりきって一から問いを作ってみるというチャレンジも非常に有効だ。この QFT のプロセスを一通りなぞらえることで、問いづくりをするための準備がある程度整っていると考えて、私はこのワークにプラスアルファとして学び手にチャレンジしてもらうことにしている。高校 3 年生の立場だったら今のテーマに対してどういう問いを持つだろうか、あるいは就学前の子どもだったらというような設定だ。設定に沿った問いを立てることで、誰かの身になって考えることをトレーニングできるのではと期待している。

問いづくりは発散思考、収束思考、そして学んだことを自分自身で言語化するというメタ認知思考のプロセスをさらに加えることでこれらを非常に手際よくパッケージしたすごく使い勝手のいいツールになると考えている。このプロセスを授業 3、4 回に納める形で、ハテナソンセミナーは他の幾つかのテーマごとで問いづくりを重ねて、最終的には 1 年生の終わりの段階で残りの 3 年間の学びを見通すという出口を提供している。このような学びを、問いづくり、グローバル教育に限らず、知識、技術、態度をバランスよく身につけてもらうための 1 つの仕掛けと位置付けているので、実際にこのような学びを実装される 1 つの道具立てとして考えるときは、そもそもの学びの目的をどこに置くかということを主軸に企画作りに入っていく。

最後に、学習者自らによる問いづくりがなぜ大事かということを、自分自身が問いを作る学び手としての視点も合わせ、ぜひメタ認知を含め言語化して頂きたい。

グローバル教育部会　実践発表Ⅰ

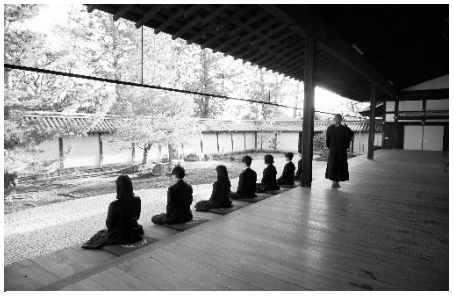
# 「花園式グローバル人材育成法 ～スーパーグローバル ZEN（禅）コースの挑戦～」

（京都府）花園中学高等学校　副校長
**中　村　広　記**

本校は、明治 5 年に臨済宗大本山妙心寺の宗門子弟の教育機関として創立され、来年、創立 150 年目を迎える、長い歴史のある学校である。建学の精神は「禅のこころ」であり、創立以来、禅の精神を根本に据えた教育を展開してきた。

今、日本は「少子高齢化」という極めて大きな問題に直面し、これまでの教育だけでは、将来持続可能な社会を構築していくために不可欠な人材を育成することが出来なくなっている。国の施策として抜本的な教育改革が推し進められようとしているが、「10 年後、20 年後の世界で活躍できる人材を本気で育成したい」という信念から、本校では 2016 年、これまであった中高一貫コースを廃止し、「スーパーグローバル ZEN（禅）コース」と「ディスカバリーコース」という 2 つの全く新しい 6 年一貫コースをスタートさせた。

臨済宗大本山妙心寺



妙心寺での修行体験

本研究部会の研究目標は「私学が変える日本の教育～グローバルスタンダードへの挑戦～」である。「公立にはできない教育、私学だからこそできる教育」とは何なのか。私は、「世界に伍するグローバル人材の育成」こそ私学が担うべき教育であると考える。

「グローバル人材」とはどんな人材なのか、どんな能力を備えた人物のことなのか、ということについては、これまでも様々な場で相当の議論がなされてきた。必要となる能力は、英語力、コミュニケーション力、リーダーシップ、協調性、柔軟性、寛容性、集中力、持続力、精神力等、数え上げてもきりがないし、数え切れない学校でこのようなグローバル人材を育成するための多様な教育活動が実施されてきたが、そもそも「英語力」という、誰もが当然必要だと考える、最初に頭に浮かぶ能力において、未だに「グローバルスタンダード」にすら達していないのが現状である。それゆえこの部会の研究目標も「グローバルスタンダードへの挑戦」にならざるを得ないのだと思う。

グローバル人材について語るとき、「グローバル人材とは英語ができるだけではなく・・・」といった言い回しがよく冒頭に使われるのだが、ほかの能力をいくら身につけても、そもそも英語力をおろそかにしていては本末転倒である。この点において、我々教育に携わる者は、ICT 利活用教育や様々な特色教育、総合的な探究学習に注力する必要性を認めつつ、決して英語力、とりわけ「コミュニケーションツールとしての英語力」の育成から目をそらさず、後回しにせず、本気で取り組まねばならないと考える。

以上のような観点から、将来、社会で活躍できるグローバル人材を育成するために、本校では「スーパーグロ

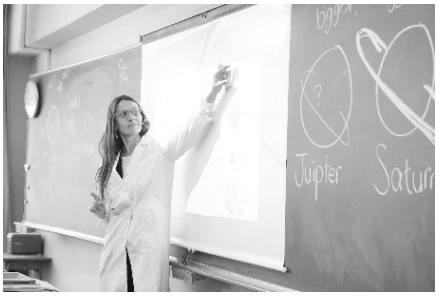
ーバル ZEN（禅）コース（以下 SGZ コース)」を立ち上げた。このコースでは極めて多様な教育活動を行っているのだが、ここでは特徴的なものを紹介したい。

SGZ コースは「禅 ZEN の心を有する真のグローバル人材を育成する」という教育目標を掲げている。6 年間に及ぶ、妙心寺の全面バックアップによる本格的な修行体験を通して、心身と共に自身のアイデンティティを磨き上げ、卒業後は「海外大学」に正規留学する。我々はこういう教育こそが「世界に伍するグローバル人材」を育成すると確信している。

英語力を磨き上げ、グローバルセンスを身につける教育という点では、「インターナショナルスクール」や「IB（国際バカロレア)」「デュアルディプロマ」といったものもあるが、帰国子女でもなく、いわゆる「普通の」日本の小学校、中学校、高校、大学を卒業し、社会に出ようとする際に、本当の意味で活躍できる人材になるためには、「中高でしっかりとした土台作りをし、海外大学へ正規留学する」ことがベストであると考える。まず、本物の英語力が身につく。2、3 ヶ月や約 1 年間の短期留学では、ある程度の生活英語で止まってしまい、社会、すなわちビジネスで普通に通用する英語力、グローバルスタンダードの英語力には達しない。この点において、4 年間におよぶ正規留学が必要なのである。

また、大学卒業後に海外で就職するならともかく、日本で仕事をする、日本で生活していくつもりなら、日本の社会で通用する常識や行動規範を身につける必要がある。保育園の頃からインターナショナルスクールに通うと、ネイティブのような英語力が身につくのだが、日本ならではの「空気を読む」「暗黙の了解」「忖度」といったセンスが身につかないために、まだまだ旧態依然の日本社会では個人の能力が発揮できず、周りに受け入れられないといったことになってしまうケースは少なくない。

また SGZ コースでは、海外大学進学を見据えて、「コミュニケーションツールとしての英語力」を身につけるため、中学 1 年次から週 8 時間の英語の授業に加え、「イマージョン理科」「イマージョン数学」という、外国人講師から「英語」で理科や数学を学ぶ授業がある。さらに iPad を利用したオンライン英会話学習を導入しており、毎日約 30 分間、マンツーマンで英会話のトレーニングを受けることができる。



ネイティブ講師によるイマージョン理科授業

iPad を利活用したオンライン英会話

SGZ コースの「海外大学進学」という目標はあくまでも「通過点」であり、英語力育成のためというよりも、言葉・文化・価値観等の全く異なる世界に飛び込み、4 年にわたって様々な鍛錬を積むことにより、その人間性を磨き上げるためのものである。つまり、ある種の「修行」なのである。そして「結果的に」世界で通用する英語力も身につけようというものである。

中学生になって初めて英語を習い始めるような日本人が、中高の 6 年後に海外大学へ進学するというのは非常に困難なことである。そこで、海外大学に進学し、現地でたくましく成長できる力を中高 6 年間で養うために、本校では 30 年以上の歴史を持ち、1 万人以上もの学生を海外へと進学させてきた実績を持つ、NIC International College in Japan と提携し、高校 3 年生では週 20 時間におよぶ NIC 講座を実施する。

この NIC 講座の特徴は、留学後、海外大学で受ける授業を想定した内容を展開することで、英語力のみならず実際の授業やテストで必要となる実践力を身につける点である。高校 3 年次に一気に授業と課題に明け暮れる毎

日を過ごすことで、海外大学に進学しても決して折れることのない強い心を磨き上げるのである。

本校がこの新しいコースの方向性や教育内容について考え始めたのは、8 年前の 2013 年にさかのぼる。その頃は教育再生実行会議がこれまでにないほど大きな教育改革に向けた提言を提出し、「世界に伍するグローバル人材育成」の必要性と緊急性を発信していた。それから数年を経て、大学入試制度の見直しや主体的な学びを引き出す教育の在り方が繰り返し議論され、まさに一進一退の様相を呈しているが、本校は建学の精神に基づいた私学教育を行う教育機関としての独自性を大切にし、大学入試の形態に合わせた教育を追いかけるのではなく、花園にしかできない、花園ならではの「世界に伍するグローバル人材育成」を追求しようと考えている。そして、このような人材を育成する教育モデルとして「スーパーグローバル ZEN コース」を打ち出したのである。

まだまだ道半ばではあるが、今の日本に必要な教育モデルとして、ほんの少しでも皆様方の参考になるようなことがあれば、こんなにうれしいことはない。

ホロレンズを活用した探究学習

AR/VR コンピュータを利活用した数学授業

グローバル教育部会　実践発表Ⅱ

# 「イノベーティブなグローバル人材育成への挑戦 ～WWL 拠点校の実践～」

（京都府）立命館宇治中学高等学校　WWL 事務局長
**上　杉　兼　司**

（京都府）立命館宇治中学高等学校　キャリア教育部部長
**酒　井　淳　平**

立命館宇治高等学校は、宇治高等学校を前身とし、1994 年に学校法人宇治学園と学校法人立命館の合併により、立命館宇治高等学校となった。立命館附属校の中で、英語教育やグローバル教育、スポーツ活動などに重点を置く学校として再スタートし、「Your Link to the World～学んだぶんだけ世界が近くなる～」をタグラインとし、イノベーティブなグローバル人材を育成することを目標としている。2002 年-2004 年に Super English Language High School(SELHi)の第 1 期指定を受けたのを皮切りに、2005 年-2007 年に SELHi 第 2 期指定、2009 年には一条校では関西初となる International Baccalaureate World School(IB) 認定、2014 年-2018 年に Super Global High School(SGH) 指定、2018 年に研究開発学校 指定（WWL 指定に伴い 2019 年度辞退）、2019 年-2021 年に World Wide Learning コンソーシアム拠点校(WWL)指定を受けてきた。帰国生の受け入れにも積極的（全生徒の 2 割）で、スポーツが

得意な生徒・専門技量を持つ生徒など、多様な生徒が在籍することも特徴である。SELHi 時代に全員留学のコース(IM)を、IB 認定に伴い IB コースを設置。SGH 時代に、IM コースの学びを作り上げてきた。

○SGH の学びと WWL の学びの違い

SGH の学びは、グローバル人材育成のための指定校が開発する独自の取り組みを普及することであった。一方で、WWL では、最初から連携校や連携団体、連携大学などとのネットワークを構築し、協働で文理融合のカリキュラム開発を行い、カリキュラムに紐づく海外研修や国際会議を実施する。Society5.0 を意識したイノベーティブなグローバル人材を育成することが目標。最終的にすべての拠点校の形成したネットワークが合体して WWL コンソーシアムが形成され、新しい教育の仕組みを共有することになっている。

○SGH から WWL へ

本校では、SGH の学びの中で、英語教育から PBL 型教育へ、アイディアベースの探究からアクションベースへ、校内での活動から校外での活動に、競争的発想から共創的発想に転換していき、最終年に、後述する全国高校生 SR サミット FOCUS を実現した。これらの学びにより、探究型学習や「混ぜる教育」の重要性に気がつき、他校の生徒・NPO や企業・地域と一緒に協働することで起こる生徒の変化に、新しい教育の可能性を感じていた。また、IB コースを持つことから、IB における「知の理論」（TOK）の研究、校内でのカリキュラム改革による全校への探究型授業の展開と文理融合型カリキュラムの構築などが、WWL に先んじて実施されていた。このような流れから、本校が WWL に申請したことは、自然なことであった。

○立命館宇治の WWL

三崎

2020 年度愛媛県立三崎高等学校せんたん部地域創生プロジェクト

WAKKA

2020 年立命館宇治高等学校WAKKAグループラオス支援プロジェクト

LAOS

2019-2020 立命館宇治らおにんラオス支援プロジェクトと WWL ネットワーク

雙葉

2020 年度福岡雙葉高等学校日田杉を用いた"かしつ木"プロジェクト

上図は、本校が WWL に申請した時のポンチ絵である。国内連携校や連携期間は、SGH 時代に関係を持った学校・団体が中心で、全国型になっている。海外研修を連携校とともに行うことで、相互に影響しあい、その効果が従来よりも大きなものになった。生徒たちの WWL による変容については、これから学ぶ生徒の目標となるように、教材にできるビデオを作成しているので共有する。

○探究学習による人材育成

探究学習を進めるうえで、「一部の生徒を対象としたプログラム」「全員を対象とした裾野を広げるプログラム」のバランスを考えることが重要である。裾野だけ広げても生徒の可能性が十分に引き出せず、何より取り組みがこじんまりとしたものになる。一方一部の生徒を対象としたプログラムばかり実施しても、派手な取り組みにはなるかもしれないが、学校全体の教育力が高まったとは言えない。生徒が学校生活で打ちこみたいことは多様なので、この両面のバランスを意識しながら取り組みを進めることが重要である。

立命館宇治中学校・高等学校では 2018 年度より新学習指導要領を意識した新カリキュラムを実施し、これにより学校全体の探究のカリキュラムの形が構築されてきた。現在、中学校では「QUEST」「TOK 道徳」、高校 IB コースでは「TOK」「CAS」「EE」、IM コースでは「GLS」、IG コースでは「コア探究」がカリキュラムの核としての探究科目である。探究学習において大切にしているのは、「教員も生徒と共によりよいものを探究する」ということと、「0 から 1 を創る、社会を創る主体となる」ことである。コロナ禍の登校禁止期間に生徒が様々なアクションを起こしたことなどにもその成果が現れている。

○ネットワークを活かした取り組み例

もっと学びを深めたいという生徒を対象としたプログラムも重要である。本校では WWL 事業の一環としてネットワークを構築し、連携校も一緒になって様々な取り組みを進めている。コロナ禍でオンラインの取り組みも一気に進んだ。ここではネットワークの取り組みの代表例として、全国高校生 SR サミット FOCUS と FLAG を紹介したい。

1）全国高校生 SR サミット FOCUS （FOCUS2021 募集動画：https://youtu.be/_nzOGeHjEKo）

2018 年度（SGH 最終年）より始まり、2021 年度は 23 都道府県、3 か国、50 校からの参加があった。各校が進めているプロジェクトを他校生徒のメンバーを交換しブラッシュアップすること、FOCUS WEEK など複数回学びの機会があること、各プロジェクトに連携企業などからメンターがつくことなどの特徴がある。

2）FLAG

FLAG はオンライングローバル PBL プログラムである。「家から世界最前線へ」をキャッチフレーズに、WWL 連携校を横串で繋ぎ、参加希望する生徒は毎週 1 回放課後の時間帯に課外活動として継続的に PBL に取り組む。2021 年度より取り組みを始めたが、7 校 46 名が参加した。社会起業家など多様なゲストによるレクチャーなどを受講し、生徒たちはプロジェクトを構築した。

○今後に向けて

連携団体・学校との相乗効果を生み続ける仕組みの創出ができ、多世代・他地域の多様性を感じ、ダイバーシティー&インクルージョンを実現した。コロナ禍においても、オンラインやハイブリッド型の取り組みで、生徒の学びを止めなかった。一方で、コロナ禍で対面の交流や研修などの学びができなかった海外との関係を、強化していく。今後、この 3 年間の WWL のレガシーを確実に生み出していきたい。社会課題解決型プロジェクトを創出することで生徒の生きる力が身につくところまではいけたが、生徒の生きる力がゴールであれば、部活動や課外活動、学校行事と PBL を結びつける事も重要と考えている。また、PBL だけで止まらず、ソーシャルビジネスまで発展させることも視野に入れたい。さらなる産学連携を実現させるため、社会や企業・団体との連携をより強く具体化(プロボノなど)実践化にも取り組みたい。WWL の全体の学びに様々なレベルや目的のものを準備し、正しいタイミングで段階的に学べるよう、カリキュラムマップを作成していく予定である。生徒の学びの効果を最大限になるようにしていきたい。

※詳細は 2020 報告書をご覧ください。https://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc_e/wwl_event/reports2020/

**グローバル教育部会**

## 「総　括」

京都産業大学附属中学高等学校　理事・校長
**福　家　崇　明**

講演を頂きました京都産業大学総合生命科学部生命システム学科教授の佐藤賢一先生をはじめ実践発表を頂きました 2 校の学校の先生方には、本当に学校の様子をありのままの姿でお話し頂いたことを心より感謝申し上げます。

京都には 40 校の私立の高等学校がございます。また、60 校の公立高校、1 校の国立の高等学校がございます。初日の市長の挨拶にもございましたが、2 人に 1 人は私立の高等学校に通っているということが京都の状況です。私立高校 40 校の中で男子校は 2 校、女子校は 7 校です。かつては男子校、女子校とも多くありましたが、今、共学校が 31 校となっています。また京都の特徴としては 40 校の内の約半分がキリスト教立、仏教立で宗教の教えをバックボーンとして学校教育を行っています。また半分の学校が大学を持っています。さらに 40 校の内の約半分が中学校がございます。この 40 校の私学はライバルではありますが、協力をし合って、教育力を高めていこうということで取り組んでいます。その 1 つとして京都私学の研究大会があります。例年、40 校の学校が持ち回りで、各私立学校を会場といたしまして、10 くらいの分科会に分かれて、それぞれ発表を行って、研鑽を積んでいます。もう 1 つの特徴として、大学の街、京都と言われますように、都道府県の大学進学率 1 位を東京都と争っています。そのため、大学進学に向けての指導が盛んです。

佐藤賢一先生のご講演はグループワークの形で行われました。佐藤先生からは頭に蓋をせずということで先生方と意見を出し合うという、日頃なかなか経験することがないので、いざやってみると、本当に苦労しました。午後からは花園中学高等学校副校長の中村広記先生から、歯に衣を着せぬ形で発表を頂きました。立命館宇治中学高等学校の先生方の実践発表は、私達から見れば、スケールの大きい教育を行っているという印象を受けました。

当部会で学ばれたことを各学校で少しでも反映頂きまして、皆様の学校が歩んで行かれることをご祈念申し上げて総括とさせて頂きます。

# 参加者アンケート（感想）

第１日「全体集会」

**◇京都府私立学校活動紹介**

●京都らしさたっぷりの 1 日目だった。特に学校活動紹介で生徒達の熱心さと指導力に迫力を感じた。京都の私立学校の安定した良い教育の活動を確認できた。励みと同時に良いプレッシャーを受けた。
●洛星中学高等学校、京都光華中学高等学校の生徒にはお疲れ様とお礼を申し上げたい。
●高校生の和歌披講は京都らしく非常に素晴らしく、心洗われた。
●部活動紹介では生徒の活き活きと活動されている姿にとても感動した。
●すばらしいオーケストラの演奏だった。
●和歌披講では凛とした中で行われ、オーケストラの演奏は時間の長さも感じず、印象に残るものだった。
●特徴的な高校での部活動の様子を見ることができ、新しく学ぶことも多くあった。
●地元の文化を発信した和歌披講は素晴らしかった。
●和歌披講は初めて見るものであり、興味深かった。
●生徒の活躍を拝見し、各県での特色にも触れ、自校に帰って他の仲間に話したい。
●生徒の発表は印象的であった。洛星中学高等学校のオーケストラ部のオリジナル作曲はとても聞き応えのあるものだった。

**◇報告**

●この機会で報告を頂くことはただ文章を頂くこととはまるで違い、楽しみにしている。今後とも私学の一員として生の情報を頂きたい。
●教育政策と私学の情勢について理解できた。また日私教研の方向性についても理解できた。
●貴重な情報提供を頂き、さらには私学人としてあるべき姿勢を学ばせて頂いた。
●現在の私学の位置を知る上で非常に興味あるものだった。
●教育政策、私学情勢について、対私学への支援の問題、日本私学教育研究所の取り組みを詳しく報告して頂き有意義だった。
●どちらの報告も興味深い話で、私学教育に向けたさらなる意気込みが感じられた。
●これからの社会課題に対して、私学に求められていることが大変多いと感じた。
●「私学のために」という気持ちを強く感じることができた。このような方々がいらっしゃることに私学の教員として感謝し、そして頑張ろうと思う。
●私学の生徒数漸増のため、また建学の精神に基づく人格形成のための努力を惜しまぬ決意を確認した。（吉田　晋　日本私立中学高等学校連合会会長）
●全国の動きを詳しくお聴きすることができ、大変刺激になった。
●吉田会長はじめ全体の団結を再確認にし、子ども達のためにがんばりたい。
●とても勉強になり、自分の勉強不足を痛感した。自校の教職員にも伝えていく必要を感じた。日常的に伝えられるような伝達システムになると良い。
●私学がおかれている現状を詳しい資料で知ることができた。
●私学人としての私の視点が間違っていないと感じ、自信が持てる。
●全国的な流れ、特に国への要望事項等がよく理解できた。
●補助金行政にまつわる取り組みは普段の業務では見つけ難い「気づき」を得られ、とても有益である。
●日々私学のために文部科学省、総務省などとご対応頂いていることがわかり感謝の念を頂いた。
●吉田会長はじめ連合会として補助金獲得に向けて尽力を頂いていることに感謝したい。
●的確、明瞭なお話が聞けてよかった。これからも体系的な情報提供をお願いしたい。議員や省（特に総務省）への働きかけには感謝するしかない。有り難い。
●私学のおかれている現状、課題を聞くことができ、本当によい機会だった。これらの内容は校内の教員全てが知ることが理想なのだが。

●全国の私学が直面している現状と取り組むべき課題をわかりやすく報告頂き有り難い。
●初めて研究集会に参加させて頂いた。地方にいると今、文部科学省が何を考え、何を考えていないのかがよく理解できなかったが、様々な情報を教えて頂き、大きな刺激になった。また、私立の自由性を実感でき、やり甲斐を再認識した。
●国政と私学教育の関係性が十分理解でき、私学教育の一層の発展に向けて尽力したい。
●厳しくも、私学がおかれている立場を再認識させられるものだった。
●毎回、共感する部分が多く参考になる。そして先生のご尽力に感謝している。
●吉田会長の話は熱く、私学人として深い感銘を受けた。私学の厳しさを再認識した。
●報告、資料とも日本の教育現状についてデータ等から概要を把握するために大変役立つ。
●学校の問題が本校だけのものではなく、私学全体のものであることがよくわかった（公立と私立の差など）。
●現在の私学の現状や情勢をお聞きし、私学人としての自覚と責任をより一層感じた。
●私学を取り巻く情勢について、国の政策や財政の面で最新の情報を得ることができた。
●私学の今後の方向性を注視する点で重要であると感じた。
●感銘を受けた。私立学校としてのプライドを大切にしたい。
●全国的な私学を取り巻く現状を認識させられた。「特化した教育は私学で」という言葉が非常に印象に残った。
（平方邦行　一般財団法人日本私学教育研究所所長）
●様々な年齢層をターゲットにして研修を行われていることがよく分かった。
●大学入試での英語 4 技能評価については、根本的な必然性を再度十分に検討すべきだ。

**◇記念講演（冷泉貴実子　公益財団法人冷泉家時雨亭文庫常務理事）**

●和歌の歴史的意義と短歌の違いがわかった。
●久しぶりに「日本の心」に触れた感じがし、良き時間を過ごすことができた。
●学校活動紹介や冷泉先生の講演を聴かせて頂き、初めて触れる京都の文化で、出席できてよかった。
●「京の文化」の講演も日本を知るというグローバル化でつながる楽しい学びとなった。
●京都の文化を伝える記念講演と生徒達の和歌披講から学びを得ることができた。
●「和」を学ぶことで文化を再発見するなど、普段の業務では見つけ難い「気づき」を得られ、とても有益であった。
●短歌を通じて「型」とそれを理解する教養が京の文化の神髄であることがわかった。
●これまでのいくつかの中でも（この後の和歌披講と併せて）秀逸だった。風景や建物、佇まいのみから感じてきた「京の文化」について、リアルな姿で学ぶことができた。
●京都開催で「京文化」「和歌披講」は最適なおもてなしだった。
●まさしく京都の文化を四季折々の場面をイメージし奥ゆかしさを生徒達の歌を通しご教示下さった。日本の美、日本人としてのアイデンティティを明確にご教示頂いた。
●日本の文化を捉え直すよいきっかけとなり勉強になった。
●和歌については日常的にこのようなものを観ることはないので刺激になった。
●「京の文化」を通して、日本の伝統・文化を学ぶことができた。
●変えるものと繋ぐもののバランス感覚の大切さに改めて気づかされた。
●京都ならではの伝統文化を体感できる趣向に富んだ内容に感動した。
●開催地京都にふさわしい記念講演および京都光華中学高等学校の生徒達の活動紹介だった。未知の世界へ引き込まれる充実感があった。
●「京の文化」の奥深さを改めて学んだ。あっという間の 1 時間半だった。
●極めて日本らしい文化の側面を聴かせて頂き、愉快な一時だった。またそのような文化を伝承している生徒達も素晴らしい。
●日頃京都に住んでいながら忘れているものを思い起こさせられるもので雅感があった。和歌披講は初めて見せて頂いたが素晴らしいものだった。
●自分の心にある日本人としての心を再確認できて豊かな時間となった。
●教養に溢れており非常に興味を持つことができた。
●記念講演、和歌披講は「京の文化」の再確認ができ、刺激的だった。
●「雅」の世界に引き込まれるような素晴らしい記念講演であった。

●古典に携わる者として、その話しぶりは勉強になった。京都光華中学高等学校の生徒のパフォーマンスは素晴らしかった。
●日本人の美意識、感性の淵源を知ることができた。
●冷泉先生の日本の伝統文化を守り抜く姿勢が和歌の中に含まれており、必死でメモしながら感心させられた。生徒の吟じられる様はさわやかで静寂の中、日本の良さの原点が表れていると思った。
●和歌披講等を体験させて頂き、文化の側面から京都の私学に勤務しているというアイデンティティを感じ取れた。これから勤務校の建学の精神と抱き合わせて教育に向き合う気持ちを持たせて頂いた。良い機会となった。
●京都文化の歴史を積み重ねた含蓄ある奥深さを感じさせて頂いた。
●「京の文化」といったその土地ならではのテーマでの講演が聴けて大変満足している。
●日本人の自然感が大変よく分かった。また京都の文化を守る学校での取り組みはぜひ参考にしたい。
●京都ならではの雅の世界を分かりやすく教えて頂き、京都光華の生徒の和歌披講と共に、楽しい時間を過ごさせて頂いた。
●その分野の方々にとって感慨深いものと思われる。また、「和歌」を正課授業としている京都光華中学高等学校の発表は新鮮でありとても感動した。
●何気ない日頃の生活の中での「なるほど」の発見がたくさんあった。
●日本人の共通・共有の文化であったことに気づかされ、どこか懐かしさを覚える源はこれだったと感動した。
●大変感銘をした。京都という地で教育に携わる一人として教養を高め、生徒達に伝える責務を感じた。
●京の四季を感じることができた。
●大変興味深く拝聴させて頂いた。中学・高校時代に先生のような視点で指導して頂けたら、もっと古典が楽しく好きになっていただろうなと感じる。
●心が洗われるような気持ちになった。太陰暦や月の名前、また和歌の定型についての理解が深まった。
●大変興味深く拝聴させて頂いた。京の文化を全国の先生方が少しでも知って頂いたことは京都の私立校教員としても喜ばしい。京都光華中学高等学校の和歌披講も当時の雰囲気を再現し、現代とは全く違う時間の流れを感じ取ることができ感動した。

開会式

開会式

和歌披講

**◇その他**

●コロナ対策の中、実行委員に感謝したい。
●知事、市長の来席、コロナ禍での開催実現など運営側の難しい判断もあったと思うが、素晴らしいオープニングだった。
●初めて研究集会に参加した。吉田先生をはじめ、大会実行委員の皆様の私学教育に対する熱い思いを知り、改めて私学が一丸となり私学教育を盛り上げ、子どもの育成に精進しようと思った。
●オーケストラ演奏、記念講演、和歌披講、懇談会アトラクションなど京の文化、伝統文化に触れ、一連のテーマに沿った流れで素晴らしい運営であったと敬意を表したい。
●知事・市長の両名とも参加され、京都の意気込みを感じた。
●準備から実施に至るまで、おもてなしの心の行き届いたすばらしい会だった。
●私学であるからこそ、できる教育活動があるのだということを改めて再認識させられた。さらに常に視野を広げ、より良い情報を取り入れ、前進しようとする心、現状に満足することなく、研修、学習を繰り返し、本校教職全員が子ども達のために考える姿を大切にしていきたい。
●コロナ対策も万全にされ、内容についても全国集会、京都大会らしい内容で非常に好印象である。

第２日「部　会」

**◆私学経営部会**

**基調講演（ウスビ・サコ　京都精華大学学長）**

●多くの学びがあった。日本の教育改革の方向性が示されていたことを生かしていきたいと思わされる内容だった。
●感動がまだ止まらない。現在、私が話している事の共通点より方向性の確認ができた。しかし、深さが違う。生徒と世界を飛び回りたい。
●グローバルとローカルの概念を意識し、いろいろな見方を勉強させてもらった。
●「グローバル」という概念を見直し、まず、自分の文化をしっかり知ることを生徒にもしっかり伝えたい。多様性の中で日本がどう見られているかというより、どのように共に生きていくかを子ども達と一緒に考えていきたい。
●とても勉強になった。考えさせられる事も多く、今後の学校の方針を見直す検討材料となると思う。
●個のあり方、日本文化のとらえ方、日本の考え方など、考えることが多く、これからの生徒に何を残す（伝える）のかを考えることが多くあると感じた。
●ユーモア溢れる講演に感銘を受けた。特にマリと日本の教育システムの違いは興味深い。
●素晴らしかった。日本がどう見られているか、そこで育つ子ども達がどう見られるか（＝何が不足しているのか）。実体験に基づく説得力のある話、本当に有り難い。
●子ども達の未来についての考え方に共感し、考えさせられる点が多々あった。今後の子ども達の指導に役立てていきたい。
●まさに激動する時代の中でどのような生徒を育てるかの車軸になる話で有意義だった。
●グローバル社会、共生社会の実現に向けて「ダイバーシティ」「個のアイデンティティの確立」の重要性を感じた。先生の著書を通してもっと深くグローバル化に必要な力を学びたい。
●真のグローバル化とは何かを学ばせて頂いた。教育現場でのコミュニケーションの大切さを痛感した。
●「グローバル化」についての話題もご本人ならではの切り口で、しかし、要所はおさえた内容であり、職場に戻って同僚にも伝えておきたい内容であった。
●たくさん示唆のある話であり、特に日本の教育が役割期待や枠にはめてしまい個を尊重できていないという指摘が心に響いた。
●時間を忘れて聞き入った。できれば質疑応答付きでお願いしたい。
●心から納得し、自らが極めて狭い価値観の中で長く生き、それを子ども達に強いてきたことを、深く反省する機会となった。
●グローバル化が進展する中での我々の行動（意識）の原点を示唆頂いた。
●大変感銘を受けた。違いと共に成長すること、多様性を認め学び合うこと、自分の変化を恐れるな、「問い」を立てられる力など生徒に聞かせたい。

**実践報告（藤林昭一　公益財団法人京都私学振興会理事長）**

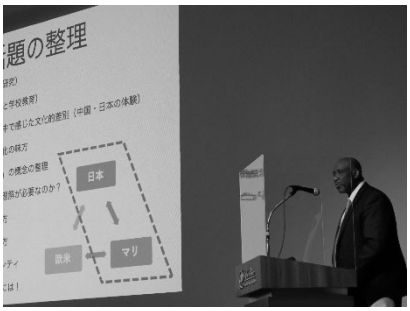
●学校経営を行う上でとても大事な資金の運用の話で経営者の方にとっては貴重な時間であった。
●知らない分野をわかりやすく説明され良い勉強になった。
●私学振興会の私学に対する貢献が非常に大きい事が改めてわかった。
●藤林先生の報告はリーマンショックやコロナショックによる落ち込みもあったが、常に高い運用益をあげられていることに感服した。
●同じ資産運用を行っている我が身と共通言語もあった。運用資金額が大きく格差を感じた。

**パネル・ディスカッション**

●原田学園の取り組みに「今、今の若者に」本当に必要な教育は何かを考えさせられた。大変参考になった（3 人の方のすべてのお話）。三重高校の働き方改革の話も参考になった。
●学校ごと抱える問題は様々だが、似ているものであるし、対策も似通っていると感じた。
●3 校の取り組みが詳しく紹介され、非常にためになった。
●3 校がそれぞれの教育理念をあげられ、特色ある教育を行っていることに私学らしさを強く感じる。
●働き方改革について悩んでいたためとても良かった。
●今の学校現場の運営の中で必要な点について様々な観点から取り上げて頂き参考になった。
●扱われたテーマがタイムリーなものでとても興味深く学ばせてもらえた。特にリアリティのある報告だったので参考になった。

●具体的な事例となり大変参考になった。本音と生の声が有り難い。コーディネーター、司会、パネリストの先生方の呼吸が素晴らしかった。
●コーディネーターの事前予備知識の習得のおかげで各地、各学校の代表の多様な取り組み、コメントを聞くことができた。

私学経営部会開会式
山本綱義・運営委員長挨拶



私学経営部会基調講演
ウスビ・サコ氏

私学経営部会閉会式
長塚篤夫・専門委員長挨拶

**◆教育課程部会**

**講演Ⅰ（田村　学　國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）**
●「深い学び」の意味がよく理解できた。「考える」を具体的に生徒にさせる方法、授業での生かし方がわかった。実践にうつしていきたい。自校でも講演してもらいたい。
●学習指導要領の観点から探究学習の学びの方法について理解できた。学校授業の中でアクティブラーニングの重要と生徒が主体的に学習することが大切であることがよく分かった。
●大学の講義を受けているようだった。とてもわかりやすかった。授業の終末に「ちょっと長めの文字言語」という詞が印象的だった。
●これまでの研修等で薄々気づいている学びの形を変えなければいけないこと、つまり授業の組み立て方を変えなければいけないことを、改めて丁寧に実例を踏まえて教えて頂いた。
●テンポよくわかりやすく、また実践あるのみの感を強く持った。
●田村先生の教員経験に裏打ちされた非常に素晴らしいものであった。新学習指導要領の理念に基づく授業の改革を進めてきてはいるものの、改革の方向性をはっきりお示し頂けたと感じている。
●主体的、対話的で深い学びについてとてもわかりやすかった。新指導要領の完全実施に向けて、いろいろと参考になり、実践につなげることができたらと思う。
●新しい学習指導要領に向けて、改めて取り組むべき内容の確認と課題につき理解を深められた。
●大変濃厚な内容ながら、新学習指導要領の大きなテーマである「主体的・対話的で深い学び」の真意をずばりおさえた講演で大変わかりやすく学ばせて頂いた。
●非常に有意義なものだった。社会に出て必要な能力・技術を身につけさせていくことは大切で教育としてやっていかなければならない。しかし、大学受験が知識中心になっている現在はなかなか難しいという思いもある。
●自分の教科指導のアップデートの方向性が確認できた。

**講演Ⅱ（塩瀬隆之　京都大学総合博物館　准教授）**
●深くて勉強になった。Slido による参加型、素晴らしい。
●批判的な物事の見方で興味深く聞くことができた。
●未来の社会を担う子ども達のために我々大人は学び続け、生徒と共に成長していく視点や実行力が必要だと痛感した。知識を「つなぐ」、問いの質など教育現場に有用な教えを得られ、有意義だった。
●今までに受講したことのないような内容であり改めて考えさせられた。
●いろいろと考えさせられた講演だった。考える糸口を頂き有り難い。本来の願いを見失ってはいけないと思った。

**実践発表Ⅰ・Ⅱ**
**（ノートルダム女学院中学高等学校）**
●素晴らしい実践をしておられて感動したが、できれば発表内容のレジュメを頂きたい。内容の復習ができるので。

●実践されてきたものだけに、非常に感銘を受けた。今後の教育活動のヒント、糸口を頂いた。
**（清教学園中学高等学校）**
●総合学習・探究学習の実践発表は大変参考になった。
●読書→卒論→自己探求、すばらしい実践で感動した。
●論文の取り組みは感動した。図書館の利用、読書のあり方、すべて目から鱗だった。

教育課程部会講演Ⅰ
田村　学　氏

教育課程部会講演Ⅱ
塩瀬隆之　氏

教育課程部会閉会式
森涼・専門委員長挨拶

**◆生徒指導部会**

**講演Ⅰ（原　清治　佛教大学　副学長／教育学部教授）**
●先日本校アカデミー・国際クラスの特別授業でも YouTube を拝見し、生徒も熱心に見ていた。1 つ気になったのは「受け手の価値観によって、嫉妬や妬みの対象となる」と言うところで、すごく日本的な事案だなと思った。欧米などは楽しかったこと、よかったことはどんどん投稿して、それを素直に喜んであげる指導をしているので、投稿した生徒の指導だけではなく、受け手の指導も大切になると思う。
●本校でもコロナ後に不登校生徒の登校ができるようになったり、Zoom に参加できる生徒が増えてきた。不登校の生徒が安心して不登校でいられる学校でありたい。
●昨年 6 月に本校の教職員研修にも講演を頂いた。今における中高生のネットいじめについての現状、良く理解できた。
●現在の生徒達のかかえている問題の話は生徒指導担当者としてとても参考になった。
●「スクールカースト」に対する視点の自分自身のズレを感じさせられた。
●ネット（SNS）でのいじめはスマートフォンの普及によって現代を生きる生徒のコミュニケーション手段の中で起きていることを聞き、学校が管理できる限界、家庭間での指導を含めた学校と保護者の協力関係が必要だと感じた。
●教育現場でのグループ編成における注意すべき点や観察すべきポイントなどすぐにでも実践したい。
●SNS、携帯の問題が生徒のコミュニケーションなど、本質的な問題であることがわかり、今後の考え方として重要なものになった。
●講演内容が本校の話をされているようで、とても驚いた。今後の指導に生かしていきたい。
●とても感銘を受けた。教えて頂いた情報や生徒の心の中の本性を考えなければならないと思った。
●なるほどと感じることが多く、今までを振りかえってみて、なぜそうなったかと理由を考えることができた。また今後の学校教育の中でなぜだろうと感じることや生徒 1 人 1 人の価値観を受け止め、生徒と向き合っていかなければと改めて思った。
●最新の調査結果を元にして先生ならではの切り口でお話し頂き興味深く拝聴した。
●ケータイ（SNS）でないと繋がれない生徒がいると聞き、SNS 規制するだけの指導では扱われなくなることもある危険を感じた。柔軟な考えも必要なのかもしれない。
●ネットいじめ（いじり）は以前から現場で問題になっていたが、具体的なデータに基づいて考えられる原因を示して頂き参考になった。
●様々な場面で聴講しているが、一段と磨きがかかり、特に最新の情報提供や書籍についても興味を持った。ネット社会は日々複雑になっていく一方、それに対応していく能力が必要だと感じた。
●誠に総合力の卓越した充実の時間を提供して頂いた。こうした場面を提供していけるような充実した心境をさらに高めていかなければならないと強く思った。
●現在の SNS によるネットいじめの具体的な掘り下げた分析による話が聞け、とても有意義なもので、ぜひ私の地元でも講演頂きたい。

●大変インパクトのある内容で新しい知識が吸収できた。新しい本も購入させてもらおうと思う。
●とても楽しく聞かせて頂いた。何度かお話を聞かせて頂いているが、毎回内容が更新されており、現状を知ることができた。

**講演Ⅱ（村井勝則　堂島パーク法律事務所　弁護士）**
●校則と懲戒のバランス、教員の調査に関する姿勢、憲法 13 条の大切さ、勉強になった。
●法律上の立場からみても生徒への処分は保護者を含めた慎重な対応が求められると感じた。
●ルールより指導、学校自体がどうあるべきかを考える機会とさせて頂いた。
●「ブラック校則」は存在せず、処分の違法性が争われること、生徒の自己決定権、学習権への配慮が大切であることを学んだ。
●法の視点から校則の捉え直しは興味深く拝聴した。
●弁護士でも見解が違うときがあり、1 つの見解として理解できた。
●法律論を元に校則について考え方、指導方法について的を射たものであった。今後活用したい。
●ブラック校則が議題となり、生徒への指導をしがたく感じることもあった。学校の特色と併せて、整理していくことが必要だ。

**実践発表**
**（京都文教中学高等学校／立命館中学高等学校／同志社国際中学高等学校／ノートルダム女学院中学高等学校）**
●京都文教中学高等学校の実践発表で、SNS のアンケートの集計結果のまとめは生徒指導担当者としてとても参考になった。
●立命館中学高等学校の実践発表は、時間的制約から処分、法の部分を簡潔に説明されたが、もう少し詳しくお聴きしたい。
●立命館中学高等学校と同志社国際中学高等学校の実践発表は、それぞれの切り口で具体的なお話を聞くことができ学びとなった。
●同志社国際中学高等学校の実践発表を聞き、実際に学校見学をしたいと思った。
●同志社国際中学高等学校の実践発表でキリスト教系の学校での生徒指導について話が聞けてよかった。処分ではなく指導をキリスト教系の本校でも徹底していきたい。
●同志社国際中学高等学校の実践発表は考えさせられる面が多くあり、自校とは全く違う校風に驚くと共に校則の考え直しを迫られているようである。
●様々な高校の取り組みは参考になった。
●多様な学校における多様な生徒指導が多様な生徒に対する解答と思った。「公立にない」良いところだ。
●各学校の取り組みを知ることができ、とても参考になった。自校でも校則について話題にはなるものの、部や学校としての動きが難しく、現状に合っているのかと疑問を持つことも多いので、今回のお話を参考に考えて行きたい。

生徒指導部会講演Ⅰ
原　清治　氏

生徒指導部会講演Ⅱ
村井勝則　氏

生徒指導部会研修風景

**◆特色教育部会**

**講演Ⅰ（相　大二郎　学校法人燈影学園 名誉学園長／一燈園中学高等学校 前校長）**
●生徒が中心にある（いる）ことを強く感じた。究極の教育の形に感動した。
●心洗われる思いだった。
●一燈園中高校の教育は、まさに特色教育であると改めて感心させられた。

●学校の創設者の話から、学校全体の話まで一燈園そのものが特色教育の教材になることを感じ、素晴らしいと思った。

**講演Ⅱ（谷口忠大　立命館大学情報理工学部情報理工学科　教授）**
●AI について考えさせられた。自分自身かなり整理できたと思う。
●大変刺激的で今後の教育の方向性を考えさせられた。
●刺激的だった。AI の認識を改め、数学の面白さを伝える所まで生徒達に伝えたい。
●AI の話とビブリオバトル、そして教育へとつながり面白かった。

**実践発表（東山中学高等学校）**
●東山中学高等学校の取り組みに学ぶ点が多かった。やはり他校の実践を知る機会は大切だ。
●学校改革について大変参考になった。今後、本校のスクールポリシー策定に生かしていきたい。
●もっと多くの先が様々な取り組みをされているのだろうと想像する。同じ方向を向くことができるように思いをまとめていく作業のところは管理職の腕の見せ所だろう。
●参考になることがあまりにも多くて持ち帰って考えたい。

**研究協議（全体会）**
●他校の特色教育の内容を聞くことができてよかった。
●各校の様々な取り組みに接することにより、自校でも参考になることも多く、情報を共有できる良い機会だった。
●各学校の発表を聞いて、自校を振りかえって危機感を覚えた。
●各校がそれぞれの建学の精神に立って特色ある教育をされていることを再認識させて頂いた。今一度、原点に立ち返り、自校の教育にあたっていきたい。
●研究協議で各校の特色ある教育内容を紹介して頂けたのは参考になる。
●多くの学校の実践を聴くことができ、自校での取り組みのヒントを得ることができた。
●実践発表と各校での取り組みは大変参考になりました。

特色教育部会講演Ⅰ
相　大二郎　氏

特色教育部会講演Ⅱ
谷口忠大　氏

特色教育部会実践発表
澤田寛成　氏

## ◆グローバル教育部会

**講演（佐藤賢一　京都産業大学総合生命科学部生命システム学科教授）**
●「問いづくりを設計し、実践する」、主体的、対話的で深い学びに通じる興味深い内容だった。
●問いを立てる大切さがよく分かった。今後の授業で生かしていきたい。
●素晴らしかった。「探究」を進めていく上での大きなヒントが得られた。
●本当にためになる講演だった。本校教職員にも同席して欲しいくらいだ。
●最初のテスト最悪だった→主体的な学びの必要性を痛感。「問い重ね」は難しい。グループワークは和やかだった。自らに絶えず「問いかける」ことの重要性を教えて頂いた。
●本校の探究活動に活かすことができると感じた。
●今、思い返すと授業内で質問しているのは生徒よりも私からの方が多いと気づくことができた。今後、授業内においても少しでも生徒からの質問が増えるように努力していきたい。
●問を変えることを深化させて学びを進めていく手法について、とても参考となった。
●発問に関するワークショップのノウハウはこれからの授業運営の何か手掛かりになるのではないかと

いう事を考えさせられた。まずは教員がはてなを投げかけるステップから始めれば、インターアクションに富んだ活気ある授業になるのでは。本学の生徒に合う手法を考えていきたい。グループワークに参加し、大学時代に戻った気持ちになった。緊張した。
●探究活動を行う上で非常に具体的で実践レベルでの話だったので有り難い。
●ワークショップで PBL の効果、協働の重要性を改めて認識した。
●自ら問いをつくり、SDGs を理解するテーマの中で、グローバル化とは何かと思った。巷でよく聞く単語だが、真の意味での理解は難しいと。生徒達と共に学びたい。

**実践発表（花園中学高等学校／立命館宇治中学高等学校）**
●実践発表された 2 校はそれぞれユニークな取り組みをされており、国内に留まらず世界を視野に入れた、まさにグローバルな人材を育てる教育を実践されていることがよくわかった。ただ、コロナ禍での実践はさぞ大変なこともあっただろうと想像できる。先生方の一体感が伝わってきた。
●発表される先生方の情熱に感動した。創意工夫し、生徒のことを考えておられる姿勢から学びたい。
●普段中々知る事のない実践や情報を目の当たりにし、これからの学校での活動等に活かしていきたい。
●グローバル教育に向けて幅広い実践発表を拝聴し、本校でも活用させて頂きたい。
●各校いろいろと工夫し、プログラムを実施していることが分かった。

**（花園中学高等学校）**
●禅コースの取り組みは興味深く聞かせて頂いた。
●熱意溢れた、思い切った取り組みに感動した。
●海外大学へ正規入学を目指す姿勢に感服した。京都でグローバル人材を育成する勇気に驚く。
●熱弁であり、話の内容と共に大いに参考になった。
●NIC やオンライン英会話など、私学ならではの紹介があった。自分自身へのスキルアップにもなるので参考にしたい。

**（立命館宇治中学高等学校）**
●積み重ねてこられた質の高い様々な取り組み圧倒された。
●先駆者としての多大な努力をなされていることに敬服した。後発者として真似のできるものではないし、目指すところが本校とは違うという印象だ。
●取り組みのすごさに圧倒された。
●WWL、SDH がリマインドできた。SDG s を通して QFT についての紹介が有り難い。GFT を利用してクラス活動や英語のロールプレイができそうな感じがする。
●国際的な関わりを重視するグローバル教育でなく、生徒の思考をこれからの世界で生き抜いていくことのできるものに成長させるグローバル教育の観点を学ぶことができた。
●特に impressive な取り組みに驚いた。

グローバル教育部会講演
佐藤賢一　氏

グローバル教育部会講演
佐藤賢一　氏

グローバル教育部会研修風景

# 参　加　者　数

総参加者数　３８０　名

**参加者数（部会別・都道府県別）**

**◆部会別参加者数**

| No. | 部会名 | 参加者数 | No. | 部会名 | 参加者数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 私学経営 | １２５ | 4 | 特色教育 | ４４ |
| 2 | 教育課程 | ６５ | 5 | グローバル教育 | ４５ |
| 3 | 生徒指導 | ７２ | | 全体集会のみ | ２９ |
| | | | 計 | | ３８０ |

**◆都道府県別参加者数**

| No. | 都道府県 | 参加者数 | No. | 都道府県 | 参加者数 | No. | 都道府県 | 参加者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 北海道 | 8 | 17 | 石　川 | 2 | 33 | 岡　山 | 0 |
| 2 | 青　森 | 0 | 18 | 福　井 | 0 | 34 | 広　島 | 7 |
| 3 | 岩　手 | 2 | 19 | 山　梨 | 3 | 35 | 山　口 | 0 |
| 4 | 宮　城 | 1 | 20 | 長　野 | 2 | 36 | 徳　島 | 1 |
| 5 | 秋　田 | 1 | 21 | 岐　阜 | １５ | 37 | 香　川 | 1 |
| 6 | 山　形 | 3 | 22 | 静　岡 | 7 | 38 | 愛　媛 | 1 |
| 7 | 福　島 | 1 | 23 | 愛　知 | １７ | 39 | 高　知 | 0 |
| 8 | 新　潟 | 1 | 24 | 三　重 | 3 | 40 | 福　岡 | 8 |
| 9 | 茨　城 | 1 | 25 | 滋　賀 | １８ | 41 | 佐　賀 | 3 |
| 10 | 栃　木 | 2 | 26 | 京　都 | １２８ | 42 | 長　崎 | 5 |
| 11 | 群　馬 | 2 | 27 | 大　阪 | ２９ | 43 | 熊　本 | 1 |
| 12 | 埼　玉 | 3 | 28 | 兵　庫 | １１ | 44 | 大　分 | 5 |
| 13 | 千　葉 | 6 | 29 | 奈　良 | 7 | 45 | 宮　崎 | 1 |
| 14 | 神奈川 | １２ | 30 | 和歌山 | 2 | 46 | 鹿児島 | 1 |
| 15 | 東　京 | ３８ | 31 | 鳥　取 | 8 | 47 | 沖　縄 | 2 |
| 16 | 富　山 | 0 | 32 | 島　根 | １１ | | | |
| 計 | | | | | | ３８０ | | |

# 開催地・研究目標一覧

| 回数 | 開催地 | 主　会　場 | 会　　期 | 参加人員 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 東　京　都 | 宝仙学園中学高等学校 | 昭和 27 年 4 月 27 日～　29 日 | 185 |
| 2 | 東　京　都 | 女子聖学院中学高等学校 | 昭和 28 年 11 月 20 日～　23 日 | 235 |
| 3 | 東　京　都 | 早稲田大学 | 昭和 29 年 11 月 20 日～　23 日 | 283 |
| 4 | 東　京　都 | 東洋大学 | 昭和 30 年 11 月 11 日～　14 日 | 402 |
| 5 | 京　都　市 | 立命館大学 | 昭和 31 年 11 月 9 日～　12 日 | 995 |
| 6 | 東　京　都 | 明治大学 | 昭和 32 年 11 月 22 日～　25 日 | 679 |
| 7 | 名古屋市 | 椙山女学園大学 | 昭和 33 年 10 月 3 日～　6 日 | 857 |
| 8 | 東　京　都 | 法政大学 | 昭和 34 年 11 月 20 日～　23 日 | 846 |
| 9 | 札　幌　市 | 北海道学園大学 | 昭和 35 年 8 月 20 日～　23 日 | 958 |
| 10 | 東　京　都 | 日本大学 | 昭和 36 年 11 月 22 日～　25 日 | 954 |
| 11 | 横　浜　市 | 神奈川大学 | 昭和 37 年 11 月 22 日～　25 日 | 841 |
| 12 | 広　島　市 | 進徳女子高等学校 | 昭和 38 年 11 月 12 日～　15 日 | 993 |
| 13 | 東　京　都 | 学習院大学 | 昭和 39 年 11 月 20 日～　23 日 | 612 |
| 14 | 福　岡　県 | 中村学園女子高等学校 | 昭和 40 年 11 月 21 日～　24 日 | 1,100 |
| 15 | 東　京　都 | 明星大学・明星学苑 | 昭和 41 年 11 月 3 日～　6 日 | 750 |
| 16 | 仙　台　市 | 東北大学 | 昭和 42 年 11 月 5 日～　8 日 | 1,172 |
| 17 | 東　京　都 | 文化女子大学 | 昭和 43 年 11 月 22 日～　25 日 | 1,074 |
| 18 | 大　阪　市 | 相愛学園 | 昭和 44 年 11 月 15 日～　18 日 | 2,294 |
| 19 | 宇都宮市 | 作新学院 | 昭和 45 年 11 月 11 日～　13 日 | 382 |
| 20 | 西　宮　市 | 武庫川学院 | 昭和 46 年 11 月 11 日～　13 日 | 2,513 |
| 21 | 東　京　都 | 昭和女子大学 | 昭和 47 年 11 月 23 日～　25 日 | 764 |
| 22 | 静　岡　市 | 静岡雙葉学園 | 昭和 49 年 11 月 7 日～　9 日 | 926 |
| 23 | 札　幌　市 | 札幌市民会館 | 昭和 50 年 10 月 2 日～　4 日 | 978 |
| 24 | 広　島　市 | 広島市公会堂 | 昭和 51 年 10 月 26 日～　28 日 | 1,216 |
| 25 | 東　京　都 | 千代田女学院中学高等学校 | 昭和 52 年 11 月 16 日～　18 日 | 1,054 |
| 26 | 福　岡　市 | 福岡市民会館 | 昭和 53 年 11 月 7 日～　9 日 | 1,714 |
| 27 | 埼　玉　県 | 埼玉会館 | 昭和 54 年 11 月 20 日～　22 日 | 1,043 |
| 28 | 仙　台　市 | 仙台白百合学園中学高等学校 | 昭和 55 年 10 月 22 日～　24 日 | 1,533 |
| 29 | 京　都　市 | ＫＢＳ京都放送会館 | 昭和 56 年 11 月 12 日～　14 日 | 1,923 |
| 30 | 東　京　都 | 学習院記念会館 | 昭和 57 年 11 月 17 日～　19 日 | 1,370 |
| 31 | 福　井　市 | 金井学園 | 昭和 58 年 10 月 26 日～　28 日 | 992 |
| 32 | 札　幌　市 | 札幌市民会館 | 昭和 59 年 9 月 26 日～　28 日 | 1,040 |
| 33 | 山　口　市 | 山口市民会館 | 昭和 60 年 10 月 31 日～11 月 2 日 | 1,210 |
| 34 | 福　岡　市 | 福岡市民会館 | 昭和 61 年 11 月 12 日～　14 日 | 1,696 |
| 35 | 千葉市ほか 4 市 | 千葉県文化会館 | 昭和 62 年 11 月 11 日～　13 日 | 1,867 |
| 36 | 新　潟　市 | 新潟県民会館 | 昭和 63 年 10 月 19 日～　21 日 | 1,651 |
| 37 | 大阪市ほか 2 市 | 大阪国際交流センター | 平成 元 年 10 月 25 日～　27 日 | 2,530 |
| 38 | 東　京　都 | 学習院記念会館 | 平成 2 年 10 月 24 日～　26 日 | 1,773 |
| 39 | 愛　知　県 | 愛知県勤労会館 | 平成 3 年 10 月 23 日～　25 日 | 1,473 |
| 40 | 札　幌　市 | 札幌ガーデンパレス | 平成 4 年 9 月 30 日～10 月 2 日 | 1,123 |
| 41 | 岡　山　市 | 岡山シンフォニーホール | 平成 5 年 10 月 27 日～　29 日 | 1,306 |
| 42 | 熊　本　県 | 熊本市民会館 | 平成 6 年 10 月 26 日～　28 日 | 1,170 |
| 43 | 神奈川県 | 国立横浜国際会議場 | 平成 7 年 10 月 25 日～　27 日 | 2,134 |
| 44 | 山　形　県 | 米沢女子高等学校 | 平成 8 年 10 月 16 日～　18 日 | 829 |
| 45 | 京　都　市 | 京都会館第一ホール | 平成 9 年 11 月 12 日～　14 日 | 1,222 |
| 46 | 東　京　都 | 東京国際フォーラム | 平成 10 年 11 月 4 日～　6 日 | 1,422 |

| 回数 | 研 究 目 標 |
|---|---|
| 1 | |
| 2 | |
| 3 | |
| 4 | |
| 5 | |
| 6 | |
| 7 | |
| 8 | 私学教育本質の究明・明日の教育体制の整備・全人教育の再検討 |
| 9 | 私学教育の将来と教育課程改訂 |
| 10 | 中学校及び高等学校の教育課程及び改訂に伴う問題点の研究・現在の世情に即応する青少年の指導のあり方<br>・私学教育の充実振興を目指す諸方策の討議 |
| 11 | 日本の教育を前進せしめる私学の使命を果たそう―新指導要領の適切な展開と私学プランについて― |
| 12 | 私学の教育を向上させ、日本の教育を前進させよう |
| 13 | 中等教育革新のために |
| 14 | 私学における教育はいかにしたらその実効を挙げることが出来るか |
| 15 | 私学教育の自由とその限界 |
| 16 | 私学教育の特性を発揮し、その内容の質的転換を図る |
| 17 | 魅力ある私学中高教育の推進のために |
| 18 | 教育の現代化に適応する私学のあり方 |
| 19 | 新教育課程の私学教育における展開 |
| 20 | 1970 年代の私学教育の展開を如何にすべきか |
| 21 | 1970 年代の私学教育の展開―特色ある私学教育とその実践― |
| 22 | 激動期における私学教育の原点を求めて |
| 23 | 昭和 50 年代の私学教育の展開―私学の自主性を高め教育の充実発展をはかる― |
| 24 | 創造的私学教育の展開とその充実―ひとりひとりのよい資質をのばすために― |
| 25 | 教育の転換期に立って私学教育を考える－新教育課程をめぐる今日的課題－ |
| 26 | 新教育課程への移行と実践－私学教育の独自性と充実をはかる－ |
| 27 | 新教育課程実践の道－建学の精神と教師の役割－ |
| 28 | 私学の使命と特色教育－新教育課程の展開－ |
| 29 | 今日の中等教育における私学の役割 |
| 30 | より豊かな私学教育の創造を |
| 31 | 次代を担う私学教育の独自性と公共性 |
| 32 | 次代を担う私学教育の充実と発展 |
| 33 | 明日をひらく私学教育－私学の原点に立って－ |
| 34 | 豊かな私学教育の展開 |
| 35 | 国際化と近代化を志向する私学教育の発展 |
| 36 | 時代に対応する魅力ある私学教育を求めて |
| 37 | 21 世紀に向けての豊かな私学教育の創造を求めて |
| 38 | 社会の期待に応える私学教育の推進 |
| 39 | 豊かな人間性の育成を目指す私学教育の推進 |
| 40 | 新しい時代に対応する創造的な私学教育をめざして |
| 41 | たしかな私学教育をめざして |
| 42 | 活力ある私学のあり方を探る |
| 43 | 21 世紀に向かって躍進する私学教育 |
| 44 | 教育改造への試み |
| 45 | 新しい時代を拓く私学教育の創造と発展 |
| 46 | 民間活力としての私学教育を |

| 回数 | 開催地 | 主　会　場 | 会　　期 | 参加人員 |
|---|---|---|---|---|
| 47 | 静　岡　市 | 静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ) | 平成 11 年 11 月 10 日～　12 日 | 1,042 |
| 48 | 札　幌　市 | 札幌ガーデンパレス | 平成 12 年 10 月 4 日～　6 日 | 862 |
| 49 | 徳　島　市 | 徳島文理大学徳島校 | 平成 13 年 11 月 15 日～　17 日 | 827 |
| 50 | 宮　崎　市 | 宮崎観光ホテル | 平成 14 年 11 月 6 日～　8 日 | 928 |
| 51 | 水戸市・土浦市 | 茨城県立県民文化センター | 平成 15 年 10 月 29 日～　31 日 | 1,590 |
| 52 | 福　島　県 | 郡山市ホテルハマツ | 平成 16 年 10 月 28 日～　29 日 | 774 |
| 53 | 神戸市ほか 3 市 | 神戸ポートピアホテル | 平成 17 年 11 月 10 日～　11 日 | 1,383 |
| 54 | 東　京　都 | 新高輪プリンスホテル国際館パミール | 平成 18 年 11 月 9 日～　10 日 | 1,354 |
| 55 | 石　川　県 | 石川県立音楽堂コンサートホール | 平成 19 年 10 月 25 日～　26 日 | 791 |
| 56 | 札　幌　市 | 札幌ガーデンパレス | 平成 20 年 10 月 9 日～　10 日 | 722 |
| 57 | 松江市・米子市 | 島根県民会館 | 平成 21 年 10 月 22 日～　23 日 | 505 |
| 58 | 佐　世　保　市 | ウインズ佐世保ゲルックホール | 平成 22 年 10 月 14 日～　15 日 | 621 |
| 59 | 高　崎　市 | 群馬音楽センター | 平成 23 年 10 月 27 日～　28 日 | 437 |
| 60 | 盛　岡　市 | ホテルメトロポリタン盛岡 NEWWING | 平成 24 年 10 月 11 日～　12 日 | 501 |
| 61 | 大　阪　市 | シェラトン都ホテル大阪 | 平成 25 年 10 月 24 日～　25 日 | 621 |
| 62 | 東　京　都 | 新高輪プリンスホテル国際館パミール | 平成 26 年 10 月 16 日～　17 日 | 1,023 |
| 63 | 長　野　市 | ホテル国際 21 | 平成 27 年 10 月 29 日～　30 日 | 592 |
| 64 | 札　幌　市 | 京王プラザホテル札幌 | 平成 28 年 10 月 27 日～　28 日 | 587 |
| 65 | 松　山　市 | 松山全日空ホテル | 平成 29 年 10 月 19 日～　20 日 | 542 |
| 66 | 鹿　児　島　市 | 城山ホテル鹿児島 | 平成 30 年 10 月 25 日～　26 日 | 681 |
| 67 | 宇　都　宮　市 | ホテル東日本宇都宮 | 令和 元 年 10 月 17 日～　18 日 | 603 |
| 68 | 秋　田　市 | 秋田キャッスルホテル | 令和 2 年 10 月 22 日～　23 日 | 334 |
| 69 | 京　都　市 | 国立京都国際会館 | 令和 3 年 10 月 21 日～　22 日 | 380 |
| 70 | 岐　阜　市 | 長良川国際会議場 | 令和 4 年 10 月 20 日～　21 日 | (600) |

| 回数 | 研 究 目 標 |
|---|---|
| 47 | 21 世紀の私学教育の充実を目指して |
| 48 | 生徒と教師のロマンを実現する私学教育 |
| 49 | 新時代の私学教育－中国・四国からの発信－ |
| 50 | 感性豊かな人間を育てる私学教育 |
| 51 | 明日の私学教育を求めて－伝統と創造－ |
| 52 | 特色ある私学教育を求めて－建学の精神と国際化－ |
| 53 | 魅力ある私学教育の創造を目指して |
| 54 | 未来を担う人材育成を私学教育 |
| 55 | 特色ある私学教育の創造 |
| 56 | 時代を見すえ、未来を拓く私学教育 |
| 57 | これからの人材育成をめざして―悠久の地から私学教育の未来を考える |
| 58 | 時代を創造する人材の育成をめざして―私学教育の挑戦― |
| 59 | 日本の未来を拓く私学教育 |
| 60 | 未来を拓く私学教育～人間力を養い人格の完成を目指す～ |
| 61 | 私学教育の魅力を探る～夢探し夢実現を目指して～ |
| 62 | 21 世紀の教育を考える～グローバル教育を目指して～ |
| 63 | 新しい時代を担う魅力ある私学教育～安心と信頼に裏打ちされた私学教育の充実を目指して～ |
| 64 | 今こそ私学～明日への挑戦～ |
| 65 | 時代を先取りする私学～こころざしは高く、根は深く～ |
| 66 | 新時代に向けたさらなる私学の躍進 |
| 67 | 人間力（コンピテンシー）を高める私学教育 |
| 68 | 新しい時代のリーダーを育てる私学教育 |
| 69 | 世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～ |
| 70 | これからの時代に対応する私学教育の使命～私学独自の教育の再構築～ |

# 編　集　後　記

思い起こせば 2 年前の 10 月、秋田の先生方から心温まるご歓迎をいただき、2 日間にわたる全国私学教育研究集会秋田大会の成功を京都の先生方と共に目の当たりにしました。そして、1 年後は私たちが全国の皆様をお迎えすることを心に刻み帰洛した時のことが思い出されます。そして、日本の私学教育のさらなる発展を期して、近畿地区私立中学高等学校連合会と京都私学 40 校の先生方が中心となり、京都大会開催に向け準備がはじまりました。当初から、私たちがこれまでに経験したことのない厳しい新型コロナウイルスの感染状況が続く中ではございました。また、京都でも 8 月から 9 月にかけて緊急事態措置が発令されており、全国から皆様をお迎えできるのだろうか、と憂慮する日々を過ごしておりました。しかしながら、必ず京都大会は開催する、という関係者の強い志のもと着々と計画が進められました。10 月に入り大会に時を合わせたように、コロナの状況は日々好転し、開催当日 500 名を超える皆様をお迎えできた時は本当に胸が熱くなる思いでした。これも企画や運営に携われた方々から、詳細にわたる実施計画と共に、感染対策に至るまでご指導をいただきましたおかげでございます。改めまして感謝申し上げます。

「世界を見つめ、未来に挑戦～私学の先進的精神は時代を超えて～」を京都大会のテーマとし、京都ならではの、歴史と文化の美、そして京都の秋の風情に浸っていただきたい思いがございました。全体会では、京都府私立学校活動紹介として、京都私学を代表する伝統ある洛星中学高等学校のオーケストラ部の皆様の演奏、また、京都光華女子中学高等学校の皆様の和歌披講により、生徒たちの清楚な中に生き生きとした活動をご覧になっていただけたことと思います。冷泉貴実子先生では「京の文化」そのものをご講演いただける貴重な機会にも恵まれました。

2 日間の大会を通して、私たちは厳しい今だからこそ、この困難に自らが立ち向かう情熱を持ち、決してあきらめることなく周りの仲間を敬い、そしてチームを築く一人として、共に汗を流さなければならないことを、ご教示いただけたことと思います。先ずは私たち私学人が、創立者の建学の精神を体し、逆境に立ち向かって在野の精神を持ち、そして今の時代を読み、自らが新たな教育に挑もうとする進取の精神を持ち続けなければならないと、決意を新たにしました。

大会の成果として研究集録が完成いたしました。今後の皆様の教育実践のお役に立てていただけましたら幸甚でございます。

結びにあたりまして、本大会の開催にあたり、すべての関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

来年度、岐阜大会で皆様にお会いできますことを楽しみにいたしております。

令和 3 年度全国私学教育研究集会京都大会
副実行委員長　佐々井　宏　平
（京都府私立中学高等学校連合会会長）

# 令和３年度
# 全国私学教育研究集会　京都大会
# 研究集録

印　刷　令和４年３月

発　行　令和４年３月

発行人　一般財団法人日本私学教育研究所
所　長　　平　方　邦　行

発行所　一般財団法人日本私学教育研究所
〒102-0073　東京都千代田区九段北４丁目３番地８　市ヶ谷 UN ビル６階
電話　(03)3222-1621

編　集　一般財団法人日本私学教育研究所

〒102-0073　東京都千代田区九段北４丁目３番地８　市ヶ谷 UN ビル６階
電話　(03)3222-1621

本研究集録についての著作権はそれぞれの講師・発表者・報告者等および一般財団法人日本私学教育研究所に帰属します。著作権法により認められる場合を除き、複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等の行為は著作権法により禁止されています。